

二〇二二年(令和四年)三月

東京阿部家資料

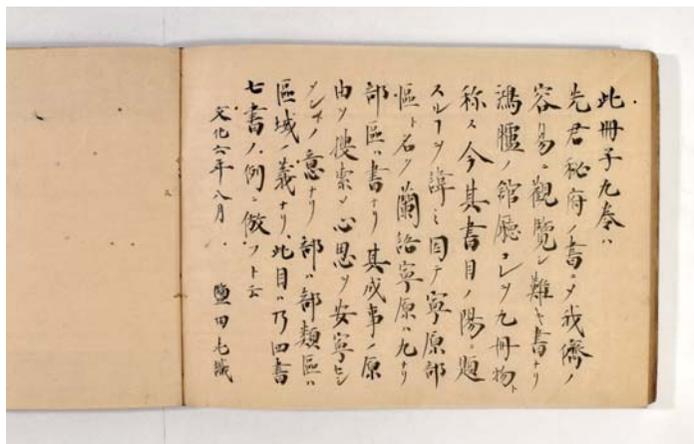
文書編(12)

福山市教育委員会

『寧原部区』（御奏者番心得九冊物写）



『寧原部区』九卷跋文



目次

凡例

『奏者番心得九冊物』について

『奏者番心得九冊物』 一卷

御奏者番系図 一 1

申合之部 二 13

相伴之順留 三 94

挿入 図 117

凡 例

- 一 旧福山藩主阿部家（東京阿部家）より福山市に寄贈いただいた資料から、『御奏者番心得九冊物』の内第一冊目を「一巻」として翻刻・収録した。「二巻」以降も順次発行予定）
- 一 文書の収録については、原則として原文の形に添うように努めたが、読者の便を図るため、次のように編集した。
 - 1 漢字の字体については、原則として新字体を用いた。別体・旧字・異字等はつとめて通行の表記に統一したが、そのまま用いたものもある。
 - 2 旧仮名遣い、および「ゑ（より）」は、原文のまま記した。
 - 3 平出・欠字は省略した。
 - 4 誤字は原則原文のまま記し、行間に括弧で適切な文字を記した。
- 5 朱書・朱線については、灰色で表した。
- 6 読者にわかりやすくするため、読点（、）を付けた。
 - 一 文中の図は、編集の都合上、巻末にまとめて掲載した。
 - 一 本書の解説は、つぎの東京阿部家文書解説グループのメンバーに協力いただいた。
小林浩二 佐藤恭子 藤井和枝 藤井直子
 - 一 本書の編集は、福山市経済環境局 文化観光振興部 文化振興課 まなびの館ローズコム 歴史資料室の 鐘尾光世・桑田直美・向本啓二があたった。

『御奏者番心得九冊物』について

「奏者番」は、江戸幕府の老中配下に置かれた役職で、慶長年間（江戸幕府草創期）の創設といわれ、寛永期（三代將軍家光の頃）に幕政機構が整備されると寺社奉行も兼務するようになった。一万石以上の譜代大名の中から二十〜三十人程度任命され、日番で將軍と諸大名・旗本などの仲介や、江戸城中での典禮の差配にあたった。具体的な仕事内容は本書の中で微に入り細を穿った記述がなされているのでここでは省くが、そつなく務めるには相應の才覚を要したことが察せられる。譜代大名はここを振り出しに、若年寄、大坂城代、京都所司代あるいは老中などの重職に昇っていくことになる。別に、將軍の世継ぎに対して同じ仕事を担う西丸奏者番があった。

本書『御奏者番心得九冊物』は譜代大名で福山藩主となった阿部家に伝世した奏者番の先例集、いわゆるマニュアル本である。家康に付き従つて領知を得た正勝を初代として数えると、二代正次、七代正右、八代正倫、九代正精、十代正寧、十一代正弘が奏者番

を務め、正次・重次（三代）・正右・正倫・正精・正弘が老中に就いている。奏者番を務めた大名家では、それぞれに先例や心得の留書を所蔵して情報交換していたようだが、その内容は幕府儀典にかかわる機密だったためか現存が明らかになっているものは少ない。これらの記録を九冊にまとめて編纂されたものは「九冊物」とも呼ばれた。本資料は、主に宝暦〜明和（正右〜正倫の代）の先例が、文章だけでなく場面に応じた席図も挿入された全九冊の記録で、かなり使い込まれた様子が窺える。

東京阿部家資料には、他にもう一組、福山藩士で寺社役の塩田屯みつるによる写本が存在している。塩田は文化六年（一八〇九年）の日付が入る跋文で、「九冊物」は「先君秘府ノ書」で自分には容易に閲覧がたいものであり、その書目を表題にすることははばかられるので、オランダ語で九を意味する *negen* と、書を意味する *boek* からこれを「寧原部区」と名付け、書目は四書七書の例に倣つた、と書いている。なお『寧原部区』では、一卷の「御奏者番系図」がその後天保五年（一八三四年）まで増補されている。

今回収録した資料は『御奏者番心得九冊物』の一冊目で、「御奏

者番系図一」「申合之部二」「相伴之順留三」が載る。なお、資料中に多く見える「廻状」は、当日の勤務や儀式の内容を同役衆と共有するために回覧した文書のことである。

全九巻の項目立ては次の通りで、順次翻刻・刊行する予定である。

帙 御奏者番心得九冊物 阿部主計頭

一卷 御奏者番系図、申合之部、相伴之順留

二巻 御三家之部、御三家使者並家臣之部、松平加賀守之部、喜連

川之部、松前之部、吉川左京部、山村甚兵衛・千村平右衛門之部、米良主膳部、加藤図書助部、長岡帯刀之部、本多内蔵助部、御門跡方部、両本願寺部、増上寺部、寺社之部

三巻 当番勤方並心得、御番之事、助番之部、当番構無之部、御番

割之部、病氣之節取扱部、出仕心得並御機嫌窺、出仕断之部、新役心得、火事之部、雷地震之節心得之部、差扣之部、雑之部

四巻 披露致候席之覚、御太刀畳目並進物置所之部、披露仕様並心得、御太刀披露之部、長袴披露之部、半袴披露之部、披露割之部並手札心得、御三家陪臣披露、寺社披露之部

五巻 元旦ヨリ二月朔日迄之部附四月之事、上巳端午七夕八朔重

陽、歳暮勤方之部、月次御礼日当番勤方之部、御表出御無之御老中御逢之部、公家衆参向之部、御能之部、参勤之部、御暇之部、参勤御暇其外不時御礼有之節之部、元服之部、献上物之部

六巻 御老中所司代御城代使者之部、家督継目新知御礼以使者申上

候部、婚姻御礼以使者申上候部、隠居之御礼以使者申上候部、遺物以使者差上候部、以使者献上物之部、一紙目錄之部、半切之部

七巻 御内書之部、拝領物之部、御老中被仰渡候節居所之部、被下

物之節居所部、御鷹之鳥拝領之部、惣出仕取合之部、席障

八巻 御老中御逢候使者之部、御老中使者御逢候時居所之部、当番謁候使者之部、年始御祝儀以使者申上候部、年始端午七夕八朔重陽歳暮御祝儀差合附延引以使者申上候部、御不予御快然之御祝儀献上物之部、口切御茶以使者差上候部、参勤之御礼病氣付以使者申上候事、在着御礼以使者申上候部

九巻 上野増上寺其外御城外御規式御成之部、西丸御成、御鷹野御

成之部、御名代之部、上使之部、参勤御暇上使勤方之部、病氣御尋御吊上使勤方之部、相伴之部

御奏者番心得九冊物 一卷

御奏者番系図一

申合之部二

相伴之順留三

御奏者番系図

駿河後江戸元御書院番頭

駿河後江戸

台徳院様御代元大番頭

元御書院番頭

后執政

元御書院番頭

肥前嶋原城江所替付而当役御免

元大番頭

大猷院様御代元御書院番頭、后執政

酒井讚岐守忠勝

元大番頭兼御留守居

松平大隅守重利

寛永九申年元大番頭、后寛永十二亥十一

堀市正利重

月九日寺社奉行兼

同年十一月十五日元大番頭

水野備後守元綱

寛永十九年十一月十五日元大番頭後御免

松平伊賀守忠晴

寛永十四丑元大番頭、後寛永十二亥十一

安藤右京進重長

月九日寺社奉行兼

寛永十五寅四月廿四日元若年寄、後寛文

太田備中守資宗

七未十二月十八日御免

同年同日元若年寄後執政

酒井備後守忠朝

同年四月廿五日、后執政

寛永十九年十二月十五日被仰付

松平和泉守乘寿

同年十一月十八日

松平大膳亮忠重

正保二酉六月廿一日、后万治元戊七月四

井上河内守正利

日寺社奉行兼

慶安四卯六月十三日

酒井河内守重忠

同年同日、延宝七未九月六日駿州田中城

酒井日向守忠能

被下当役御免

同年同日、万治二亥二月三日城地被下之当

増山弾正忠正利

延宝六年二月六日御免
寛文四辰正月晦日、延宝四辰十月廿五日御

安藤対馬守重治

役御免

承応元辰六月十五日若年寄

朽木民部少輔植綱

赦有院様御代寛文四年御朱印御用勤、寛文

永井伊賀守尚庸

万治元戌七月四日元大番頭、万治二亥三月

松平出雲守勝隆

五巳二月十八日御奏者番被仰付

朽木伊予守植昌

廿一日御免

同年同日兼寺社奉行、寛文元丑十二月十八

板倉阿波守重郷

御免

日死去

万治二亥二月廿一日、后御免

青山大膳亮幸利

役被召放

井上相模守正任

同年同日、貞享三寅十月九日御免

松平備前守正信

寛文十戌四月十三日、后延宝六年三月十二

松平山城守重治

万治三子三月廿三日、延宝八申十二月十五

土井兵庫頭利長

日寺社奉行兼、天和元酉十一月廿五日御免

本多山城守忠利

日御免

同年同日、后寛文十戌二月廿二日若年寄

堀田備中守正俊

行兼、延宝四辰二月廿五日御免

改長門守
戸田伊賀守忠昌

寛文元丑六月十四日、后寛文三卯八月十六

土井能登守利房

寛文十一亥正月廿五日、后延宝四辰四月三

戸田伊賀守忠昌

日若年寄

寛文二卯十月廿六日御奏者番被仰付、赦有

小笠原山城守長頼

延宝元丑六月十二日、后延宝四辰七月廿六

太田撰津守資次

院様御代寛文四年御朱印御用勤、后寛文六年七月十三日兼寺社奉行、

日寺社奉行兼、后延宝六年六月十九日大坂御城代

延宝四辰七月廿六日、同五巳三月十五日死 土井信濃守利直

延宝五巳六月廿一日兼寺社奉行、后延宝八 板倉石見守重道

申九月廿一日執政

同年七月三日、后天和元酉十一月廿九日寺 秋元撰津守喬朝

社奉行兼、后天和二戌十月十六日若年寄

延宝七未九月十三日、后天和二戌三月廿八 久世出雲守重之

日御免

同年同日、后貞享元子七月十日大坂御城代 土屋相模守政直

同年十一月朔日、延宝八申六月廿六日被殺 永井信濃守尚長

害

延宝八申閏八月十一日兼寺社奉行、后天和 阿部美作守正武

元酉三月廿六日執政

天和元酉二月十六日兼寺社奉行、貞享二丑 水野右衛門大夫忠春

五月廿一日御免

同年四月九日兼寺社奉行、后天和元酉十一 稻葉丹後守正通

月十五日京都諸司代

同年八月十六日、貞享元子十二月廿五日御 酒井^{改速江守}鞞負佐忠隆

免

同年同日、后貞享二丑七月廿二日寺社奉行 大久保安芸守忠增

兼、后貞享四卯十二月十八日若年寄

同年同日常憲院様御代初、貞享元年御朱印 牧野因幡守富成

御用勤、元禄六酉八月死

同年十一月廿九日元大番頭兼寺社奉行、同 酒井大和守忠国

三亥正月十一日死去

天和二戌二月十九日元若年寄、后貞享四卯 松平因幡守信衛

十月十三日大坂御城代

同年三月廿二日元若年寄五千石御加恩二而 石川美作守乘政

被仰付小諸城被下、貞享元子十月二日於在所死去

天和三亥二月七日、元禄十丑五月朔日御免 土井周防守利益

同年七月十八日、貞享三寅二月三日御免 堀田豊前守正国

貞享二丑六月十日、后貞享二丑八月九日若 太田^{改撰津守}備中守資直

年寄

同年同日、元禄十二卯六月廿二日依願御免 松平对馬守照重

同年同日元若年寄、貞享三寅二月三日御免 堀田对馬守正英

同年七月廿二日、后貞享四卯五月十八日寺 戸田能登守忠真

社奉行兼、元禄十二卯閏九月父山城守家督被下之御免

改讀岐守

同年九月十四日再任、后宝永元申十月九日 久世出雲守重之

寺社奉行兼、后寛永二丑九月廿一日若年寄

同年同日、后元禄七戌七月十五日寺社奉行 永井伊賀守尚富

兼、后宝永元申十月朔日若年寄

貞享三寅十一月廿七日、后元禄十二卯十月 青山播磨守幸明

十三日寺社奉行、元禄十五年六月五日加役御免奏者番如元、宝永七子

閏八月十八日死

同年同日、后元禄二巳二月六日若年寄、同 三浦耆岐守直次

年五月二日当役江婦役、享保八卯十月十一日仍願御免

同年同日、后元禄三年七月十日若年寄 内藤右近大夫政直

侍從

貞享四卯三月十八日兼寺社奉行、元禄二巳 酒井河内守忠明

七月廿一日依願御免

元禄二巳五月二日再任元若年寄、享保八卯 三浦耆岐守直次

十月十一日依願御免

同年八月三日兼寺社奉行、后元禄三年十月 加藤佐渡守明英

改讀中守

廿一日若年寄

元禄三年十二月三日、后元禄四未正月十一

日大坂御城代

同年同日、后元禄七戌二月十九日若年寄

同年同日兼寺社奉行、后元禄四未閏八月廿

六日所司代

元禄四未二月三日元御近習、元禄四未五月

廿八日御免

同年十一月廿五日兼寺社奉行、元禄七戌十

一月三日仍願御免

元禄五申八月十五日元奥詰衆、宝永五子正

月死

同年同日元奥詰衆、宝永五十二月廿九日依

願御免

元禄七戌十一月廿八日元御側衆、元禄十二

卯三月廿六日御免

同年同日、后元禄九子十月朔日寺社奉行兼、

松平美作守直高

改丹後守又改日向守

松平志摩守重實

土岐伊予守頼隆

松平彈正忠正久

小笠原佐渡守長重

島山民部大輔基玄

侍從

松浦耆岐守任

田村右京大夫宗永

改因幡守

黒田甲斐守長重

松平美作守直高

松平志摩守重實

松平美作守直高

松平志摩守重實

松平志摩守重實

松平志摩守重實

松平志摩守重實

松平志摩守重實

松平志摩守重實

元祿十五年閏八月十九日依願御免

元祿八亥十二月廿二日、后元祿九子十月朔 井上大和守正通

日寺社奉行兼、后元祿十二卯十月六日若年寄

同年同日、元祿十丑八月十三日御免

改駿河守
内藤丹後守守清

元祿九子三月十八日再任元若年寄、宝永三 改備前守 松平彈正忠正久

戌十一月廿六日西丸附奏者番被仰付之、文昭院様御代初正徳二年御朱

印御用勤

元祿十二卯三月廿八日、后宝永元申十月朔 三宅備前守康雄

日寺社奉行、后宝永七寅九月廿一日依願御免

同年同日、后元祿十二卯閏九月廿八日寺社 阿部飛驒守正喬

奉行、宝永元申十月廿九日父豊後守家督被下之兩役御免

元祿十五年六月十日元大番頭兼寺社奉行、 本多彈正少弼忠晴

正徳三巳閏五月七日依願御免

同年十二月十五日、享保元申十二月死

宝永元苗字官改之 初石川能登守
松平兵庫頭乘紀

同年同日、正徳三巳七月廿三日仍願御免

師範 阿部飛驒守
池田丹波守政倫

宝永元申十月九日、宝永三戌十一月廿六日 安藤長門守重行 改右京亮

西丸附奏者番被仰付、后宝永六丑十一月廿三日寺社奉行、文昭院様御

代初正徳二年御朱印御用勤、正徳三巳三月十二日加役御免奏者番如元、

享保二酉十月五日再寺社奉行兼、享保三戌八月四日大坂御城代 改山城守又改伊予守

同年同日、后正徳三巳三月廿八日寺社奉行 土井式部少輔利意

兼、后享保九辰閏四月十一日依願兩役御免

宝永二酉正月十一日、后正徳元卯十二月廿 水野監物忠之

三日若年寄

同年同日、宝永三戌十一月廿六日西丸御奏 松平宮内少輔忠尚

者番被仰付、享保三戌十一月廿六日依願御免

同年九月廿一日兼寺社奉行、正徳元卯六月 鳥居伊賀守忠英 初播磨守

廿七日若年寄

同年同日兼寺社奉行、宝永五子五月廿六日 堀左京亮直利 改丹後守

兩役御免

宝永五子閏正月十五日、宝永六丑死去 板倉周防守重冬 師範 池田丹波守

同年同日、后正徳元卯十二月廿三日寺社奉 松平对馬守近禎 改相模守

行兼、享保十巳八月廿四日死去

同年同日、后正徳四年九月六日寺社奉行兼、 石川近江守総茂

有徳院様御代初享保二年御朱印御用勤、后享保二酉九月廿七日若年寄

宝永七寅九月廿一日兼寺社奉行、后正徳四 森川出羽守重令

午九月六日若年寄

宝永八卯正月十一日、有徳院様御代初享保

朽木民部少輔植元

二年御朱印御用勤、享保六丑十一月死去

同年同日元大番頭、元文元辰十月年寄候二

師 範池田丹波守
高木主水正正陳

付御役願同廿六日留、元文六酉二月五日死去

正徳四年九月六日元詰衆、后享保十四酉二

松平伊豆守信祝

月二日大坂御城代

同年同日元詰衆、享保三戌八月四日兼寺社

始 讚岐守
牧野因幡守英成

奉行、后享保九辰十二月十五日京都諸司代

正徳五未二月十八日元御側衆兼寺社奉行、

井上遠江守正長

享保元申九月廿八日依願兩役御免

享保三戌八月四日元詰衆兼寺社奉行、享保

酒井修理大夫忠音

七寅正月三日被叙四品兩役御免

享保四亥正月十一日元詰衆、享保十六亥六

内藤丹波守政森

月二日依願御免

同年同日元詰衆、后享保八卯三月六日若年

松平能登守乘賢

寄

同年同日元御譜代、后元文四未八月十五日

師 範松平備前守 改和泉守
丹羽式部少輔薰氏

大坂御定番

享保七寅十一月廿八日元柳之間、后享保十

仙石信濃守政房

九寅六月六日寺社奉行兼、享保二十卯四月廿三日死去

同年同日元詰衆、元文六酉四月九日依願御

土井甲斐守利知

免

享保八卯三月廿五日元詰衆兼寺社奉行、后

四 品
黒田豊前守直邦

享保十七子七月廿九日西丸執政

享保八卯三月廿五日元詰衆、享保十三申三

土屋但馬守陳直

月十一日依願御免

同年同日元御譜代、享保十巳九月十一日寺

太田備中守資晴

社奉行兼、后享保十三申五月七日若年寄

同年同日元詰衆、后享保十三申七月六日寺

師 範高木主水正正陳
土岐丹後守頼稔

社奉行、后享保十五戌七月十一日大坂御城代

同年同日元御譜代、寛保元酉十月十三日依

改 河内守
増山对馬守正任

願御免

同年九月十八日元御譜代、享保十四酉十二月十六日依願御免

牧野駿河守忠壽

秋元但馬守喬房

享保十五戌三月十五日元詰衆、延享三寅八月死去

師範土岐丹後守 戸田越前守忠余

岡部内膳正長敬

改伯耆守

同年同日元詰衆、寬延二巳正月廿九日死去

師範高木主水正 改備前守 松平備中守正貞

本多豊前守正矩

改伯耆守

享保十六亥六月廿八日元詰衆、后享保十九寅六月六日大坂御城代

師範松平玄蕃頭 稻葉越中守正親

井上河内守正之

師範松平相模守近禎

同年同日元御譜代、延享四卯十一月廿二日願御免

師範松平玄蕃頭 松平伊賀守忠愛

内藤伊賀守頼郷

改大和守

享保十七子三月十五日元御譜代兼寺社奉行、后享保十九寅九月廿五日若年寄

師範松平玄蕃頭 西尾隱岐守豊直

松平玄蕃頭忠暎

師範高木主水正

同年八月七日元御譜代、享保十九年十月八日掃部頭依願養子被仰付当役御免

師範仙石信濃守 井伊因幡守直定

板倉伊予守勝清

師範松平玄蕃頭

同年同日元大番頭、后享保二十卯五月二日寺社奉行兼、享保二十卯六月五日若年寄

師範松平玄蕃頭 牧野越中守貞俱

本多伊予守忠統

師範松平玄蕃頭

享保十九亥九月廿八日元詰衆、后享保二十卯五月二日寺社奉行兼、后寬保二戌六月朔日京都諸司代

師範松平玄蕃頭 朽木土佐守玄綱

小出信濃守英貞

師範松平玄蕃頭

同年同日元詰衆、宝曆八戌寅四月七日寺社奉行兼、同九巳卯四月十六日加役御免、明和七寅五月四日依願御免雁之

師範松平玄蕃頭

十一日寺社奉行、后享保十七子三月朔日若年寄

師範松平玄蕃頭

同日依願御免

師範松平玄蕃頭

間席被仰付

同年七月十五日元伏見奉行兼寺社奉行、同 北條遠江守氏朝

二十卯七月廿九日依願御免

享保二十卯六月廿二日元御譜代兼寺社奉行、 松平紀伊守信岑

元文四未三月四日依願寺社奉行御免奏者番如元、宝曆六子十二月十八

日被叙四品帝鑑之間席被仰付

元文二巳十一月十二日元詰衆、元文四未三 本多紀伊守正珍

月十五日寺社奉行、淳信院様御代初延享二乙丑年十月朔日御朱印御用

被仰付、后延享三寅十月廿五日執政

元文二巳十一月十二日元大番頭、后延享元 戸田右近將監氏房

子十月若年寄

元文四未九月晦日元詰衆、后延享元子五月 松平右近將監武元

十五日寺社奉行、后延享三寅五月十五日執政

同年同日元詰衆、淳信院様御代初延享三丙 永井伊賀守直陳

寅年十一月十一日御朱印御用被仰付候処、屋敷類焼二付延享四卯年二

月十三日御朱印御用掛御免

寛保元酉四月十二日元御譜代、后寛保二戌 堀田相模守正亮

七月朔日寺社奉行、后延享元子五月朔日大坂御城代

同年同日元詰衆、寛延元辰十二月十八日四 松平豊後守資訓

品、后寛延二巳十月十五日京都諸司代

延享元子五月十五日元詰衆、淳信院様御代 秋元摂津守涼朝

初延享二乙丑年十月朔日御朱印御用被仰付、后延享三寅五月廿八日寺

社奉行、后延享四卯六月朔日若年寄

同年同日元詰衆、后延享二丑十二月廿一日 三浦志摩守忠次

若年寄

同年七月朔日元詰衆、后寛延元辰八月三日 青山伯耆守忠知

寺社奉行、宝曆八戊寅十一月廿八日御城代

同年同日元詰衆、寛延三午十月七日死 牧野因幡守朋成

延享二丑十月十五日元詰衆、宝曆十辰十二 太田摂津守資俊

月三日寺社奉行、宝曆十二午五月十九日依願加役御免

同年同日元詰衆、同四卯六月十日死去 増山弾正少弼正武

延享三寅三月朔日元伏見奉行、后寛延元辰 小堀和泉守正峯

七月朔日若年寄

同年十二月十五日元詰衆、安永五申二月五 内藤大和守頼由

師 範井上河内守

師 範高木主水正

師 範牧野越中守 改主計頭

師 範高木主水正

師 範戸田越前守

四品 師 範松平備中守

師 範本多紀伊守

師 範松平備中守

師 範松平紀伊守 改因幡守 改忠朝

師 範朽木土佐守

師 範松平伊賀守

師 範松平備前守

師 範松平紀伊守

師 範永井伊賀守

日就病氣依願御免

同年同日元大番頭、淳信院様御代初御朱印

師範 朽木土佐守

井上遠江守正敦

御用永井伊賀守被仰付候処屋敷類焼二付御免、依之延享四卯年二月十

二日御朱印御用被仰付

師範 松平備前守

小出伊勢守英智

同年十二月朔日元柳之間兼寺社奉行、后寛

延元辰七月朔日若年寄

延享四卯三月十一日元詰衆奏者番被仰付候

師範 松平備前守

酒井修理大夫忠用

即日寺社奉行可見習旨被仰出、后延享四卯六月朔日寺社奉行、后延享

四卯十二月廿三日大坂御城代

師範 永井伊賀守

酒井山城守忠休

同年同日元御譜代、后寛延元辰閏十月朔日

寺社奉行兼、寛延二巳七月六日若年寄

師範 朽木土佐守

松平宮内少輔忠恒

同年同日元御譜代、后延享四卯九月十一日

寺社奉行兼、淳信院様御代初延享五戊辰年七月九日御朱印御用被仰付、

寛延元辰閏十月朔日若年寄

師範 松平備前守

稲葉丹後守正甫

同年五月十五日元詰衆、后延享四卯十二月

廿三日寺社奉行、后寛延三年十二月十八日被叙四品兩役御免

師範 朽木土佐守

金森兵部少輔賴錦

同年同日元柳之間、宝曆八戊寅御預家名断

絶

同年同日元御譜代、后宝曆二申四月廿三日

師範 永井伊賀守

鳥居伊賀守忠孝

寺社奉行兼、宝曆十庚辰三月廿一日若年寄、十二月十九日大御所様江御

附、宝曆十一辛巳八月三日御役御免雁之間席被仰付

師範 松平紀伊守

松平主殿頭忠刻

同年七月十一日元御譜代、寛延二巳五月十

日参勤之砌於道中死

元文元辰八月十二日寺社奉行、寛延元辰閏

師範 朽木土佐守

大岡越前守忠相

十月朔日奏者番被仰付一万石二成兩役相勤、宝曆元未十二月十九日死

寛延二巳七月廿三日元詰衆、宝曆九己卯十

師範 朽木土佐守

阿部飛驒守正尹

二月七日御役御免四品、宝曆十二壬午十二月九日大坂御城代、明和元甲

申六月廿一日諸司代

師範 井上遠江守 改長門守

本多兵庫頭忠就

同年同日兼寺社奉行、宝曆八戊寅三月廿八

日若年寄被転、宝曆八戊寅御改易家名断絶

同年八月十五日元大坂御定番、宝曆十四正

師範 永井伊賀守

森川兵部少輔俊方

月廿七日依願御役御免

寛延二巳十二月十八日元詰衆、寛延四未正

師範 青山因幡守 改右京亮

松平因幡守輝高

月十五日寺社奉行、宝曆二申四月七日大坂御城代、宝曆六丙子諸司代、

宝曆八戊寅十月十八日御老中

同年同日元御譜代、宝曆九己卯正月十五日

師範朽木土佐守
松平周防守康福

神社奉行兼、宝曆十庚辰八月十五日御城代、宝曆十二壬午十二月九日

御老中

同年同日元詰衆、宝曆十三癸未十一月十八日

師範朽木土佐守
黒田大和守直純

日御役御免被叙四品

寛延四未八月十一日元大坂御定番

師範金森兵部少輔改下野守
酒井信濃守忠告

宝曆二申四月廿三日元詰衆、宝曆六丙子五月

師範朽木土佐守
阿部伊予守正右

月七日神社奉行兼、当御代初宝曆十辰年六月十二日御朱印御用被仰付、

宝曆十庚辰十二月三日所司代、宝曆十四甲申五月朔日御老中

同年同日元御譜代、宝曆五亥三月廿五日死

師範青山因幡守
土岐伊予守頼熙

宝曆二申八月十五日元詰衆、宝曆三酉年三月

師範太田摂津守
井上河内守正賢

月廿八日神社奉行、宝曆六丙子五月七日大坂御城代

宝曆七丁丑三月十五日元大番頭、同年九月

師範内藤大和守
水野老岐守忠見

廿八日若年寄

宝曆八戊寅七月廿八日元御譜代、当御代初

師範鳥居伊賀守
戸田采女正氏英

宝曆十辰年六月十一日御朱印御用被仰付、明和五子年四月廿三日於在

所死去

宝曆八戊寅七月廿八日元菊之間、宝曆十一

師範阿部伊予守
酒井飛驒守忠香

辛巳七月廿二日神社奉行兼、明和二乙酉八月廿二日若年寄被仰付西丸

江被出附

宝曆九己卯六月廿三日元詰衆、明和六己丑

師範朽木土佐守
牧野越中守貞永

年八月廿六日神社奉行兼、安永六酉九月十五日大坂御城代

宝曆九己卯六月廿三日元詰衆、宝曆十三辛

師範黒田大和守
土井大炊頭利里

未二月十八日神社奉行兼、明和六己丑年八月十八日所司代

宝曆九己卯閏七月廿八日兩御役一同被仰付

師範鳥居伊賀守
毛利讚岐守匡平

候元柳之間、宝曆十四甲申正月兩役御免

宝曆十庚辰正月廿八日元御譜代、宝曆十庚

師範森川内膳正
松平和泉守乗佑

辰八月十五日神社奉行兼、当御代初宝曆十辰十二月四日御朱印御用被

仰付、明和元甲申六月廿一日大坂御城代

宝曆十庚辰正月廿八日元詰衆、明和六丑十

師範酒井飛驒守
土屋能登守篤直

月朔日神社奉行兼、安永五申五月廿日死

宝曆十庚辰十二月十九日元詰衆、明和二乙

師範戸田采女正
久世出雲守廣明

酉八月廿一日神社奉行兼、明和六己丑九月廿四日大坂御城代

宝曆十庚辰十二月十九日元詰衆、明和九辰 大岡兵庫頭忠喜

師範太田撰津守

十月廿九日依願御免

宝曆十二壬午五月廿四日再兩御役一同二被 鳥居伊賀守忠孝

師範毛利讚岐守

仰付候元詰衆、宝曆十二壬午十二月九日再若君様附若年寄江転

師範内藤大和守

宝曆十二壬午十二月九日元詰衆、安永四未 松平能登守乘瀝

閏十二月十一日被叙四品御奏者番是迄之通、安永九子八月廿六日就病

氣願之通御役御免

宝曆十二壬午十二月九日元詰衆 牧野遠江守康満

師範松平和泉守

宝曆十三癸未七月朔日元御譜代、宝曆十四 松平伊賀守忠順

師範牧野越中守

甲申二月廿一日寺社奉行兼、安永四未八月廿五日若年寄之席被仰付

師範土井大炊頭

宝曆十三癸未七月朔日元大番頭、明和四亥 加納遠江守久堅

十月廿六日若年寄

宝曆十四甲申二月十五日元詰衆、明和五戌 板倉美濃守勝久

師範土屋能登守

子七月九日病氣二付願之通御役御免雁之間席被仰付

師範久世出雲守

宝曆十四甲申二月十五日元御譜代、明和元 土岐美濃守定経

甲申六月廿一日寺社奉行兼、天明元丑閏五月十一日大坂御城代

師範大岡兵庫頭

明和元甲申六月廿一日元柳之間、安永八亥 仙石越前守政辰

九月十一日於在所死去

明和元甲申六月廿一日元大坂御城番、安永

師範松平能登守之所願 明和元西十

戸田大炊頭忠言

三年十二月十四日死去

明和二乙酉十月廿八日元御譜代、安永四未

師範松平伊賀守

西尾主水正忠需

年閏十二月十一日被叙四品御奏者番御免

師範加納遠江守

明和二乙酉十月廿八日元詰衆、安永五申正

増山对馬守正孝

月廿九日依願御免

明和四亥十月十二日元御譜代、明和九辰九

師範土岐美濃守

松平丹波守光

月十日依願御免

明和四亥十一月八日元大坂御定番、同八卯

師範戸田長門守

遠藤備前守胤将

四月死去

明和五子七月朔日元詰衆、安永四未八月廿

師範松平能登守

太田備後守資愛

八日寺社奉行兼、天明元丑閏五月十一日若年寄若君様江被仰附

師範牧野遠江守

牧野豊前守惟成

五日寺社奉行兼

明和五子七月朔日元御譜代、安永三午二月

師範仙石越前守 明和六年九

本多豊後守助盈

五日死去

明和六丑十月朔日元詰衆、明和七寅六月廿

師 範西尾主水正
松平伊豆守信禮

安永五申正月廿九日菊之間、同六酉四月廿

師 範土屋能登守
米倉丹後守昌晴

日死去

明和六丑十月朔日元柳之間、安永四未九月

師 範増山对馬守
小出伊勢守英勝

安永八亥八月十二日

師 範太田備後守
土井大炊頭利和

廿九日死去

明和七寅十二月十二日元詰衆、安永五申六

師 範遠藤備前守
戸田因幡守忠寛

安永八亥八月十二日

師 範戸田因幡守
水野左近将監忠鼎

月五日寺社奉行兼

明和七寅十二月十二日元御譜代

師 範太田備後守
井伊兵部少輔直選

天明元丑四月廿一日

師 範牧野遠江守
松平右近将監武寛

安永三年二月十二日元御譜代

師 範牧野豊前守
堀田相模守正順

天明元丑四月廿一日

師 範土岐美濃守
稻葉丹後守正謙

安永三年二月十二日元詰衆、安永六酉九月

師 範小出伊勢守
阿部備中守正倫

天明元丑四月廿一日

師 範太田備後守
阿部能登守正敏

十五日寺社奉行見習、安永八亥四月廿三日寺社奉行兼

師 範内藤大和守
井上河内守岑有

天明元丑四月廿一日

師 範牧野豊前守
牧野備前守忠精

安永四未十二月廿二日元詰衆、天明元丑閏

師 範内藤大和守
井上河内守岑有

五月十一日寺社奉行兼

安永四未十二月廿二日元詰衆

師 範内藤大和守
秋元撰津守永朝

安永四未十二月廿二日元詰衆、天明元丑閏

師 範牧野越中守
安藤对馬守正興

五月十一日寺社奉行兼

安永四未十二月廿二日御譜代

師 範土屋能登守
松平采女正忠福

安永五申正月廿九日元詰衆

師 範牧野越中守
松平伊予守資承

申合之部

一寛延三年五月二日、朽木土佐殿方来申合書付手紙左之通

昨日相模守殿私御呼被成無急度御内々被仰聞候者、近キ頃

者部屋江弁当持持参且火入等も有之様ニ風聞も粗及御聞ニ

成候間、ケ様之儀致無用前々之通ニいたし可然候、弥右之

沙汰被成御聞候者其節者急度も被仰聞候様ニ相成候、左候

而者如何候間何茂申合以来右之通無之様ニとの御事候、依

之以来ハ別紙書付之通可相極候、仍之別紙一通差進候

右之通御内意被仰聞候儀ニ候得者請票取扱已後猶以目立不

申様ニ入念様ニ押合共江も申聞置候

五月二日

猶以別紙書付之通相極候茂内々之儀候得者、右紙面別紙と

も昨日も御相談申候通御廻状面江御留置候而者以後障りニ

相成候筋ニ御座候間、別御品帳江御留置可被下候、已上

別紙

一五節旬月次等只今迄ハ菓子致持参来候得共、向後者相止メ

飯輕キ煮染香物計可致持参候

但元日二日并御能有之日ハ汁可致持参候

一坊主衆杯ニ差出候弁当ハ輕キ煮染と香物計ニ而肴ハ相止可

申候

但酒三升限り其余者可致無用候

一只今迄火入等有之候得共向後相止前々之通箱持参打火ニ而

相用併極寒之節計手あふり可差出候

此消候分ハ追而消候様申来

一新役衆初御番之節も出仕日之定之外可致無用候

午五月

一宝曆三酉年十一月朔日、阿部伊予殿方左之書付廻状追而之内江

書入置候様申来

一今日紅葉山御宮附坊主被仰付候為御礼西丸江罷出候由承候

得共謁ニ及申間敷之儀何茂申談候、為御心得申進候

一宝曆四戌年二月二日、朽木土佐殿方左之書付来ル

西丸

一惣出仕有之但馬守表江罷出候節、御本丸之通非番之面々茂不

残附参可申事

一 桜之間列座有之節、や者り当番芙蓉之間ニ罷在可申事

一 但馬守御本丸江罷出候節同人逢申候使者等九時迄待七候儀、

弥只今迄之通相心得九打候者謁可申事但馬守江承候処、右

之通申聞且惣而区々ニ相見候事も有之候間申合候様申聞候

条申進候、以上

戌二月二日

朽木土佐守

当番 永井伊賀守

一 宝曆四甲戌年二月十五日

廻状之内

今日大納言様不被為入候

一月次之御礼相濟

御暇

同

追而之内二ヶ条目

一月次御礼日廻状面御移替以前之通相認可然旨此間同役衆申

談則今日方右之通相認差出申候、為御心得申進候

同三ヶ条目

一 助先御使者之者ハ上野増上寺江之行列予参不罷出、為御目見

致登城助先之者ハ還御迄見合可致退出候、御使先之者ハ御成

後見合可罷出候、御成先江罷越候跡ニ而急助御使先等申来候

時ハ間違茂可有之哉無覺束候間、右之通致可然ハ右旧例正徳

元卯年五月九日申合相濟有之候得共、近年此申合無之候間猶

又何も申談向後右之通相極候、尤紅葉山御成之節者唯今迄之

通助先御使先之者行列予参可罷出候旨是又申合候間、此段為

御心得申進候

二月十八日

阿部伊予守様

永井伊賀守

一同年二月十八日、金森兵部少輔方差出候書付并絵図左之通

卷上

伺之通可仕旨被仰渡奉畏候

稻生下野守

二月十七日

稻生下野守

芙蓉之間御縁類御右筆部屋御縁類御修復二付、御作事奉行差

上候書付并絵図面御下被遊候付吟味仕候処先格相知不申候、

依之評議仕候趣左二申上候

一 毎日表御廻り之節御詰衆御謁被遊候儀ハ例席ニ而相障候儀

奉 春阿弥

無御座候、御廻り之儀ハ雁之間菊之間御間之御襖東之方一

織田肥後守

間明ケ置候様御同朋頭可申談候、芙蓉之間ニ而拝領物并被

御作事奉行

仰渡等之節者菊之間方雁之間内通シ差出可申候、尤被下物

一同年二月廿八日、青山因幡殿方被差出候書付左之通

も右之通差出同所江引候様可仕候

急助申来候節差掛御用等有之節次之助順江申遣候而者間違

一 御右筆部屋御縁類ニ而拝領物并被仰渡等之節ハ、躑躅之間

相成可申候、且助順之方病氣等ニ而急助心得之儀申来相心得

ニ而被仰渡候様ニ相心得可申候

候節も同様之儀候得者、拙者共四人急助并急助心得共ニ御除

右之通相心得可申哉伺之通被仰渡候者相達候而可然、向々

候様致度候、於御承知者次之順之衆急助被心得候様致度候之

江者私共方申達候様可仕候哉奉伺候、以上

段申談、急助并急助心得之儀次之順ニ而被心得候筈申合候

二月

二月

「函 ①」

一同年閏二月廿九日

当番
青山因幡守
金森兵部少輔

相模守殿 江戌二月十六日以春阿弥上

御本丸黒田大和西丸本多長門当番之処加役方御用有之御本

佐渡守殿 戌二月十七日

丸江被出候付青山因幡殿助番被勤候、然ル処大和風氣其上夜

奉 織田肥後守

中痰気強差塞不快罷在差懸候事故不及御番替助順江可申越

御本丸芙蓉之間御縁類廻り土蔵入替御修復

処、西丸長門当番故助先因幡殿除キ次之順兵部少方江夜中申

二月十六日

越助御番相勤候

奉 稻生下野守

右之趣ニ而西丸助御番ニ相成候付助順前後ニ相成候得共、双

方共今朝迄不致候而罷出候上二而致承知候事故其通相濟廻
状面二助前後之訳も不相認差出候、依之翌朔日被出候同役
衆江右助順前後之儀何連之方二可相定候哉、向後もケ様之
儀可有之事二候間申合置度旨申談候処、西丸助者外二而不
致候得共前日方定り居候事、御本丸助者夜中申来候事候得
者急助之筋二可成候間、例者御本丸者助を先二立候得共此
度者西丸之方先二而御本丸助者次二可成旨土佐殿初何茂被
申候付其通相極候事

一同年四月十八日

当番
阿部伊予守

廻状追而

一上野増上寺御成之節御本丸西丸共助二相成候ハ、助御番相
勤候段次之助順早速可申遣置候、左候ハ、其日助先二相成
候もの御殿江御目見二可罷出候、此段今日被出候同役衆申
合候、為御心得申進候

一同年五月五日、森川兵部少殿押合方下手紙二而左之通申来

以手紙致啓上候、然者大納言様紅葉山御参詣之節西丸中之
口二被差置候御供之衆御成之節二重橋外江払候得共、去月

晦日兵部少輔当番之節柳生播磨守様江御断被申達押足輕手
廻中間差置、尤中之口御門外通御近夕御座候而別而行儀慎候
様二申付穴蔵二差置被申候、向後供奉并御当番共二御供中之
口二可被差置候ハ、其節御目付中様江御断可被仰達与被奉
存候、此段為御心得各様迄申付拙者共可得御意旨被申付候、
以上

五月五日

一同年五月廿二日

当番
青山因幡守

廻状追而

一松平伊予守参勤之御礼申上候節、織り物減少付相模殿宅江伊
予守家来被召呼前々之通被致候様被申達候、依之前々之通織
物可差越候之間致受納候様、二重二成候間此段無急度寄々申
通候之様相模殿被申聞候由、能勢因州被申聞候

宝曆四甲戌年

一十二月九日

当番
青山因幡守

廻状追而

一右近将監殿被仰聞候者去ル朔日出仕之節同役衆門通り西丸

江何茂相越候、前々も添番又者差懸御用之節者門通り相越

候得共惣出仕等之節者不相越候、向後添番又ハ御用ニ而通

り候節ハ只今迄之通相心得其外之節者門通り不相越候様ニ

可致候、若門通罷通候節ハ以御同朋頭相同罷越候様被仰聞

候ニ付、添番又ハ御用ニ而差懸り罷通り候節ハ只今迄之通

御目付江申達可罷越候、其外惣出仕之節何茂門通罷越候儀

者相同候様ニ可仕哉と伺候処其通ニ相心得申合候様被仰聞

候、委細ハ面上ニ可得御意候

一同年十二月十一日

助番
松平紀伊守

廻状追而

一今日日光帰之高家衆御目見有之御老中方早々登城之段今朝

承候付急キ罷出候之処最早御老中方御揃ニ而御座候、右之

趣昨日承不申候付右近將監殿登城之刻限等相同不申候、右

ニ付退出後ケ様之儀御座候節ハ為知給候様大目付中江も申

談候而御目付稻生下野江申達候、当日之当番江被申越候へ

者翌日之当番江致通達候間為知給候様相頼置候、此段為御

心得申進候

一同年十二月廿三日

当番
内藤大和守

廻状追而

一昨日当番因幡殿退出以後御三家ノ雪ニ付為伺御機嫌以使者

被差上物有之御目付鈴木伊兵被謁候由、今朝因幡殿被承候付

押合役被差出被承候処、弥差上物有之奥之書付茂今日出候付

進物帳江も被相記押合も被相調候旨、日記方江之書付之儀者

掛り之衆江鈴木伊兵より被談候筈之由被申越候、此段為御心

得申進候

一宝曆五乙亥年二月十一日

助番
松平紀伊守

廻状追而

一今日松平安芸守家来拝領物之内時服五ツ羽織者只今迄上二

ツ三ツ取渡し残ハ進物番ニ引セ申候、時服四ツハ只今迄不残

取渡仕候得共、旧冬上杉大炊頭南部信濃守家来拝領物之節取

落シ見苦敷御座候間、時服四ツ御羽織ニ而上ツ程取渡残ハ

進物番引セ可申之趣春阿弥江申聞候処、則相模守殿江同人相

伺候之処可致其通旨御同人被仰候段同人申聞之、右之通相済

申候、此断稻生下野進物番衆江も申達候、右者旧冬拝領物之

節取落シ見苦敷候而如何敷存候故今日差懸候事二候間、因幡殿其外被詰合候衆申談右之通御座候、此段可然思召候者猶御相談之上相極候様二と存候

一宝曆五乙亥年二月十七日

当番 井上河内守

廻状追而

一今年土御門方巳日被上り不申候付此度小泉陰陽大属巳日被

差添罷下昨日上り候、今日御暇二付召連ハ高家衆被出候、

当番致出席候儀故為心得出候様昨日隱岐守殿被仰聞候由春

阿弥申聞候、御暇之次第八例地下拝領物之格二可相心得旨

被仰聞候段是又申聞其通相濟申候、為御心得申進候

一同年三月五日

当番 本多長門守

廻状追而

一大納言様御婚礼相濟候為御祝儀

籌官

青蓮院宮

勸修寺宮

靈鑑寺宮

白川二位

菊亭三位少将

千種中将

覚勝院

常住金剛院

東竹

右拾ヶ所方公方様江御目錄金五百疋ツ、当正月二日被差上

候由同十日御納戸より致押合候様申聞候、右当日当番之節不

承候得共右之通申聞候儀故為致押合相濟申候、何茂御目錄者

下り不申御帳二も附不申添書も遣不申候、此段在府同役中申

談之上以來為御心得申進候

一同年四月十日

当番 井上河内守

相模守殿被仰聞候者明日參勤之御礼有之候付進物番出方之

儀前々茂被仰聞候通早メ差出候様可申合候、近頃出方も又々

遅相成候間明日肝煎相勤候同役江も申通候様被仰聞候、尤番

頭衆江も若年寄衆方達有之筈之旨是又被仰聞候付此段申進

候

一同年八月朔日

当番
朽木土佐守

御簾中様江三季其外共献上物并使者等御側衆御留守居杯謁

之儀是迄廻状二出候得共、向後兩御丸共右之儀廻状二出申

間敷与今日何茂申談候

一同年九月廿七日

当番
朽木土佐守

廻状追而

一是迄御礼書当日相渡候得共、向後前日御渡可被成旨伯耆守

殿被仰聞候

一同年九月廿七日、朽木土佐殿方廻状二而申来左之通

御礼衆右之節御礼書是迄当日相渡候処、前日当番江相渡候

之筈二相成候付此間及御相談相極候趣左二申進候

一御礼書相渡候者直部屋江持參於二階押合之者二密々為写留、

本紙者翌日之当番江早速遣可申事

但翌日之当番方部屋江附人致置可申候右使江相渡遣候事

一前日之当番二而在府同役之数御礼書之写籠書二相認翌日之

当番之方江不残差遣可申候、当番之方二而八右御礼書写共

江御披露附致置可申候間夕方御銘々方披露割取二可被遣候、

勿論御礼日当日御城江持參之御礼書等八只今迄之通二当番

之方江二而認持參可申候

一御礼日御番替いたし候者、前日之当番江為知可申事

一御礼日病氣之者前日御用番江御届申候者、早速翌日当番之方

江可申遣候、臨時御礼衆有之節も同様可申遣候

一不快二而引込候者、翌日月次其外御礼衆有之節可致出勤候

八、是又当番之方江可申遣候

一右御礼書之趣從此方外江洩候様二而八如何二付、或八元服之

御次第書杯二而も部屋二而彼是取扱不申写等八宅二而可申

付事

右之通此間御相談相濟候付此段廻状を以得御意候、御廻状番

江御写被成候儀者御無用被成可然与存候、以上

九月廿七日

朽木土佐守

一同年十一月十九日、申合之趣書老通青山因幡殿方廻状二而順達

左之通

御鷹野御成之節兩御丸御番相談相勤之者も有之又者一向不

相勤者も有之候付、席順二而致御番替相勤候筈二何も申談候

事

一 両当番助先加役方両当番付合相除候而可申遣候

一 御使先相当り候者江申遣候節者御番替之者江相對請杯可申候

候

一 御成御延引暮六時迄二致承知候者御番替相止当り候通相勤可申候

可申候

一 御成御延引候者御目付衆より当り之当番之者方江被申越候

様前日之当番より可相頼置候

一 右御番替ハ返番致間敷候

一 当り之当番ニ而順ニ当り候者当り之通可相勤候

一 同年十一月廿八日、青山因幡殿より請取候申合書付三通

御鷹野御成日当番病気差合且加役方御用有之助番相勤候節、

申合之御番替順ニ而無之候共順ニ相立盛ヲ付可申候

一 右致御番替候者宅近辺出火有之候節、本番之方江相戻シ可申候

申候

別紙

御鷹野御成之節加役方御用有之節者不致候、番替助順之方

江可申遣候

一 西丸当番江御成之節御用有之御本丸江罷出候ハ、只今迄之

通助順之方江申遣致御番替間敷候

一 月番之節右御成日之御番替致間敷直二次之方江可申遣候

一 臨時寄合之節是又助順之方江可申遣候

一 申合之御番替申来候以後上野増上寺山玉氷川辺出火有之候

ハ、当り之方江戻し盛を附可申候

別紙

急助心得之儀去春申談加役方ニ而心得不申、右ニ付夜中助申

来刻限夜九時以後ハ急助同意之儀ニ付直二次之順江被申越

候様ニ申合候、尤右刻限以後申来候ハ、次之順江被申越候様

ニ可及返事与申談候

一 宝曆五亥年十二月三日

当番

朽木土佐守

廻状追而

一 三季献上御内書渡之節当番柳之間江致出席候間、御用番登城

之節中之間明キ申候付申合者人罷在候様何茂申談候上、向後

從助順罷出可申候

三季献上之節ハ助先之者御本丸江罷出次之順西丸朝助可罷
出候旨申合候、為御心得申進候

一宝曆五亥年十二月十五日、森川兵部少輔殿より来候書付別紙
共左二記

一西丸当番之節ハ從周防守紀伊宰相殿尾張宰相殿被掛御目候
書付差越但馬守殿江差出候処、向後御側衆江申達候分ハ袖
二御届と相認候様ニ以常阿弥被仰聞候

十二月

森川兵部少輔

月日
御届
当番
誰

一宝曆六子年五月八日、於御城部屋土佐殿方受取候書付

一西丸二而上使婦御請御側衆江申込候節、山里江御成二而御
暇ニ被相越御側衆不被詰合儀先頃有之候二付、以後ケ様之
儀但馬守江承置可然と何茂被仰聞候二付但馬守江承候処、
山里者御場も近ク候間申込候者御用之透二見合被出候筈ニ
候間、其通相心得候様ニ但馬守申候、所ニ寄少々遅成候事
も可有之与申候

一三季献上之節朝助ニ罷出候者在着之使者其外謁候ハ、一紙
目録認書も助番之者名前ニ而助番誰与相認可差出候、其後当
番代り合候者其節御謁書等ハや者り当番誰与相認差出相濟
候由同人申候

一右之通但馬守申候間只今迄朝助之者諸事致遠慮取扱候様ニ
有之候得共、向後者勿論当番之通ニ諸事取扱候様可申談旨申
達置候

子五月

朽木土佐守

一宝曆六子年閏十一月七日、阿部飛騨殿方銘々江被指越候書付

一只今迄御鷹之鳥拝領之面々為御礼登城謁相濟御側衆江申込
候節、御側衆詰合無之節取扱区々ニ有之候間此間被仰談候通
以常阿弥無急度但馬守殿江相伺候処、山里江御成之節者御側
衆江申込被出次第直ニ申込、翌日但馬守殿江誰江申込候旨御
届書可差出候
一吹上御成之節者御側衆江被申込候様ニ御目付衆江申込置、翌
日但馬守殿江例謁書之通相認可差出候
一当秋但馬守殿以常阿弥被仰聞候ハ、上使婦御請御側衆江申込

候節山里江御成候者当夏土佐守相同候通相心得、吹上御成

一宝曆七丑年十月朔日、松平周防殿方来書付左之通

之節者御場所遠二而御側衆被出候儀相成兼候間、御用取次
之衆被相殘候様御声可被掛旨被仰聞候間其砌致口達候得共

御数寄屋頭悴御数寄屋坊主跡目被仰付候為御礼西丸江罷出
候節、先格御奏者番謁之儀有之候得共近來者退出二差懸罷出
候故謁之儀無之候、向後者弥先格之通間二合候ハ、当番謁可

猶又得御意置候、且又於御本丸俄上使被仰付大納言様上使

申旨何茂申合候、此段為御心得得御意候、以上

兼相勤候様被仰付御請御側衆被申込候節、山里吹上江御成

一同年同月同日、金森兵部少輔殿方下手紙二而来左之通

候者是又右同様可相心得哉と今度乍序但馬守殿江以常阿弥

去月廿一日拙者西丸当番之節水戸殿紀伊殿方口切御茶御菓

相同候処、山里江御成二候者先達而之通相心得吹上江御成

子御樽肴被差上候使者罷出候処、御目付中不被申聞候付謁

候者御側衆江可申達置旨以同人被仰聞候

不申九半時分但馬守殿從御本丸御出懸御逢候而相濟候、拙者

閏十一月 阿部飛驒守

一宝曆七年丑五月十五日、黒田大和殿方被差越書付左之通

江者御同人御出之節二差懸御目付衆被申聞候、毎例九打候迄

覚

但馬守殿御出無之候得者当番謁来候儀候処、此度ハ詛も有之

一去十日拙者儀御本丸助御番二而罷出候処右近將監殿以春阿

候而不被申聞候哉之旨一昨廿九日拙者当番罷出候付加藤喜

弥被仰聞候者、御三家之家老於芙蓉之間御縁頼拝領物有之

左江相尋候処、詛者決而無之其節全間違二而不申聞候儀与存

節三度出之心得二可罷在候、若兩度罷出候段承候者其節御

候、向後ケ様之間違無之様同役中申合置可申旨被申候間、此

用番江可申上旨一同申合候様被仰聞候、左様御心得可被成

段去月廿一日西丸廻状番二御記置可被下候、以上

候、以上

十月朔日 金森兵部少輔

丑五月十五日 黒田大和守

一宝曆七丑年十二月廿九日、朽木土佐殿来書付左之通

御内書御用番御渡候節も当番之外朝助罷出候儀難決候二付
相模守殿江御内意伺候処、御用番二而無之候へ者御謁等も
無之事二候間助罷出候二不及候旨被仰聞候

十二月廿八日

朽木土佐守

一宝曆七丑年十二月、金森兵部少輔方来書付左之通

月次其外御礼事之節進物番人数余計共被指出候様番頭衆江
申達其通被差出候処、只今迄右余計進物番御礼席江廻り候
事無之指出候人数計廻り申候付、此間之通差懸進物指出候
人数之内障儀有之節急成御間合不申事御座候付、向後御礼
事之節進物指出候人数之外長袴半袴共壹人宛手明キ二而御
礼席江廻シ置、御勝手江も手明壹人廻シ置申候而可然旨同
役中申談之上番頭大久保豊州江去三日拙者申談候之処兩番
頭衆相談有之返答二可及旨被申候処、今日同人被申聞候者
此間申談之趣兩番頭申談、向後右之通心得候様二一昨四日
進物番江申渡置候、然処進物番不残出余計難出節者早々手
明二成候もの余計之心得二而席々江廻候様二可心得旨是又
申渡候之間豊州被申聞候二付、同役中江も右之趣可申合置

之旨及返答候、御目付中も御礼事之節席々二被居候事故向後
右之通進物番余計一人充席々江罷出候様番頭衆江申達候段
為心得申達置候、番頭衆方も右同様二御目付中江被申達候由
二御座候

十二月六日

金森兵部少輔

一宝曆七丑年十二月十六日、朽木土佐殿方被差越候書付左之通
上野増上寺行列二而御参詣之節大目付衆江助番助先共書出
候ハ、兩様共二其当日迄助并急助共二不相勤、夫迄者次之順
二而可相勤旨申合候、乍然御人少之節ハ其節之様子次第二可
致与何も申談候

一宝曆八寅年正月廿八日、朽木土佐殿被差越候書付左之通

一去ル廿四日増上寺御参詣被仰出候而茂此節同役衆病人有之
其迄門前通御之衆兩当番之外助被勤候衆も無之候付、若兩当
番之方病氣等二而難被勤節ハ差掛り彼是有之候而者如何二
付此旨被出候同役衆申談伯耆守殿江無急度申達候処、兩御番
之者若差支候ハ、門前通御之者助相勤御間合候様二可致候、
尤上野増上寺とも同様二相心得御間不欠様二可申談旨、右之

通之節ハ罷出候上二而御用番江可申達旨被仰聞候

但如此間助順之方無之節兩御番之御方別二差支可申候節
者、門前通御之者之内同ハ悴在之者之助順近キ方江早速
可被仰遣与存候、且又御使者之者無之登城無之節も右二
可准候

正月廿八日

朽木土佐守

一宝曆八寅年二月朔日、金森兵部少輔殿方被差越候書付左之通

一 去月廿九日西丸助番罷出候処山本新五左衛門被申候者、昨
廿八日閑院殿伏見殿使者織田対馬守召連候処御退出後二付
御目付謁相濟候、只今迄右使者ハ勿論其外二も自分御礼不
申上使者ハ西丸江罷出候儀無之候得共、去丑四月廿八日近
衛殿使者罷出候節当番永伊賀守添番太田撰津守謁申候例茂
有之候付天野三郎右衛門謁申候、去年者謁書出候哉謁捨二
相成候哉謁書出候ハ、認方内々二而承合度旨被申候、拙者
申候者於御本丸自分之御礼不申上候使者西丸江御礼二罷出
候筋二而無之候間罷出候而も謁候儀とハ不存候間昨日者謁
捨二も可相成哉と及挨拶候、其後新五左被申聞候者先刻之

儀無急度但馬守殿江常阿弥を以同候へ者右使御礼二罷出候

筋二無之候間、向後共大体之儀者罷出候ハ、不及謁候旨同人
を以被仰聞候段為心得新五左被申聞候

右之趣以常阿弥御指図之節御奏者番衆も此段ハ同様之心得
二而可有之儀と被仰候旨為心得同人申聞候、此趣去月廿九日
西丸廻状追而之内御書入置可被下候

二月朔日

金森兵部少輔

一宝曆八寅年二月十五日、森川兵部少輔方被差越候書付左之通

從増上寺方丈寒暑伺御機嫌使僧差上候節当番江申達候儀も
有之又ハ不相達儀も有之区々二付、向後坊主組頭より当番江
相達候筈二稲生野州江申談置候

二月十五日

森川兵部少輔

一宝曆八寅年七月六日、内藤大和殿方被差越候書付左之通

一 今日拙者西丸当番之節七夕之御祝儀例年之通上り候内、水戸
殿二者御差合二付不被差上候故尾張殿紀伊殿七夕御祝儀被
差上候段可致披露候旨但馬守殿江盛阿弥を以申達候処御承
知之由二而相濟候、然ル処御同人同門江御咄之由今日ハ格別

之儀二付御官名をも申二而可有之旨被仰候二付、其段当番江可申哉之旨盛阿弥申候得者夫二者及不申候段被仰候由尔而、右之趣同人咄申聞候故其通御官名を付候而代披露相濟候、且右之訳も有之其上前格も相見候付廻状二も中納言殿者認候儀御座候、此段為御心得如此御座候、已上

寅七月六日

西丸当番

内藤大和守

一宝曆九卯年正月廿二日、酒井飛騨殿方被差越候書付左之通

今日青山因幡守為御礼罷出二付謁之儀但馬守殿江常阿弥を以相伺御差図之上謁申候、右之節常阿弥但馬守殿江所司代御城代被罷出候節但馬守殿退出後暫見合謁申候、右暫見合申候程合内之承合も有之候旨但馬守殿江申上候処、八少前退出候ハ、八時迄も見合八時退出候ハ、八過二三寸も見合退出可致候、所司代御城代御用有之遅ク被出候事も可有之夫迄見合不及、八ツ余程前退出二も候ハ、二三寸も見合可罷出旨被仰聞候付、右之段御奏者番江も可申聞置哉と常阿弥相伺候処申達置候様被仰聞候旨常阿弥申聞候

卯正月廿二日

当番

酒井飛騨守

宝曆二壬申年三月十四日、阿部飛騨殿方来書付左之通

一去十四日拙者西丸当番之節川勝左京婿養子被仰付候為御礼罷出候付其趣日記方江書付例も有之候、婿養子名前者相除キ差出候様同月十八日遠江殿当番之節婿養子名前書加指出候様二与柳生播磨被申聞書付被差戻候由二而、遠江殿方被差越候付土佐殿江及相談同人同廿日当番之節播磨江被申候者、何とわけ有之婿養子或一通り之養子共父子罷出候節ハ名前書付差出候、一通之婿養子父子不罷出候節者前々養子之名前者書入不申候旨被申達候処、左候而者所々承合名前書入申候間御日記より承候名前書入被差出被下候得者、早速御日記もより申候間、何卒以来名前御書入被下候様と被申聞候付、以来者有之候而ハ一統二懸り候事二候間同役共申談候上可差出旨被及御挨拶候間土佐殿被申聞候付、一昨廿六日及御相談候上播磨江致相談御日記より不申候与有之上ハ何茂申談以来婿養子糾父子名前書付可差出旨申達候処、左候ハ、婿養子其外之養子も父子名前書付差出呉候様二と被申聞候付、以来婿養子并一通り之養子も父子不罷出共名前書付可差出旨申達

候

一五節句月次初而出仕共外御礼事有之中一同二罷出何茂御礼
 与申儀分り承候間、以来御礼之訳謁之節被申候様致度旨播
 磨守江申談候処、委細相心得候間以来御礼衆何之御礼与申
 越謁之節被申候様可被致旨被申聞候、右之段為御承知書付
 致進達候

三月

一宝曆二申年十月朔日、西丸廻状追而出ル

一尾張殿重陽之御祝儀就御差合延引大納言様江献上之時服去
 月十二日御本丸江使者罷出相濟候、其節廻状二申進候通於
 西丸日記方江差出候先例も不相知候故同役衆申談候処、差
 出可然旨申合候付先例も無之候得共差出候段申達、右日記
 方江之書付今日松前隼人江差出候、已上

当番
永井伊賀守

一宝曆九卯年閏七月廿四日、御本丸廻状追而出ル

一兩御丸助番并添同日相勤候刻助順之上二而添相勤助
 順之次二而助相勤候事も有之候、其節助順繰方之儀区々二

付以来助者何連之助二ても一二相立、添者何連之添二ても

二二相立助順繰可申旨今日被出候同役中申合候

当番
黒田大和守

一宝曆九卯年九月三日、鳥居伊賀殿方手紙二而来

一当番之節自分弁当八持参同役衆被振廻候儀相止申候事
 一坊主衆并押合下々弁当只今迄持参候処、向後坊主衆江振廻候
 儀相止申候、押合初下々迄弁当持参候儀者銘々弁当二致候事

当番
鳥居伊賀守

一宝曆九卯年九月八日、鳥居伊賀殿方来ル

唯今迄年始五節句月次御能不時御礼衆有之候節輕キ弁当
 番致持参同役衆江振廻申候処、今度一統之御書付出候間平日
 者勿論年始五節句月次御能不時御礼衆等之節弁当同役衆江
 振舞候儀相止可申候、銘々不目立品持参一分二而相用候儀者
 勝手次第之事

一前条之節坊主衆江出シ候弁当是又相止可申候、押合とも初弁

当八随分手輕不目立様可申付事

但居残之節も坊主衆江弁当振廻申聞敷候

右之趣申談候

九月

鳥居伊賀守

一宝曆十辰年四月十五日、酒井飛驒殿方被差出候別紙絵図左之

通

去ル七日今度之御祝儀於西丸公方様江被進御膳從御駕籠台

被為入候付、為御目見御白洲御左之方江先格之通罷出居候

処相模守殿被仰聞候者、御左之方江者老衆御出迎被成候間

向江罷越御左之方但馬守殿御出迎候跡之方二可罷在旨被仰

聞候

右之通二申合候様ニト之儀御座候

辰四月十五日

酒井飛驒守

「 図 ② 」

一宝曆十辰年五月二日、朽木土佐殿方以廻状被相廻候伺書左之

通

卷上
御奏者番

去十一日被成御渡候御書付之趣二付左之通奉伺候

一御移替已後も是迄之通西丸江相詰可申之趣奉承知候

一西丸二而可伺筋之儀ニ而も是迄致来候儀者只今迄之通取
御附札 計候様可仕哉、例も無御座儀者御本丸当番江申達御用番江

相伺候様可仕哉

御附札 可為伺之通候

一御用御座候節者其段可被仰聞候間二丸江罷出可申旨奉承知

候

一右者前日ニも被仰聞候儀ニ而可有御座哉と被存候

御附札 但差懸当日ニ可被仰聞哉左候ハ、御本丸当番江可被仰聞

哉又ハ西丸当番迄可被仰聞哉、何レニも差懸被仰聞候者西

丸を明ケ西丸当番之者罷出候様可仕哉、御本丸西丸当番之

外二日々壹人宛御本丸登城仕可罷在哉、右之通差掛西丸当

番方罷越候ハ、所二より西丸之方御間欠候儀も可有御座

哉難計奉存候

御附札

前日相知候節者前日可相達候、当番之外日々一人ツ、
被罷出二ハ不及候、差懸相達候節ハ当番之外詰合在之
候者詰合之内ニ而可被罷越候、詰合無之節ハ西丸当番
方可被相越候

一 罷出候様被仰聞候御様子二寄家来共茂召連候様無之而者御
御附札 用弁申間敷哉と奉存候、何連二も二丸二而部屋御渡被下候

様仕度奉存候

可為伺之通り部屋之儀者御目付方可相渡候間可被談候

御附札

一 二丸御座敷向一向不致儀二御座候得者寄々御絵図二而も拝
見仕度奉存候、并罷出候節差寄罷在候席も相知不申儀二御
座候得者右之通仕度奉存候

御附札

勝手次第可有見分候御目付可被談候

四月

御奏者番

一 宝曆十辰年五月八日、黒田大和殿被相達候書付左之通

覚

一 去二日拙者西丸当番之節端午之御祝儀献上有之御本丸江罷
出門通西丸江罷越候付而、右近將監殿江以良阿弥御届申上
御目付大岡養次江申達罷越候処、門通之儀者届二而ハ無之
筈二候旨御同人被仰候由御本丸御当番貴様江春阿弥申聞候、
其節者伺之趣二相济候、重而ハ伺候様同人申聞土佐殿二も
承知候由貴様方被仰越候、右之通候間以來門通之儀者何レ

二も相伺候様今日何茂申合候

五月五日

黒田大和守

一 宝曆十辰年五月十一日、朽木土佐殿被相達候書付左之通

於西丸可伺筋之儀二而も是迄致来候儀者御移替以後も只今
迄之通取計例も無御座儀ハ、御本丸当番を以御用番江相伺可
申哉之段先達而相伺候処伺之通相济候、然処此間右京大夫殿
御隠居様附被仰付候付如何可仕哉之段昨日以良阿弥相伺候
処右京大夫殿江相伺候様被仰聞候、左様御心得可被成候

一 二丸江相詰候様前日御沙汰有之節ハ格別差掛御本丸詰合方
罷越候様被仰聞候節者、御本丸当番江申談当番之押合忝人右
筆忝人連候而罷越候筈二申談候、右之通故御本丸当番之節二
丸部屋鍵も押合之者致持参惣体其心得二而押合共罷出候筈
二申合、尤御本丸被詰合無之節者西丸当番方二丸江相越候様
二と之御事二候得者、西丸江相詰候押合共其心得二而罷出候
筈二候、左様御心得可被成候、以上
五月十一日
朽木土佐守
一 宝曆十辰年五月十一日、左之書付土屋能登殿来

行列断申達置候以後助御番等相勤候得者其段度々懸り之大

御奏者番

目付衆江申達候得共、此已後ハ最早痛所等二而行列不相勤

段断申達相濟候上者、助御番等二罷成候共其段者度々二申

達間敷之旨池田筑州江申談候処、右之通二而何之差支も無

之候間其通二致候様被申聞候、併御参詣有之御当日兼而者

痛所之断申置候処二助御番御使先助先等相勤候ハ、其訳ハ

御参詣相濟候翌日二而も不苦候而為申知候様二被致度候、

左候へ者断之趣扣茂直し置被申候事故右之節者申達候様二

被申候得共、同夕ハ前日右之儀御達被成可然与申合候

一行列御勤之方ハ是迄之通其度々御断訳可被仰達与存候

一宝曆十辰年五月十二日、左之伺書壹通御附札相濟右京大夫殿

良阿弥を以御渡被成候由朽木土佐殿来

御奏者番

御附札 火事地震之節茂西丸江相詰候様二可仕候哉奉伺候、以上

五月

御奏者番

御附札 可為伺之通候

一宝曆十辰年五月十三日、朽木土佐殿被指越候伺書左之通

御附札

御移替以後於西丸御三家方江懸御目并右使者江私共謁即日

書付差出来候分ハ当日御見廻之節差出、其外御札衆謁候書付

ハ翌日西丸当番を以御見廻り之節差出可申候、御見廻り無御

座節者如何可仕哉奉伺候、已上

五月

御奏者番

御附札

見廻り之節御同朋頭江相渡可被差出候、御同朋頭不居節

者西丸御目付ハ二丸御目付迄差越御同朋頭を以出候様

可被致候

一西丸当番之節右京大夫殿御見廻り無之謁等も無之節者九半

打退出、謁等有之候ハ、御本丸之御用番之退出承り罷出候、

尤謁残有之候ハ、御目付衆江申談候儀只今之通、右京大夫殿

御見廻り二而直二退出候ハ、如先々退出仕候

一西丸ハ二丸江伺二差越候儀者二丸御同朋頭宛所手紙二相認

御目付衆江申談御使之者二而指遣候事、右京大夫殿御本丸二

御座候ハ、急候儀者二丸御同朋頭より宜取計被申候様二申

談候

右之通右京大夫殿江以良阿弥同相濟申候、以上

五月十三日

朽木土佐守

一宝曆十辰年五月十五日、於御城朽木土佐殿江相達候書付左之

通

一二丸江罷出候節御門斷之儀銅御門昼夜共之斷相濟居候、從

西丸急御用二而二丸江罷出候節者御番御門之斷も相濟有之

候、并押合共出入之儀銅御門者定斷相濟有之候、從西丸押

合共二丸江罷出候儀有之候得者外通り罷越候筈二候、昨日

御目付淺野内膳江承合候処右之通被申聞候、已上

五月十五日

朽木土佐守

一宝曆十辰年五月十九日、阿部伊予殿被相達候書付左之通

御三家方月次御登城之節御詰合無之候者為御待不申其迄之

通弥御目二懸可申哉

一松平加賀守溜詰衆右同様之節者是迄之通謁可申候哉

一月次之御三家使者罷出候節是迄之通不及伺謁可申候哉

一都而御逢之使者罷出候節九時頃迄見合御出無之候者是迄之

通謁可申哉

御附札

使者之儀者都而何茂可被謁候、此外之儀者可為書面之通候

一宝曆十辰年五月十九日、於部屋朽木土佐殿被相渡候書付二通左

之通

御奏者番

一御鷹之鳥等被遣候二付御三家方為御札御登城之節当番居候

懸御目、其外居殘謁候分茂是迄御側衆江申達翌日但馬守殿江

御届書差出申候、以後如何可仕哉奉伺候

一上使相勤御請是迄御側衆江申達候、以來如何可仕哉是又奉伺

御附札

候、以上

五月

御奏者番

御附札 是迄之通可被相心得候

一二丸江罷出候節御門斷之儀銅御門昼夜共之斷相濟居候

一西丸方急御用二而二丸江罷出候節御裏御門斷之儀右京大夫

殿江良阿弥を以相伺候処、其度々御目付中江申達罷越候様尤

右京大夫殿江申達候二不及候との儀二御座候

一押合共二丸出入之儀銅御門昼之内之出入断相濟有之候、夜中

者不相成旨御目付淺野内膳被申聞候

御附札

一西丸方押合共二丸江罷出候儀有之候得者外通り罷越候様是

六月

又同人被申聞候

一宝曆十辰年六月十二日、酒井飛驒殿方被相廻候伺書左之通

右之通御心得可被成候、已上

但目錄之俣二丸江遣候節何二付上り候与申儀計書付遣候様

五月十九日

朽木土佐守

致度旨常阿弥申聞候由

一宝曆十辰五月廿日、二丸御座敷繪図二枚并謁之節繪図壹枚被

御附札即日差出来候謁書等二丸御退出之刻限二茂差懸候節ハ翌日

相廻左之通

右之謁書目錄等差上可申哉奉伺候、以上

「 図 ③ 」

五月

御奏者番

御目付部屋前通御座敷繪図

「 図 ④ 」

御附札

出候

退出刻限二も相成重立候儀ハ御側衆江口上二而申達謁書ハ翌日可被差出候、尤御側衆誰江申達候儀書加可被指

謁之節繪図壹枚

御書院御二之間繪図

一宝曆十辰年六月十六日、於部屋黒田大和殿方被相達候書付左之

「 図 ⑤ 」

通

一宝曆十辰年六月二日、朽木土佐殿方被相達候書付如左

西丸当番之節御礼衆謁在之候節八時迄も御用番退出之注進

二丸江罷出候様前日二被仰聞候者西丸之御使先順二も直二

無之候ハ、御断与相心得、八打候ハ、可罷出与申合候

二丸江登城御用相濟次第退出廻状可差出候、尤押合役可召

六月十六日

黒田大和守

連候

一右同日同人廻状追而二左之通申来

右之通何茂申談候間申遣候、已上

当時能登殿大手方撰津守殿紅葉山火之番被相勤候付近例之

通御使先順相除候様可被申合候処、御人多二も無之候得者

兩人除候而ハ御用日等も急御使先明候儀も可有之哉二付、

此度者急御使先計被心得候様今日何も被申合候

一 宝曆十辰年六月廿七日

先達而右京大夫殿江伺書例書酒井飛驒殿方被指出置候処、右

二 付被仰聞候趣并伺書例書被相廻之

一 御退出刻限二も相成重立候儀者御側衆江口上二而申達候様

可仕旨奉承知候、左之品御側衆江口上二而申達候、謁書ハ

翌日差出可申候哉

一 都而御三家方江懸御目候事

但御礼書ハ相渡可申哉

一 御礼之事

静吉田鹿島三社之御祓日光御門跡方御祈祷之御礼

一 御三家方方生物上り候使者謁之事

口切之御茶御菓子御樽肴初鮭

一 御側衆誰江申達候儀書加可差出旨奉承知候

右謁書是迄之通上書二御届与申儀認可申哉

一 御三家方使者謁之事

是ハ追而御側衆江不申達翌日謁書差出可申哉

別紙

例書

御礼書御側衆江相渡候例

延享五辰年

五月十二日

当番
松平紀伊守
水戸宰相殿

右御所方御快然付御登城於御部屋御礼書二通拙者江被成

御渡候付、一通者但馬守殿江以三阿弥指出候、従大御所様

も御病中以上使御尋之御礼被仰上之、隠岐守殿御本丸江御

越候付巨勢伊豆守江御礼書相渡申候

延享二丑年

閏十二月廿八日

助番
増山弾正少輔
水戸宰相殿

紀伊宰相殿

尾張中将殿

歳暮之御祝儀被仰上其外御礼書二通宛被成御渡候二付隠

岐守殿江三阿弥を以差出候、大御所様江之分巨勢伊豆守

江相渡候

静吉田鹿島三社之御被謁御側衆江申達候例

宝曆十辰年

正月十六日

当番
土井大炊頭

従水戸殿以御城附静吉田鹿嶋三社之御被并未広被差上之、

但馬守殿御差図二付於躑躅之間拙者謁書付認松平肥前守

江相渡候

追而

一右御被謁之儀但馬守殿服中二付当番謁候而、謁書者御側

衆二差出候様以常阿弥被仰聞本文之通相済申候

延享二丑年

正月十六日

当番
松平紀伊守

従水戸殿以御城附静吉田鹿嶋三社之御被并未広被差上之

於躑躅之間拙者謁申候、大御所様江茂右同断被差上之隠

岐守殿御差図二付於同席謁巨勢伊豆守江申達書付相渡候

日光御門跡方御祈祷之御礼謁御側衆江申達候例

宝曆十辰年

正月十六日

当番
土井大炊頭

一御祈祷之御礼静慮院持参差上之但馬守殿御指図二付於燒

火之間拙者謁書旨認松平肥前守江相渡候

追而

一静慮院持参差上候御礼謁之儀但馬守殿就服中当番謁候而

謁書者御側衆江差出候様常阿弥を以被仰聞本文之通相済

申候

寛延二巳年

二月十七日

当番
朽木土佐守

日光御門跡方例月御祈祷之御礼以常熙院被差上之於燒火

之間拙者謁申候、大御所様江も右同断被指上之於同席謁小

堀土佐守江申達書付相渡候

口切之御茶御菓子御樽肴被指上候御使者謁候例

寛延二巳年

九月十八日

当番
金森兵部少輔

一從紀伊殿水戸殿口切之御茶御菓子御樽肴以使者被差上之

於躑躅之間拙者謁申候

一今日御成先江但馬守殿御越二付從紀伊殿水戸殿之使者江

八拙者謁申候而御同人江目錄之俟明日可差出候

初鮭被差上使者謁之例

寛延三年年

八月十二日

当番
内藤大和守

從水戸殿以御城附初鮭一尺被指上之於躑躅之間拙者謁申候

一水戸殿方初鮭被差上候処但馬守殿と今朝直御本丸江登城、

今日者西丸江御出無之旨神尾伊州被申聞候付拙者謁申候

一謁候書付但馬守殿江明日可差出候

御届与相認候訳

宝曆五亥年

十二月十日

当番
森川兵部少輔

一周防守方紀伊宰相殿尾張宰相殿江懸御目候書付差越但馬守殿江差出候処、向後御側衆江申達候分袖二御届与相認

候様常阿弥を以被仰聞候

月日
御届
当番
誰

右之通相認申候

御三家使者謁候例

宝曆十辰年

四月十七日

当番
朽木土佐守

一還御以後為伺御機嫌從御三家尾張宰相殿紀伊中将殿被差

上使者於躑躅之間拙者謁巨勢大和守江申達候

一謁候書付并届書但馬守江明日可差出候

宝曆九卯年

十一月六日

当番
阿部飛驒守
水戸宰相殿使者
谷小左衛門

右從御本丸御参府二付上使被遣從大納言様茂上使被遣候、

為御礼被差上之於躑躅之間拙者謁御側衆江可申達候処、御

本丸江被相越詰合無之付萩原主水正江申達書付相渡候

一水戸殿使者江謁候儀御側衆江可申達与御用部屋坊主を以

申遣候処、御本丸江就御成詰合無之旨森谷久覺申聞候間御

側衆江被申達候様萩原主水江申達候

一 謁候書付但馬守殿江明日可差出候、右之例度々在之兎角

即日御側衆江申達候趣二心得罷在候得共、重立候儀者御

側衆江口上二而可申達旨被仰渡候付翌日謁書差出候趣二

奉伺候

右京大夫殿口上二而被仰聞候趣書付左之通

当朔日附札二而相達候、退出刻限二も相成重立候儀者御

側衆江即日口上二而被申達謁書者翌日被差出候様相達候

付猶又被伺候、右伺之例書二被申聞候分之事共二候間是

迄之通弥被相心得候様存候、仍之最早附札二而不申達口

上二而申達候

一 宝曆十辰年七月廿三日、於部屋酒井飛驒殿被相達候書付

御称月之外者八日二九日之儀御用番退出二相伺可申与申

合候

七月

酒井飛驒守

一 宝曆十辰年十一月朔日、於部屋毛利讚岐殿被相達候書付左之

通

去月廿四日於西丸常阿弥申聞候者、今日謁之儀昨廿三日於御

本丸伺有之猶又從西丸茂伺有之二重二相成候、自今二重二不

相成候様二と右京大夫殿被仰候由咄申候

十一月朔日

毛利讚岐守

一 宝曆十一巳年三月十二日

当年公方様御廿五之御賀二付於山王御安全之御祈祷相願可

申旨今日於部屋何も申談候付、毛利讚岐殿押合方下手紙を以

御祈祷料書付来左之通

御祈祷料

拾万石已上
白銀三枚

五万石已上
同 貳枚

壹万石已上
同 壹枚

右之通御座候

一 宝曆十一巳年六月四日、於部屋申談候書付三通内藤大和殿方被

差越候左之通

御産御催之儀夜中從御目付衆申来候節

覚

一 翌日之当番

一 西丸当日之当番翌日之当番

一 右直手紙二者早々為知可申遣候事

一 同役衆不殘

但助先兩人江者早速可申遣候

一 右下手紙二而為知申遣候事

御産御催之儀夜中二前日当番方申来候節当番心得之覚

一 明六時登城

一 徒使召連候事

一 供之者為詰切候事

御産之被仰渡有之節

一 西丸当番

一 同役衆

右之衆中江早々手紙二而申遣候事

但在邑之衆嫡子有之方江者下手紙二而申遣候事

一 御七夜迄之内四日目六日目者同役出仕之日割無之候得共不

殘登城之事

同役出不申候日割之日者不快二而も伺御機嫌使者二不及

候事

一二日目三日目五日目出仕之日二不快等二而出仕不致候得者

前日之届二不及

当朝届使者差出門前二而見合さ七伺御機嫌之使者為相勤

可申事

一 嫡子之儀者四日目六日目出仕二付其節不快二候ハ、前日御

用番江御届二不及直二朝届使者差出門前二見合さ七伺御機

嫌使者相勤さ七可申事

但嫡子仲間ケ様之節申合も可有之哉之事

覚

公方様江献上物

御出生様江同

御台様江同

平川口江

大御所様江同

都合当番添番共二五人

御本丸

当番

御本丸

添番

同

添番

西丸

当番

同

添番

一 御本丸添

二 同添平川口請取

三 西丸添番

之趣を承候而見合可被出候

一 西丸江者押合壺人可召連段是又被出候同役衆申談候

六月十三日

一 宝曆十一巳年六月十五日、内藤大和殿方来書付左之通

覺

西丸廻状案

今日西丸誰殿御番替付
助御番二付拙者相勤申候、以上

公方様江献上物

御本丸
当番

月日

御出生様江同

御本丸
添番

追而

御台様江同

同
添番

一 右京大夫殿見廻り無之付見合罷出候

平川口江

覺

都合当番添番共二三人

一 御本丸添

二 添平川口江請取

一 西丸当番助番等之節御本丸出仕之日御本丸江不罷出候節御用番江御届二罷越候付、右之趣者追而二勿論可出事

一 西丸御番之節是迄御本丸掛合手紙遣候得共、此已後者押合方押合迄下手紙二而当番助番御番替共御本丸江為心得申遣可

別紙

早朝御産之御催御誕生有之候共西丸当番例刻可罷出候、退

置候

出以後承之候共罷出申間敷候

右之段何茂申合候

一同六月十三日、於部屋申合候書付三通左之通

六月十三日

西丸当番退出之儀九時迄八罷在其後者右京大夫殿御見廻り無

一 宝曆十一巳年、於部屋朽木土佐殿直達之書付左之通

去ル朔日右近將監殿於新番所前溜被仰聞候者、重キ御祝儀之節御台様万寿姫君様江御祝儀物献上有之節右目錄当日直二奥江廻り候様致度候由、披露濟次第早速戻可申段老女衆被申候間右之通即日目錄奥江相廻シ候而も差支者有之間敷哉与被仰聞候付、右目錄を以帳面仕立候故上ケ帳延引可仕之段申達候処、公方様江之上帳差出候後四五日も延引候而も不苦候段被仰聞候間、外差支候儀無御座候間奉得其意候段申達候処、目錄も相濟候ハ、早速戻り候様御達可被置候由被仰聞候、依之目錄渡方之儀御留守居伊丹兵庫江申談候処、目錄数相改書付致差越候ハ、可被請取之旨御留守居衆被請取候名目二而番之頭請取候様可被改之旨被申候、尤押合役之者方相渡候筈二御座候目錄下り候節数被相改前日当番江被申聞候ハ、右懸り押合役之者受取ニ可差出候、其節被相渡候様二と兵庫江申談候、奥二ても四五日ハ留り可申候、随分紛敷無之様可被致之旨同人被申候

右之通御座候間左様可被成御心得候、已上

九月

朽木土佐守

一宝曆十一年十二月十五日、於部屋戸田采女殿直達之書付左之通去二日御台様万寿姫君様江御色直之御祝儀献上之目錄、去ル九日松平内匠方御広敷添番伊賀指添宅江被差越為請取申候、尤前日宅江可差越之旨被申聞候、先達而土佐殿伊丹兵庫江被談候趣与致相違候付土佐殿江も及相談兵庫内匠江尚又申談候処、已後共宅江可差越旨被申聞右之通相濟申候、為御心得申進候、以上

十二月

戸田采女正

牧野越中守

一宝曆十二年六月十九日、朽木土佐殿方書付来左之通一都而年寄衆御逢可有之使者罷出候節年寄衆江被申上候儀、宝曆八寅年正月廿九日当番森川兵部殿江稲生野州口達之趣も有之、其後同人江兵部殿被申談候之通増上寺方丈使僧之外者此方方ハ不申上筈候処、近来者右申合之通無之事も間々有之候付弥増上寺方丈其外ハ此方方ハ不申上候間、惣而右使者分ハ以来共無間違御目付衆方被申上、尤其節此方当番江も被申聞候様去十三日猶又太田三郎兵江申談置候

六月

朽木土佐守

御誕生御催之儀夜中二前日当番方申来候節当番心得之覚

一宝曆十二年十月六日、内藤大和殿方左之通書付来

一明六時登城

一御七夜迄之内四日目六日目同役出仕之日割無之候へ共不残

一徒使召連候事

登城之事

一供之者为詰切候事

同役出不申候日割之日不快二ても御機嫌伺使者二不及候

御誕生被仰渡有之節

事

一同役衆不残江早々手紙二而申遣候事

一二日目三日目五日目出仕之日々不快等二て不致出仕候得共

但在邑之衆嫡子有之方江者下手紙二而申遣候事

前日之届二不及、当朝不快二而登城不致候旨御機嫌伺之使

覚

者可出事

公方様江 献上物 当番

一嫡子之儀者四日目六日目出仕付其節不快二候ハ、前日御用

御出生様江 同 一 添番

番江御届二不及直二朝御機嫌伺使者可出事

御台様江 同 二 添番

但嫡子仲ケ間ケ様之節申合も可有之哉之事

平川口

御誕生御催之儀夜中從御目付衆申来候節之覚

一宝曆十二年十二月廿一日、右近將監殿御渡候御書付之写黒田

一翌日之当番江直手紙二而早々為知可申遣事

大和殿方被差越候左之通

一同役衆不残

卷上
御奏者番江

但助先之者江者早速可申遣候事

御奏者番

右下手紙二而為知申遣候事

右来未正月朔日より西丸江詰番可被相勤候

一同十二月廿三日、右近将監殿御渡候御書付之写杉野遠江殿方

被差越候

卷上

松平右近将監殿御渡候御書付写

御奏者番衆

寺社奉行衆

大目付江

西丸江出仕之覚

年始

一御本丸江登城之面々其当日西丸江も出仕謁御奏者番退出

但御太刀馬代ハ御本丸御納戸江納之

一寺社之分西丸江御礼罷出二不及候

一六日御礼之寺社西丸江献上物ハ御本丸江相伺

一町人諸職人等西丸江御礼罷出不及献上物ハ御本丸江納之

五節句 八朔

一御三家

一万石以上并嫡子

一高家

一御留守居

一大御番頭

一交代寄合之内表向方御礼二罷出候分

一表高家

一金地院

一護持院

月次

朔日

一御三家并松平加賀守松平越前守溜詰御譜代衆諸衆御奏者番

嫡子共高家御留守居大御番頭

十五日

一万石以上并嫡子

一交代寄合之内表向方御礼二罷出候分

一表高家

一金地院

一護持院

廿八日

一 布衣以上之御役人

一 交代寄合

一 三千石以上之寄合

一 布衣以上之寄合

一 法印法眼之醫師

一 中奥御小性

一 同御番

惣出仕

御本丸江罷出候節者西丸江茂出仕候事

惣而御礼之事

西丸江も出仕之事

右之通来未年始方御本丸相济而不込合様可有出仕旨可被相

触候

卷上
松平右近将監殿御渡候御書付之写

大目付江

若君様江献上物之覚

一 端午重陽歳暮

一年頭八朔

一 参勤之御礼

一 帰国帰城御礼

一 若菜七夕献上之分

一 口切御茶献上之分

一年中為伺御機嫌献上物

右献上物之品公方様西丸二被成御座候節之通来未年始より

可有献上候、年始八朔之御太刀目録并端午重陽歳暮御祝儀之

時服者御本丸江可被相納候、此外之献上物ハ西丸江可被差上

候

右之趣可被相触候

一 宝曆十二年十二月晦日、西丸伺書御附札相济周防守殿以常阿

弥被相渡候由二而太田撰津守殿方被差越候左之通

御奏者番

来未正月朔日より西丸江諸番可相勤旨御書付右近将監殿被

成御渡候付左之通奉伺候

一 西丸当番勤方之儀諸事公方様西丸江被成御座候節之通相心

得可申哉

一 御三家方御登城之節御詰合不成候ハ、掛御目可申哉

一 松平加賀守松平越前守溜詰衆登城之節前々之通謁可申哉

一 御三家方使者五節句月次其外差定候事ニ而使者罷出候節御

詰合不被成候ハ、謁可申哉、格段之儀ニ而被差上候使者并

四品已上御逢可被成使者出候節者九時迄見合御出無之候

ハ、前々之通謁可申哉

一 日々西丸江御出被成候儀ニ而御座候哉、若御出無之節前々

即日差出来り候謁書等西丸詰合之御同朋頭江相渡可申哉、

御退出江差懸候ハ、西丸詰合之御側衆江口上ニ而申達翌日

御側衆誰江申達候段御届書差上可申哉

但右之節目録等有之候ハ、御側衆江相渡可申哉

一 前日并当日之謁書一紙目録半切等西丸江御出不被成候節ハ

詰合之御同朋頭江相渡可申哉

一 火事地震之事御本丸江御登城之段承り候ハ、西丸江相詰可

申哉

一 当番退出之儀御本丸方直ニ御退出被成候欵又者西丸江御出

不被成候節平日者前々之通九半打候ハ、罷出可申哉、御礼衆有之候節ハ見合退出可仕候哉

但年頭五節句月次御礼日等ニハ御礼衆濟寄候而見合退出

可仕候哉

一 前々之通部屋御渡被下候様仕度奉存候

十二月廿六日

御附札

何茂伺之通たるへく候、周防守日々西丸江罷出候積候、

若不罷出節即日差出候謁書等有之候ハ、直ニ西丸御側

衆江可被申達候、其段可被申聞候、若御側衆詰合無之候

ハ、周防守宅江以使者可被指越候、部屋之儀令承知候

一 宝曆十二年十二月晦日、太田撰津守殿方別紙式通被指越候左之通

明朝日方西丸御番相勤候儀右近将監殿江以春阿弥申達松平

撰津守江も以同人無急度申達候事

一 右同断之趣周防守殿江も相届且前々之通明日より添番罷出

候儀も以常阿弥申達、西丸部屋昨日請取候儀も以同人無急度

申達候事

一 右同断二付西丸御目付衆江申達候儀先達而申談候通別紙之

趣口達之上覚書も相渡候、御本丸御目付松平庄九江も為心得致口達候事

右之趣今日被出候同役中申談候上土能登殿被相届候由被申

越候、拙者儀今度西丸之儀伺書茂差出候付為御心得御意

候処同人被申越候間申進候、以上

十二月晦日

太田摂津守

御目付衆江申達候覚

一 西丸江罷出候節昼夜御門断之事

一 挟箱断之事

一 押合共昼之内御門出入之事

一 当番御台所定断之事

一 宝曆十三末年六月廿四日、承知候付留置可申事

増上寺方丈御料理被下候前日为御札罷出候付居残候儀近格

伺候得共、奉書を以被仰出候儀表江不相知候事故居残伺不

申候段右近將監殿江以春阿弥当番和泉殿被申達其通相济申

候、以後右体之節者伺二不及候、為心得和泉殿方部屋二而

追々被申達候

一 宝曆十三末年七月四日、先達而何茂申談伺書周防守殿江朽木土

佐殿被差出候処、御附札相济御渡候付同人方被指越候左之通

卷上
御奏者番

期日居残謁候節御側衆詰合無之候得者前々御側衆江被申達

候様御目付江申達置退出仕候、右之通相心得可申哉

御附札

但御側衆江申達候節者翌日御届書差上、御側衆詰合無之御

目付江申達置候節者翌日例謁書之通相認差上候、右之通先

達而但馬守殿江相伺御差図有之候、右之通相心得可申哉

御附札

西丸御側衆詰合無之候ハ、御本丸江罷出西丸御側衆江

申達候様可被致候

一 上使帰御請御側衆詰合無之節者如何相心得可申哉

但右之節者御側衆江御声可被懸与先達而但馬守殿被仰聞

候、其通相心得可申哉

一 於御本丸俄上使被仰付若君様上使兼相勤候様被仰付御請御

御附札

△ 側衆詰合無之節ハ如何相心得可申哉

但右之節御側衆詰合無之候者御側衆江被申達候様御目付

一宝曆十三未七月廿六日、於部屋酒井飛驒殿被相達候書付左之通

江可申達置之旨先達而但馬守殿被仰聞候、其通相心得可

七月廿二日御三家方江御鷹之雲雀以上使被遣候付、如例伺之

申哉

上居殘懸御目御側衆江可申達与御用部屋坊主を以申込候処、

右之趣奉伺候

御供ニ被參候由ニテ詰合之御側衆無之旨申聞候、寛保三亥年

六月

七月十一日廻状之趣を以取計可申処久々右取計之趣も無之

御附札

御本丸江罷出御請被申上候節直ニ御本丸ニ詰合之西丸

候、其上今日之儀者吹上御成与違表向江者不相知儀故旁右之

△ 御側衆江申達候様可被致候

御側衆江申達候様可被致候

通ニも難致御側衆被出次第可申達与暫見合候処、小笠原若狭

一宝曆十三未年七月十四日、当番土屋能登殿廻状追而申来

殿被出候ニ付御三家方江懸御目候儀例之通申達候、且又御用

一当時同役衆四人火之番相勤候付右之衆当番之節若詰場江罷

部屋坊主岸本良味江御側衆詰合無之節ハ御目付衆江申置候

出候程之出火有之候ハ、其節急助之儀助順之方江早速可

得共、今日者吹上御成とも違差付ケ御目付衆江申置候程難計

申遣候得共、其時ニ至リ助先之方遠方之衆も可有之候得者

見合罷在候得共、以後者御目付衆江申置候儀も可有之間此趣

急成間ニ合兼可申候間、助順ニ貪着無之昼夜共ニ先御曲輪

若狭殿江致物語具候様良味江咄置候様翌廿三日若狭殿方昨

内其外最寄之衆江助之儀申遣無彼是助御番之心得ニ而被出、

日申置候趣被致承知、此已後詰合無之節不及相待先格も有之

夫方助順之方江も被申越順之衆被出候ハ、助御番可被相勤

候上ハ御目付衆江申置可致退出旨、右之通ニても彼方指支ハ

候、右ニ付火之番衆両御丸当番附合候節ハ両方方助之儀申

無之段良味を以被申聞候

来候事も可有之候、左様之差支又者留守等ニ候ハ、直ニ其

七月

酒井飛驒守

使先方方近所之衆江被差越候様ニ被取計可然旨何茂申談候

一宝曆十三未八月廿日、於部屋越中殿被相達候書付左之通

火之番之者当番之節出火有之候ハ、先達而申合候通急助可申遣候、此間御暇之衆も有之手明之方茂少ク候得者急助申遣、病氣又者留守等候ハ、様子二より御番之方明キ可申哉、詰場江罷出候も遅ク可申二付如何相心得可申哉と火之番之同役申合無急度左衛門尉殿江以春阿弥相伺候処、当番之者何レ二も致登城非番も罷出候得者其節申談手明之方与代リ合候而詰場江可罷越候、西丸当番も右之趣二相心得候様被仰聞候

一西丸当番之節急助之御方間二合不申候ハ、御本丸江申越手明キ之御方与御代リ合可申候、兼而左様御心得候様致度此段得御意置候、以上

八月十九日

松平伊賀守

朽木土佐守

牧野越中守

一宝曆十三未年九月廿五日、朽木土佐殿廻状追而之内左之通申来

一都而周防守殿御逢可有之使者九時迄見合御出無之候得者、

当番謁目録等有之候ハ、登城之節差出来候儀者勿論是迄之通御座候、然処若直二西丸江登城夫より御本丸江御越候節迄二御逢可有之使者不被出候ハ、右使者罷出次第謁目録者明日可差出旨御同人被申達候様二与常阿弥申候、此段者席も有之二付無急度同人江致物語候処得御内意候間常阿弥申聞候、且西丸江御出無之直二御本丸江登城若御断申来候ハ、九時迄見合候、使者之類又者即日可差出品等有之候ハ、登城之否御聞合之上右之御用有之事二候得者御居残被成目録等被差出可然与存候、此段為御心得申進候

一宝曆十三未年十二月十四日、牧野越中殿方被差越候書付左之通

御奏者番

御附札

西丸江御見廻り無之節者御逢可被成使者等拙者共謁、即日差出来候目録書付前日之謁書等如何可仕哉

右之外者只今迄之通相心得可申哉奉伺候、以上

十二月

御附札

△

西丸江見廻り無之節者御本丸当番方可被差出候、退出已後二候ハ、宅江以使者可被差越候、自分謁可申分ハ当日

御本丸当番方相伺候様可被致候

右之外者可為只今迄之通候

別紙

一 伺書御附札二周防殿可有御逢分者当日御本丸当番方相伺候

様可致旨二御座候、尤是ハ先格無之儀之事二而定式之儀者

只今迄之通九時迄見合謁可申旨周防殿被仰候由盛阿弥申聞

候、右伺之儀者其度々西丸当番方御本丸当番江申越候事

一 西丸方御本丸江懸合手紙之節見廻り有無之儀承合御本丸当

番西丸附御同朋頭江承合有無之儀西丸江申遣候事

但西丸附御同朋頭詰合不申候ハ、御本丸御同朋頭江承合

可申候事

一 西丸当番退出之儀見廻り無之節者九半打大目付衆申合可致

退出候、謁等有之節ハ見合罷出可申事

右之趣今日被出候同役衆申談候、以上

十二月十四日

当番 牧野越中守

一 宝曆十三年十二月十七日、朽木土佐殿方以手紙別紙書付被

差越左之通

此間從越中守方相廻候書付之儀二付猶又一昨十五日周防守

殿被仰聞候趣別紙書付一通為御心得指進候、已上

十二月十七日

朽木土佐守

別紙

御本丸江伺二遣候儀二付今日周防守殿御直二被仰聞候ハ、只

今迄九打候而も為待置候類又者適々之儀二付同役謁候例無

之儀ハ御本丸江伺二可差越候、尤九時迄見合謁之儀ハ其迄之

通可心得旨被仰聞候

右之意味二候故昨日之通被仰聞候由二御座候

一 宝曆十三年十二月廿日、越中殿土佐殿采女殿被申談候趣書付

左之通

一 西丸前日之謁書等翌日西丸江不差出直二御本丸当番江差越

周防守殿御見廻り之否二無構差出申候事

一 御同人御見廻り有之段不申来以前九半打候ハ、退出可致候、

若其後西丸江御出候而も当番詰合不申候段御承知相濟申候

事

一 当日差出候品者此間之通相心得可申候事

右之通今日被出候同役衆申合之上采女正土佐守申談周防守殿江無急度常阿弥を以申上候処、書面之通相心得候様被仰聞候旨同人申聞候

一 御礼衆有之節九半打見合候儀者只今迄之通御心得可被成候事

一 懸ケ合手紙之節見廻り承合之儀者此間之通可被仰越候、御本丸右掛ケ合之返事者差遣見廻り之儀者相知次第可申遣候事、右之通前文之趣二付猶又被出候衆申談候

十二月廿日

戸田采女正

牧野越中守

朽木土佐守

一 宝曆十三末十二月廿七日、戸田采女殿口達之趣覺書左之通

一 中奥御番衆於西丸謁席之儀近来大広間二而謁候得共、前々格も有之事故中奥御小性衆二准向後者於芙蓉之間謁可然旨土佐殿二申候旨采女殿御達有之候事

一 宝曆十四申年正月二日、朽木土佐殿右被差越候書付左之通

御三家方右献上物御謁目録者御本丸江被遣候後御側衆江御

逢献上物之儀被仰達候様可被成候、惣而奥江廻り候献上物者右之通御心得可被成候、已上

正月二日

朽木土佐守

一 宝曆十四申年正月八日、朽木土佐殿右被相達候書付左之通

此間何茂申談候通遠御成之節当番居残候而者廻状甚遅ク事二より差支も有之候付、当番者御用番退出迄罷在八時頃誰成共忝人罷出代り合還御迄相詰候様二仕度之段旧臘廿七日右近將監殿江申上候之処被成御承知可被仰談旨被仰聞候、然処去五日拙者不罷出候付右近將監殿和泉守江御逢右居残之儀旧臘拙者申上候通可仕旨同人江被仰聞候由申越候、尚又昨日右近將監殿拙者江御逢昨日和泉守江被仰聞候通可仕旨被仰聞候付左之通

一 遠御成之日兩当番者当り之通相勤居残りハ八ツ頃罷出当番者御用番退出後居残之者と代り合可申事

一 居残順是迄之通弥相立置当番と居残順与落合候ハ、当番相勤、居残ハ次之順二而居残候様可致候

一 助番と居残順与落合候ハ、助番相勤、居残ハ次之順江可申遣

候

一 助口与居残順与落合候ハ、居残相勤、助口者次之順ニ而被
相心得候様ニ可致候

一 御使先与居残順落合候ハ、御使先を相勤、居残ハ次之順ニ
而相勤候様可致候

一 西丸添与居残順落合候ハ、添相勤、居残者次之順江可申遣
候事

一 押合之者も御用番退出後当番退出之節居残之押合与代り合
可申事

一 当番方退出迄之廻状早々差出居残之方よりも還御迄之廻状
可差出候

但遠御成之節者両所より廻状指出候事
右之外者唯今迄之通可被成御心得候

正月七日

朽木土佐守

一 宝曆十四申年正月十五日、申合書付左之通

一 御鷹野御成被仰出候ハ、翌日之当番江廻状已前ニ先押合方
可申遣候

一 翌日当番方居残順江手紙ニ而可申遣候、居残之者病氣差合ニ

而難罷出候ハ、右居残之者方直二次之居残順江可申遣候

一 此間申談候通居残之同役八ツ時前罷出於部屋八ツ時当番与
代合可申事

但八ツ打候ハ、中之間江罷出当番与兩人罷在退出後代り
合可申事

一 居残之者ハ八ツ時方還御迄之御番ニ付、還御已後ハ当り之当
番方如定例翌朝迄之御番相心得可申事

一 代り合之節火之番江為改候ニ不及居残之者退出之節如例火
之番入為改可申候、右之趣者此間土佐守太田三郎兵衛江申談

置候事

右之通猶又何茂申談候

正月

牧野越中守

朽木土佐守

戸田采女正

一 宝曆十四申正月廿八日、伊賀殿土佐殿火之番中ニ付申合之書付
左之通

遠御成之節当番居残順与代合二相成候二付火之番之者当番

松平伊賀守

之節先達而申合之通二御座候、火之番之者居残順二而代合

一宝曆十四申年二月十五日、於部屋申合候書付左之通朽木土佐殿

二罷出居候節も当番之通詰場江罷出候程之出火候者当番之

方被差越候

通詰場江罷出候程之出火候者当番之方江早々可申遣候、若

於西丸在着之使者罷出当番謁一紙目録即日差出可申哉翌日

加役衆当番之節者御城向寄之方江可申遣候事

可差出候哉と一昨十三日拙者西丸当番之節右近將監殿江以

但当番之方遠方之衆二候ハ御城向寄之方江被申遣候、向

常阿弥相伺候処、一紙目録者即日指出候様二と同人を以被仰

寄之方被出次第火之番之者ハ代合可申候間追而当番之方

聞候間、御謁相濟候ハ、御本丸当番江一紙目録被差出候様可

と御代合可被下候

被成候、若退出二候ハ、是迄之通御宅江被指遣候様二と存候

一火之番之者当番二而手明キ之方居残之節還御已前出火候者、

但都而一紙目録之分者即日被指出候様御心得可被成候

火之番之当番御城江不罷出直二詰場江罷出候付、其内還御

二月十五日

朽木土佐守

御座候共居残之方直二当番代御勤可被下候事、還御已後出

一宝曆十四申年二月十九日、申合之趣左之通

火二而候者火之番之当番之者申合之通先御城江罷出向寄江

當時能登殿紅葉山火之御番被相勤候付御使先順相除被詰候

助之儀可申遣候

時分、外二被出候衆も無之節御使先者被心得候様今日何茂申

一火之番之者当番二而加役衆居残二被出候節居残之内出火候

合候

者、火之番之当番江者不被申越手明之向寄江直二助之儀可

一宝曆十四申年三月二日、板倉美濃守西丸初御番相勤候付、周防

申越候様加役衆と申談候

守殿江於御本丸当番土岐美濃守江添朽木土佐殿方被申達候口

正月廿八日

朽木土佐守

上之趣左之通

今日周防守殿見廻り有之候ハ、早々為知候様盛阿弥江申達、
弥見廻り無之候ハ、今日西丸板倉美濃守初御番相勤候段御
届不被申達候間、其段御本丸当番方御届申達呉候様二と申
来候間其旨盛阿弥江申達候

右之訳二而候間見廻り之否申上御咄申候処見廻り二御越
可被成旨二相成候事

一宝曆十四申三月四日、於部屋土屋能登殿被相達候書付左之通
出火之節西丸当番罷出候ハ、御本丸当番江罷出候段口上二
而可申遣事

一火之番之者西丸当番之節出火有之向寄之方急助申遣御出被
成候ハ、是又同様二御心得被成、其後助順之方江被仰越助
順之方御出被成候節も同様二御心得可被成候事

此間何茂申談候間書付進之候、向後右之通御心得可被成候

三月四日

戸田采女正

土屋能登守

一宝曆十四申五月二日、朽木土佐殿御本丸当番之節廻状追而之
内左之通申来

一伊予守殿西丸御附被仰付候間周防守殿御本丸御兼不被成以
前之通諸事相心得可申哉と盛阿弥を以伊予守殿江相伺候処、
其通可心得旨御同人以同人被仰聞候、為御心得申進候
一宝曆十四申三月四日、戸田采女殿土屋能登殿方被差出候書付左
之通

出火之節西丸当番罷出候者途中方御本丸当番江罷出候段口
上二而可申遣事

一火之番之者西丸当番之節出火有之向寄之方江急助申遣御出
被成候与是又同様二御心得被成、其後助順之方江被仰越助順
之方御出被成候節も同様御心得可被成事

此間何茂申談候間書付進之候、向後右之通御心得可被成候

三月四日

戸田采女正

土屋能登守

一宝曆十四申年五月廿四日、土屋能登殿方手紙二而来書付左之通
西丸御当番之節夜中出火二而御登城被成候砌、從御城御使等
被差出候儀も候ハ、其節当番御目付衆江御断被仰達次第御
門出入之儀滞不申候様致度旨、拙者共火之番二付御門断之儀

申達候序有之候間細井金右江申達置候、左様御心得可被成候

五月

朽木土佐守

土屋能登守

一宝曆十四申年五月十五日、朽木土佐殿方以廻状被差越候申合之帳面附届書付左之通

三月二日土岐美濃守二度目御番之節拙者為添罷出候処右近将監殿御逢被仰聞候者、近来新役被仰付候砌附届等次第二重くれ候様二御承知被成候間、前々之通二致候様二と被仰候付可申談之旨御挨拶申上置候処、其後四月十五日御同人

猶又御書付御渡右書付之趣を以申談致決談候者、其趣書付掛御目候様被仰聞候付何茂申談左之書付之通相極り候故御同人江入御内覽候処、弥此通相極置以後増長不致候様去十三日被仰聞候付左二相記掛御目候、尤四月十五日御同人御渡候書付も左二記申候

右近将監殿御渡候御書付

一御城江被召連候御役二被掛候役人前々方人数多無之様先格

之通被申合候事

一同役音信贈答者勿論御役二付贈物等先格二増長不致候様被申合候事

但押合并被召連候供互二自分之音信等前々之通無用被申合候之事

一当番之節被相頼部屋江被呼候坊主衆四五人二被限候様被申合候事、宅江被招候節馳走等手輕く都而贈物等前々之通手輕被致候様被申合候事

但坊主衆之外贈物等も前々之通手輕会积被致候様被申合候事

一新御役之衆師範江之謝礼且御役砌都而音信贈物等前々之通二増長不致候様被申合候事

一申談等使者之外相互二押合被招振舞ケ間敷事前々之通無用二被申合候事

右之趣各心得之事二在之候得共猶又前々之振合不違候様可被申合之事

右之通二付申談候趣

右近將監殿御渡候書付之趣付左之通相心得可然申談候

一部屋江召連候者平日押合式人書役式人

但事立候日二者見合二召連可申、見習之者有之節者別段

二召連可申事

一同役音信贈答并御役二付贈物弥是迄之通、猶又別紙書付之

趣二取計可申事

但家来之者共相互自分之音物弥無用之事

附札
△ 此書付左二記ス

一当番之節呼出候坊主頼之儀以来四五人を限申付可然候、是

迄相頼置候五人以上も在之分者坊主とも申談四五人程充罷

出候様二致可然哉と存候、一通り部屋江致出入候坊主共之

儀者是迄之通二而可然候、且宅江招候節弥手輕贈物等も

前々之通取計可然候

但坊主衆之外も弥手重不相成様可然候

附札
呼出坊主是迄五人以上頼有之分以来減候様減次第致

△ 置可然事

一新役之衆師範江之附届別紙書付之趣二而可然事

附札
△ 此書付左二記ス

一互二押合等相招振廻ケ間敷儀前々之通愈無之様可然候

一当番之節坊主江之弁当持参之儀先年も申合候通酒肴等持参

之儀弥堅相止候事

但同役江之弁当是又弥不致持参候事

一呼出坊主頭取与申儀以来相止候事

新役師範江之附届

一師範承知二付為挨拶以使者生肴一折師範之押合役人江端物

類一端宛

一支度等為見候付初御番前師範之押合役一人并書役一人相招

候節、料理等手輕ク執計押合役江三百疋書役江二百疋

但其節不参候押合江者貪着無之

一初御番相濟候付師範江以使者生肴一折縮緬二卷

右押合役之者江三百疋充

但西丸初御番并御本丸二度目御番二者貪着無之

附札
△ 縮緬二茂不限候事

一御役儀御礼申上候付配之外別段二師範江以使者一種五百疋

右押合役之者江三百疋ツ、

御役儀御礼申上候節

一二度目御番相濟候後暫御番之度々師範押合役之者相頼候付
罷出候者江三百疋

太刀馬代

但押合役之者一順者罷出候節右之通相贈之二度目より

銀壹枚ツ、

ハ貪着無之

御側衆

一当番之節最早師範押合相頼ニ不及候ハ、其節夫迄差出候為

挨拶師範江羽二重二疋生肴一折

△

同断

右押合役之者江三百疋ツ、

三百疋

附札
△ 羽二重二茂不限

一暑寒師範江其時節之端物類肴

右押合役之者江肴代二百疋ツ、

二百疋宛

一中元歳師範江紗綾二卷干鯛

△

右押合役之者江三百疋ツ、

同組頭

附札
△ 紗綾ニも不限

一三度之御番為添被出候方江之音物は迄之通肴一折

三百疋ツ、

押合役之者江三百疋書役之者江二百疋

二百疋ツ、

右之通御座候、五万石以上ニ而も書面之通ニ候事

百疋ツ、

御老中

御側御用人

若年寄

御側衆

同役

披露之同役江

御同朋頭

元方御納戸頭

同組頭

弘方御納戸頭

同組頭

坊主組頭

御用部屋坊主

呼出坊主

平出入坊主

元方
帳役
弘方

△

此節計

百疋ツ、

式両

百疋宛

百疋宛

五百疋

銀二枚

年中附届

参勤

中元

歳暮

三百疋宛

式百疋宛

三百疋宛

式百疋宛

暑中

五百疋宛

御賄方組頭

進上役

中之口 上番 不残
下番

同出入

湯吞所六尺

御玄関番不残

御長屋門不残

寒中

銀三枚ツ、

一ケ年一度相招料理之上

三百疋充

但不参之者江者料理代二百疋相添贈之、尤新役初而相

招候節者引落二汁五菜其後者一汁三菜

紋付着服

但暑寒品隔年二相贈之

在所之品両度

参府之節土産在所之品

雁拝領之節

式百疋充

中元

歳暮

式百疋充

同断

参勤

同断

御本丸

呼出

坊主

平出入

共

御納戸組頭

坊主組頭

中元

歳暮

百疋ツ、

同断

同断

同断

同断

同断

同 御納戸帳附

同 湯吞所六尺

御本丸 中之口番

御本丸 用頼

西丸 中之口番

同 用頼

右之通二御座候、五万石以上茂右同様二候得共是迄致来候分者其通二相贈之候事

右書付共前条得御意候通右近将監殿御内見有之候事二候得者相違不致候様二御心得可被成候、以上

申五月

朽木土佐守

一明和元年申年七月廿八日、申合之書付内藤大和殿より被差出左之通

去ル十四日牧野遠江殿西丸当番之節從御本丸紅葉山御参詣有之伊予守殿例刻西丸江登城夫より御本丸江御越候、

其節当番退出之儀御同人江盛阿弥心附之趣相同候処、例之

通与御挨拶之旨遠江殿江同人申聞候、此已後右之格有之候

ハ、御本丸江附人致置伊予守殿退出申来次第九半時分二

而も当番可致退出候、夫共御同人退出二而も御用番退出無

之候者見合九半打可致退出之旨今日何茂申談候間、右之通

御心得可被成候、以上

七月廿八日

内藤大和守

一明和元年八月七日、土岐美濃守当番之節伊予守殿江伺之趣盛阿弥心得二左之書付相達候処、御附札二而同人を以御渡被成候左之通

△ 伊予守殿從京都御帰府迄之内西丸二而差出候目錄書付類諸事如何相心得可申哉

御附札 △ 月番江可被差出候事

一明和元年申年八月十六日、牧野遠江殿廻状追而之内左之通申来一当時大和殿吹上上覽所火之番被相勤候付近例之通御使先順

相除被詰合候時分、外二被出候衆も無之節者急御使先者被心得候様今日何茂被申合候

一 明和元年十月廿五日、琉球中山王使者江送物之儀二付右京大夫殿江内藤大和殿被差出候書付同人方被差越左之通

御奏者番

中山王使者読谷山王子より私共江音物有之候者先格之通受納仕為返礼銀子相送候様可仕候、依之申上置候

十月

一 明和元年十一月十七日、琉球人登城之節之伺書右京大夫殿江内藤大和殿被差出候処御附札相濟、昨日当番戸田大炊殿御渡候付右書付大和殿方被相廻候左之通

御奏者番

中山王献上之御太刀目録大広間御中段下より二畳目指置御披露仕候、寛延元辰年之通御下段御襖建合通二而御披露可仕哉

一 右之御太刀目録引申候節寛延元辰年之通二ノ間御板縁之方江引可申哉

一 薩摩守読谷山自分之御礼之節者御板縁二而御披露可仕哉、寛延元辰年も右之通御座候

一 薩摩守家来御板縁之下二而御披露可仕哉、寛延元辰年も右之通御座候

一 音楽之節音楽始諸事寛延元辰年之通当番之者相心得可申哉

一 西丸二而若君様江中山王献上之御太刀目録大広間二之間南中之柱際二而御太刀目録下二不置御披露可仕哉

読谷山自分之御礼之節三之間南御敷居方二本目柱際二而御披露可仕哉、寛延元辰年御謁之時分も右之通御座候

一 御暇之節而御丸二而読谷山江被下物之節寛延元辰年之通当番出席不仕儀与心得罷在候

右之通寛延元辰年琉球人御代替御礼申上候節奉伺相勤申候、此度も右之通相心得可申哉奉伺候、以上

十一月

御附札
△ 可為伺之通候

御奏者番

一 西丸二而若君様江中山王献上御太刀目録大広間二之間南中之柱際二而御太刀目録下二不置御披露可仕哉、読谷山自分之御礼之節三之間南御敷居より二本目柱際二而御披露可仕哉、

寛延元辰年御謁之時分茂右之通御座候

一 御暇之節而御丸二而読谷山江被下物之節寛延元辰年之通当

番出席不仕儀与心得罷在候

右之通寛延元辰年琉球人御代替御礼之節奉伺相勤申候、此

度も右之通二相心得可申哉之段右京大夫殿江相伺候処伺之

通相心得可申旨御差図有之候、此段申上候、以上

十一月

一 明和元申十一月廿日、加納遠江守廻状追而之内

一 伊予守殿御本丸兼御勤被成候付今日御書付も出候間周防守

殿御本丸兼被成御勤候節之通諸事相心得可申哉、其段伊予

守殿江以常阿弥相伺候処其通相心得候様被仰聞候、此段為

御心得申進候

一 明和元申年十一月廿一日、内藤大和殿酒井飛驒殿方被指出候

書付左之通

年始其外御次第書御規式書是迄銘々江為扣配り候処、以来

者古法之通銘々江不相配御当日相濟候後廻状二而相廻シ写

留候上致順達可申候、元服之御次第書ハ是迄之通銘々江相

配可申段何茂申合候

十一月廿一日

内藤大和守
酒井飛驒守

一 明和元申年十二月廿八日、土井大炊頭廻状追而之内

為伺御機嫌同役衆被出候儀此間御書付之出仕候之外明廿九

日来月二日当番之外兩人ツ、申合可罷出与今日何茂申談候、

此段為心得申進候

伺御機嫌申合

十二月廿九日

大和
松能登

閏十二月二日

牧遠江
戸大炊

一 明和元申年閏十二月三日、申合之書付大岡兵庫殿被相達候左之

通

伺御機嫌申合

閏十二月

四日

土能登

〔松能登

一明和元閏十二月廿二日、土岐美濃守直達之書付左之通

五日

出雲

御白書院出御之節於溜声相聞候由、以来左様無之様二与右京

〔牧遠江

大夫殿以常阿弥被仰聞候

六日

越前

右之趣拙者当番之節常阿弥申聞候間書付致進達候

〔兵庫

閏十二月

土岐美濃守

七日

戸大炊

一明和二酉年二月十五日、内藤大和殿土屋能登殿方被相達候申合

〔加遠江

書付左之通

八日

土能登

唯今迄行列断大目付衆江申達其後相達有之当人方大目付衆

〔大和

江申遣候節、最初断書取集差出候方江も右之趣申遣候者度々

九日

出雲

右取集候方方同役衆江扣直之儀申通来候得共、已来断直之儀

〔兵庫

申来候者集置其御当日相济候上右断書扣等之儀一所二申遣

十日

越前

可然旨何茂申合候

〔加遠江

二月十五日

内藤大和守

十一日

土能登

土屋能登守

〔松能登

一明和二酉年五月十五日、仙石越前殿被相達候書付左之通

十二日

大和

去十三日尾張殿就御暇為相伴罷越候節、御奏者番大目付御老

〔牧遠江

中之方江片側二可致着座哉与筒井和州無急度被相同候処、何

レニも御奏者番者御老中方之向江可致着座旨右近將監殿以
三阿弥被仰聞候段同人被申聞候付、其節拙者右之通ニ致着
座候

五月

仙石越前守

一明和二酉年六月十六日、加納遠江殿廻状追而之内左之通申来
一当時越中殿紅葉山御宮御靈屋火之番被相勤候付近例之通御
使先順相除被詰合候時分、外ニ被出候衆も無之節者急御使
先者被為心得候様今日何茂申合候

一明和二酉年六月十六日、朽木土佐殿方被相達候書付左之通

上野増上寺御参詣有之候御使先ニ而御登城之儀、火之番之
御方御使先御当り候共次之順江可被仰出候、尤次之順加役
衆ニ候者加役衆御除其次江可被仰遣候、火之番之御方御目
見ニ御登城之儀ハ勿論之儀ニ御座候、且御不参之節ハ当番
江御断被仰遣候様ニと存候、去々年之申合ニ無之候付申進
置候

六月廿五日

朽木土佐守

一明和二酉年七月七日、土屋能登守殿方被相達候書付左之通

曲淵勝次郎被相達候書付写

御奏者番衆

土屋能登守

新御番組頭

御小性組与頭

部屋江

初度目

式度目

御修復之節

御奏者番衆

同日於部屋土屋能登殿朽木土佐殿江為心得被指越候書付左之
通

御小性組与頭部屋

間口壺間半

奥行三間

新御番組頭部屋

間口壺間

奥行三間

「 ㊦ ⑥ 」

一明和二酉年八月八日、朽木土佐殿方被相達候申合之書付左之通

去申七月十四日牧遠江殿西丸当番之節從御本丸紅葉山江御參詣有之、伊予守例刻西丸江登城從夫御本丸江相越候付其節当番退出之儀同七月廿八日被仰談有之候、都而御參詣日者退出茂早候間御本丸江致附人置、伊予守退出之旨申來次第御用番之退出ニ無貪着九半時分ニ而も可致退出候

一紅葉山上野増上寺御參詣日同人從御先詰直ニ帰宅之旨承候ハ、是又御用番之退出ニ無貪着可致退出候、同人御用番之節西丸御用向御心得之方右之格有之節も右同様ニ相心得可申旨何茂申談候

八月

朽木土佐守

一明和二年酉八月朔日、土屋能登守殿左之書付被相達候

拙者儀内桜田御門番相勤候付、先達而火之番之衆申合之通兩御丸当番之節出火有之候ハ、先致登城、手明之方被出次第代り合御番所江可罷出候

右之趣ニ相心得罷在候段無急度周防殿江以常阿弥申達候処承知之由同人申聞候間、諸事去々未年八月十九日火之番之衆申合之通御心得候様致度存候

一当番日所々御成之節者御番所当番候ハ、助之儀可申進候、非番之節者当番相勤可申候、居殘御番之儀も右准シ相勤候様可致候

右之趣得御意置候

八月朔日

土屋能登守

一明和二年酉年九月十六日、朽木土佐殿方以手紙書付ニ通被差越候左之通

当七月廿二日以上使御鷹之雲雀松平讚岐守殿江被下候節、病氣ニ付右御礼為名代嫡子兵部大輔殿登城例有之由ニ而西丸江茂為御礼同人登城、溜詰嫡子者名代御礼ニ西丸江も罷出候

筈二先年同相濟候由被申候付謁相濟申候、右例者宝曆三酉年六月十二日井伊掃部頭殿嫡子婚姻之御礼病氣付為名代備中守殿被出候、其節同茂相濟候由ニ而西丸江茂為御礼同人登城謁相濟申候、乍然名代謁候儀如何可有之難相分候、右之趣伊予守江此間得内意候処、溜詰衆之嫡子者為名代被出候者謁可申候、尤先格之通名代計ニ居殘候二者不及候、居殘罷在候之節被出候ハ、謁候様申聞候、此段為御心得申進候

九月

紅葉山上野増上寺御参詣日伊予守御先詰之節当番退出之儀先達而書付進候得共、伊予守如何存罷在候哉難計候二付此間同人江得内意候処其通二而宜候、乍然從御先詰直二外江罷越候事も可有之候、左候得者帰宅延引二相成候儀可有之候間御用番之退出を承り致退出可然旨申聞候、依之右御参詣者御本丸江致附人置御用番之退出申來次第可致退出候、尤九半打候ハ、例之通二可罷出候、同人御用番之節西丸御用向御心得之方江御構無之右之通御心得可被成候

九月

一 明和二酉年十月廿三日、朽木土佐殿被差出候書付二通左之通御老中支配若年寄支配打交拝領物有之節御礼罷出候迄当番罷在候儀も有之引候儀も有之、近來区々二付如何可相心得哉与右近將監殿江得御内意候処、前々之通侍座有之節者当番引候様二被仰聞候

十月

朽木土佐守

一 御鷹之鳥拝領之面々有之居殘謁御側衆江申達候儀、若御側

衆吹上江御供二被参不被居合候坎又候御用有之早速難被出趣之節者謁候段、御目付江申達置可罷出旨松平因幡守江対談之上弥右之通二相濟候

一 西丸当番居殘謁御側衆江申達候儀、西丸詰合無之御本丸江罷出申達候節も同様二相濟申候

但西丸御目付御本丸二詰合候者可申達候詰合無之候ハ、是又御本丸御目付江申達罷出候而も宜候、此等之儀此間曲淵勝次郎江申談置候

右之趣回状面出方ハ、御側衆吹上江御供二而不被詰合之節者其趣二認、其外ハ御用有之難被出候段被成候認可然候事

十月

朽木土佐守

一 明和二酉年十月晦日、朽木土佐殿方順達之書付二通久世出雲殿方被差越之

覚

右從御本丸以上使御鷹之雁被下置候為御礼罷出拙者謁御側衆詰合無之付御本丸江罷越候処、御側衆御用有之難罷出候由

二 付御用相濟次第申達候様二と——江申聞置候、以上

追加

於御本丸西丸御側衆御用有之難被出御目付江申聞置候節、

翌日伊予守江差出候届出之儀御側衆江申達候趣二相認候而

も可然哉、其候御目付江申達候趣二認候而も差支等無之哉

与此間西丸御側衆江及対談候処、御用在之難被出節者御目

付江申聞置候趣二而宜候旨被申候間、右之通御心得可被成

候

十月

朽木土佐守

一明和二酉十一月九日、於部屋土井大炊殿被相達候書付二通左

之通

去月廿三日右近殿於新番所前溜拙者江被申聞候者、御鷹之

鳥拝領之面々有之居殘御側衆江申達候儀、若詰合無之又者

御用有之難被出節者御目付江申達置罷出候儀先格も有之哉

与就御尋、致吟味追而可申上与及御挨拶候、右二付廿八日

御同人江居殘謁之儀御側衆詰合無之節御目付江申達罷出候

例書認差出候処、先格も有之儀其通相心得左様之節八七時

過迄見合、若不被出候者御目付江申達可罷出旨書面江致承

候付差出候様被申聞候付則致承付指出候、依之例書老通進之

候、以上

但七打四半過見合不被出候ハ、御目付江申達可罷出旨申

合候

十一月

土井大炊頭

卷上

書面之通可仕旨承知仕候、且七時過迄見合可罷出旨是又

承知仕候

十月廿八日

御奏者番

享保二十卯年

七月五日

牧野越中守

上使戸川内藏助
松平左京大夫

同 片桐帶刀
松平甲斐守

同 金田采女
松平大膳大夫

同 酒井權兵衛
細川越中守

同 弓氣田源七郎
松平播磨守

同 戸川内藏助
上杉民部大輔

右御鷹之雲雀被下之

同 弓矢多源七郎

松平讚岐守

同 金田采女

井伊掃部頭

一 右之面々為御礼罷出左近將監殿御指図二付居殘於席々拙者

謁戸田肥前守江申達候、右之内松平甲斐守松平大膳大夫松

平播磨守井伊掃部頭為御礼罷出謁候処、吹上江就御成御側

衆御供二而被相越候段大岡右近江還御以後御側衆江被相達

候様申談、七時前罷出候

寛保三亥年

七月十二日

当番

本多紀伊守

上使松平采女正

徳川右兵衛督殿

右御鷹之雲雀被遣之

一 右為御礼右兵衛督殿御登城、左近將監殿御指図付居殘於例

席掛御目御側衆江可申達処吹上江就御成詰合無之安部主計

頭江申達候

雲雀三十

上使津田外記

松平陸奥守

名代

伊達紀伊守

同

同 嶋田庄五郎

松平大隅守

同 菅沼藤三郎

松平佐渡守

同

同 金田主殿

松平兵部大輔

同

同 大沢式部

松平越前守

同

同 徳山五兵衛

松平大学頭

右御鷹之雲雀被下之

一 右為御礼罷出候面々右同断二付於例席謁同人江申達候

追而

一 今日為御礼罷出候面々吹上江御成付、御側衆詰合無之段承置

可申達旨安部主計頭申聞候付則同人江申達候

延享元子年

十二月二日

当番

松平豊後守

上使奥津帶刀

松平丹後守

同 遠藤宮内

松平市正

右御鷹之雁被下之

一 右之面々為御礼登城仕候ハ、拙者謁可申哉与左近將監殿江

相同候処、可致其通旨被仰聞候付居殘於席々謁御側衆江可申

達処、西丸江御供被相越詰合無之付還御之節被相達候様安

御奏者番

部主計頭江申達候

一 明和三戌年正月廿一日、朽木土佐殿被相達候書付左之通

一 上野増上寺紅葉山被遊御參詣還御之為伺御機嫌御門番衆被

出候節、御用番退出迄二被出候面々者為待置御用番退出相

濟如古格御謁有之候様二致度存候、其後罷出候衆ハ被謁候

様御目付江被仰置可然存候、前々之通二致度此段得御意候

正月廿一日

朽木土佐守

一 明和三戌年三月七日、加納遠江殿廻状追而之内左之通申来

一 今日同役衆病人多助先無之二付其段周防守殿江以常阿弥申

達御使先者加役衆二而被心得候様申談是又御同人江以同人

申達候、然ル処加役衆二而急助先不被心得与申儀者有之間

敷候間、以来御用日之外者加役衆二而も急助先被心得候様

可仕旨、今日急助入候ハ、土佐守相伴先方罷越候而可相濟

事之由御同人以同人被仰聞候

一 明和三戌年四月十六日、右近將監殿江牧野越中殿被差出候伺

書御附相濟候由二而同十八日以廻状被相廻候左之通

此度御元服御官位付御礼被為請候節、公方様江差上候御太刀

目錄幼少病氣隱居并被下御暇未在府仕罷在候面々、参府仕未

御礼不申上候面々之使者、四品以上共二不及伺於檢之間當

番謁可申候哉

一 右之使者謁一紙目錄認翌日差出可申候哉

一 右一紙目錄幼少病氣并被下御暇未在府仕罷在候面々、参府仕

未御礼不申上候面々其認分候二及申間敷候哉

一 一紙目錄四品以上之分一通同断、隱居之分一通、四品以下之

分一通同断、隱居之分一通都合四通相認可申候哉

一 在国在邑之面々方追々献上之分、四品以上も不及伺其節之當

番謁一紙目錄差出可申候哉

△

一 万石以下三千石以上之御太刀馬代者家来二為受取候迄二而

御座候

四月

幼少病氣并被下御暇未在府致し罷在候面々、致参府

御附礼
△ 未御礼不申上候面々其認届書二可被相認候、其外者

何茂可為伺之通候

一明和三戌年四月十七日、但馬守殿江土屋能登殿被指出候伺書
御差図相濟候由二而同廿日以廻状被相廻候左之通

卷上

伺之通差図相濟申候

御奏者番

此度御元服御官位之御礼被為請候節、大納言様江差上候御
太刀目録万石以上御本丸江登城之分者持参二而候得者、御
太刀馬代家来二為請取候迄二而書付等差出申間敷候

先年御転任御兼任之節之通此度も蘇鉄之間二而為受取可
申候

一万石以上幼少病氣隱居并被下御暇未在府仕罷在候面々、参
府仕未御礼不申上候面々方差上候御太刀馬代於檢之間当番
謁一紙目錄差出可申候

一万石以下三千石以上之御太刀馬代者家来二為請取候迄二而
御座候

一明和三戌年五月廿七日、牧野越中守殿被相達候申合之書付左
之通

從大納言様御三家方始其外江以上使被遺物等有之節於御本

丸上使被仰渡有之候共、以来者其趣西丸江申遣西丸廻状二差

出御本丸廻状二出申間敷与今日何茂申談候

五月廿五日

牧野越中守

一明和三戌年、土屋能登殿朽木土佐殿方被相達候書付

去朔日西丸当番之節但馬守西丸江罷出候砌、御礼衆謁之内二
付先年同人方御礼衆溜り不申候様二申聞候趣も有之候処、近
来其儀無之候二付添土佐守申談御礼衆謁之内二付中之間江
不罷出候段以盛阿弥申達其俣大広間二罷在謁相濟中之間江
罷出候、右二付以来五節旬月次其外御礼衆有之候節共前々之
通但馬守登城退出之内御礼衆有之謁之内二候ハ、其節以御
同朋頭申達中之間江罷出申間敷候、尤右之趣大目付衆御目付
衆江も申談置候間此段得御意候

六月

朽木土佐守

土屋能登守

一明和三戌年六月十日、申合之書付左之通

此度急助御使先之儀二付加役衆方被申談候付、猶又四人之衆

江対談之上申談候趣左二得御意候

一 急助之儀翌日御老中方登城之刻限二隨三時方前二候ハ、加

五月

牧野越中守

役衆江も順之通可申遣候、右刻限方以後二相成候ハ、加役

朽木土佐守

衆相除次之助順之方江可申遣候

土屋能登守

一 西丸急助之儀者平日迎も御本丸江被出候御用向勝二付、猶
以右之通相心得候様可致候

一 明和三戌年六月廿一日、土屋能登殿方被差越候申合之書付
左之通

但急助之儀御本丸之方者助先之加役衆并月番之衆江も

是迄助順繰方之儀、助者何レ之助二而も一順者何レ之添二

可申遣候、左候ハ、其時二より加役月番二而も御間合可

而も二二而相勤候様先達而申合有之候処、其後御内書渡之

被申旨、尤西丸之方者只今迄之通次之本役之方江直可申

節御番順添与中之間助与突合候節者方を相勤中之間助者

遣候

次之順二而相勤来候

一出火之節者急助之儀只今迄之通申遣間敷候、并御規式御成

右二付添順之儀兩様之様二相成候得共、御内書渡之節之添

日御門主御登城等之節是又急助次之本役之助順之方江可申

者御番順之添二而助順之添与者違候故、以来共二御内書之

遣候

節添助突合候ハ、御番順之添を相勤中之間助者次之順二

一 御使先之儀も右急助先加役衆二而被相心得候通取計可申遣

而相勤可然候、右之趣是迄之通二ハ候得共紛敷候付猶又此

候、尤出火之節者加役衆御使先二而も次順之本役二而相心

度申合候

得候様可致候

六月

内藤大和守

右之通申談候付加役衆助先并御使先之節者次順二而只今迄

土屋能登守

之通相心得可罷在旨何茂申談候

一 明和四亥二月、加納遠江殿方被差出候申合之書付左之通

去戌十二月朔日拙者西丸助御番之節一乘院御門跡大乘院門

跡使者御本丸江罷出候、西丸江献上之折紙御本丸御納戸

相廻候付延享四卯年十月十五日之例も有之候付添書認相助

候迄二而廻状二も差出不申候処、右献上之儀日記方江書付

差出候様致度段池田筑州被申聞候旨則書付差出候、以来右

之類之使者西丸江も献上物有之節者去戌三月朔日九条左大

臣殿より献上物有之候時之通廻状二差出、尤但馬守殿江書

付差出并日記方江も書付差出可然旨同役衆申合候、依之去

十二月朔日廻状之所江為御見合御留置被成候様致度存候

二月

加納遠江守

当番

西尾主水正

明和四亥八月朔日

一当時越中殿紅葉山火之番被相勤候付近例之通御使先順相除

キ被詰候時分、外二被出候衆も無之候節者急御使先者被相

心得候様今日何も申合候

明和四亥八月、朽木土佐殿方被差出候申合之書付左之通

去年以来急助先加役衆も被相心得候得共平日次之順本役二

ても前々之通心得候付、急助順左之通之節本役病氣等二而

難心得次之順江相頼置候節ハ、急助順一之加役衆江下手紙二

而誰江相頼置候段為知置可申候、尤両当番江案内手紙如例遣

可申候

加役

同

助同

本役

同

同

一右同断急助順左之通之節本役病氣等二而難心得次順江相頼

置候節者、次順之加役衆江不及掛合相除直二次之本役江相頼

置可申候、其段助順上之加役衆江誰江相頼置候旨下手紙二而

為知置可申候、尤両当番江案内手紙如例遣可申候

但用事二付外出之節御用番退出迄杯頼置候節も其趣二三

方江致案内置致帰宅候てハ致案内申間敷候、乍然急助頼置

候方江者帰宅之段可致案内候

加役

本役

助 加役

本役

同

一 御本丸加役衆当番日者平日之通二相心得候

一 西丸加役衆当番日者兩丸共本役計二急助心得可申候

八月

朽木土佐守

明和四亥年八月廿八日、於部屋土佐殿被達候申合書付

一 参勤之御礼就病氣以使者献上物之節在着共一紙目錄同役与

菊之間縁類詰名順是迄就区々、向後先格之通同役菊之間縁

類詰与可相認旨何茂申合候

一 参勤之御礼有之日右御礼兼而病氣之面々献上物之使者謁、

且又御礼書之内当病二而以使者献上物之分從御用番頭之御

書付御渡候ハ、是又謁、一紙目錄者一紙二認御用番江差出

可然旨是又申合候事

八月

明和四亥年九月廿三日、土佐殿被相達候申合書付

上野増上寺紅葉山江御参詣之節佐渡守御先江罷越候時分、紅

葉山者退散承り西丸当番可致退出候、上野増上寺者御本丸御

用番退出之儀承り可罷出候、若從紅葉山御本丸江罷出候ハ、

是亦退出之儀承り可罷出候

但去十六日拙者御本丸当番之節佐渡守紅葉山御先江罷越

候儀盛阿弥咄候付、右退出之儀大目付衆相談二付右之趣答

置候、去ル十八日被出候同役衆申談弥右之通相極大目付池

田筑州稻垣羽州江弥右之通相極候段兩人江咄置候、為御心

得申進候

九月

朽木土佐守

明和四亥年十月朔日、於部屋土佐殿被相達候申合之書付

月次其外西丸添有之節翌日差出候謁書認出来次第添番之方

江差遣為見可申候、若認出来兼候者下書成共遣為見可申候、

尤是迄之通扣も相違候筈二今日被出候同役衆申談候間、向後

右之通可被成御心得候

閏九月廿八日

朽木土佐守

牧野越中守

明和四亥年十月十六日、土佐殿被相達候申合書付

西丸当番之節御鷹之鳥拜領之面々有之居残謁御側衆江申達候儀、西丸二詰合無之節ハ御本丸江罷出可申達旨先達而之御書付二有之候得共、七時過二者御側衆溜り二被出候間西丸二而暫見合罷在、溜り二被出候ハ、直二申達候而も苦ケ間敷哉と右近將監殿江一昨十三日拙者御本丸助御番之節相伺候処、其通可然間御側衆江も其段可被仰達旨即日被仰聞候之間、八半頃迄二も謁相濟候ハ、只今迄之通御本丸江罷出御側衆江可申達旨申上置候、佐渡守江も右之趣申達置可然旨右近將監殿被仰聞候二付、佐渡守江も右之段申達候処承知之旨申聞候

十月十五日

朽木土佐守

一廻状面書方者八半頃迄も謁相濟御本丸江罷出申達候節者只今迄之通二御認被成可然事
一西丸二而相濟候節者左之通二而可然事



右從

拙者謁誰江申達候

追而

一今日以

居残謁申候誰々江も被下置候之由候得共、七打候迄不被出候付暫見合誰殿江被出候間申達罷出候

明和四亥年十月廿八日、土佐殿被相達候書付

新同役西丸初御番者是迄添罷出候得共、從二度目御番者添も無之余り不案内二而其身者不及申師匠共安堵不仕儀故此度何茂申談、右定式之添罷出候日之外二西丸御番二三度者申合一人部屋迄罷出、將又何そ事多日者右之外二も被頼次第忝人部屋迄罷出可然存候付、右之趣右近將監殿江拙者御内々御咄申候処其通仕可然旨被仰聞候、依之佐渡守江も同様之趣咄置申候処承知之旨申聞候
右之段為御心得得御意置候

十月廿七日

朽木土佐守

明和四亥年十月廿七日、戸田長門殿廻状追而之内左之通申来

一紅葉山上野増上寺御参詣之節予参之儀是迄不参之砌者同役

断二而相济候得共、向後者御用番江御届可申旨御同人被仰

聞候由池田筑州被申聞候

明和四亥年十月晦日

一一昨日長門殿廻状予参断之儀御用番江御届之儀留守居を以

御届申候而者助先御使先等二而当朝御届等間二合兼候儀二

付、右御届当番方仕度旨今日伊予守殿江土佐守於新番所溜

被申上候処可被仰談旨被仰聞候、其後伊予守殿土佐守江御

逢候而遅く候而も不苦候間御宅江相届候様二伊予守殿被仰

聞候旨土佐殿被申聞候

明和四亥年十一月十五日、朽木土佐殿方被差出候申合之書付

左之通

去月廿七日長門殿当番之節池田筑州被申聞候趣二付紅葉山

上野増上寺江御参詣之節予参罷出候段御届方之儀伊予守

江拙者得内意候処、月次出仕日断候節之通相心得候様申聞

候、右二付申合之趣左之通

一紅葉山御宮江御参詣之節者御請二付脱水等又者下血杯二而

予参罷出候段御用番江以使者御届可申達候、此日助先御使

先障り有之候ハ、次順江申遣次之順二而助先御使先之御方

共二御心得被成予参御勤被成候事

御用番江御届左之趣

口上覚

明日紅葉山御宮江就御参詣予参罷出候処何二而脱水出候
下血氣二付

不罷出右為御届使者申上候、以上

月日

名

一紅葉山御靈屋江御参詣之節不快痛所等二而予参罷出候段

御用番江以使者御届可申達候、此日助先御使先障有之候ハ、

次順江可申遣候、是又次之順二而助先御使先之方御心得被成

予参御勤可被成候

御用番江御届左之趣

口上覚

昨日紅葉山御靈屋江就御参詣予参罷出候処不快
痛所二付不罷出

※ 欄 外 朱

候、右為御届以使者申上候、以上

月日

名

一上野増上寺江御参詣之節不快痛所等にて予参不罷出候段御届之儀勿論之事二候

但助先御使先之者も助先御使先二而登城仕候間予参不罷

出候段以使者御届可申達候、**尤**両当番者御届申達候二不

及候 御本丸当番計御届申上二不及候

御用番江御届左之趣

口上覚

明日上野江増上寺江就御参詣予参可罷出候助先欵御使先欵二付登城仕候間

予参不罷出候、右為御届以使者申上候、以上

月日

名

但助先御使先共御届申達候後助御番御使先等二相成候

ハ、断返シ可致候

御用番江御届左之趣

口上覚

明日上野江増上寺江就御参詣予参可罷出候不快欵痛所欵二付不罷出候、

書

右為御届以使者申上候、以上

月日

名

御用番江御届左之趣

口上覚

明日上野江増上寺江就御参詣二付予参可罷出候助先欵御使先欵二付登城仕候

間予参二不罷出候段御届申上候御本丸助御番欵西丸御使先欵相動候二付猶

又為御届以使者申上候、以上

月日

名

一輕事二而茂二三日致登城候儀者御見合被成可然候

一右三ヶ所江御参詣之節共二予参不罷出旨差懸り断候節ハ御

用番登城後二而も御宅江相届可申候、成丈登城前迄二御届被

成可然存候

一紅葉山上野増上寺江御参詣之節助先御使先頼之儀助申来候

節之通段々送り二被成候可然存候、尤御成日前日不被仰出以

前前広二被仰談置可然存候

十一月

朽木土佐守

追加

一 兩御丸当番不快等二而助申遣候ハ、予参断御用番江御届可
申達候

下ケ札 △ 従是末新規

御用番江御届左之趣

口上覚

私儀明日 御本丸款
西丸款 当番之処何病氣ニ付難儀仕候間助番申遣

罷出不申候、 紅葉山江
上野江
増上寺江 御参詣有之候得共予参二も罷出候

付此段御届申上候、以上

月日

名

一 紅葉山上野増上寺江御参詣之節兩御丸助御番并西丸当番相

勤候ハ、其趣御届可申達候

御用番江御届左之趣

口上覚

明日 紅葉山江
上野江
増上寺江 御参詣二付予参可罷出候処 御本丸
西丸
西丸当番款 助御番款

二 付予参不罷出候、右為御届以使者申上候、以上

月日

名

亥十二月廿四日、従御城御持帰

予参不罷出候節御届之儀先達而追而書付之内二ケ条左之通
御扣御直シ置可被成候

一 上野増上寺江御参詣之節不快痛所等二而予参不罷出候段御
届之儀勿論之事候

但助先御使先之者も助先御使先二而登城仕候間予参不罷

出候段以使者御届可申達候、御本丸当番計御届申達二不及

候

下ケ札

△ 先達而進候此所兩当番ハ御届申達二不及候与申ケ
条御消被成、此度之ケ条御用可被成候

御用番江御届左之趣

口上覚

明日 上野江
増上寺江 御参詣二付予参可罷出候処 助先か
御使先か 二付登城仕

候間予参不罷出候、右為御届以使者申上候、以上

月日

名

但助先御使先共御届申達候後助御番御使先等二相成候

ハ、断返シ可致候

下ケ札

△ 先達而進候書付之内此ケ条無之付御書入置可被成

候

御用番江御届左之趣

口上覚

明日<sup>上野江
増上寺江</sup>御参詣二付予参可罷出候処<sup>助先款
御使先款</sup>二付登城仕

候間予参不罷出候段御届申上候処、<sup>御本丸
西丸</sup>相勤候付猶又

為御届以使者申上候、以上

月日

名

下ケ札
△ 右同断

追加

一両御丸当番不快等二而助申遣候ハ、予参断御用番江御届可

申達候

△

下ケ札

△ 従是末新規

御用番江御届左之趣

口上覚

私儀明日<sup>御本丸款
西丸款</sup>当番之処何病氣二付難儀仕候間助番申遣

罷出不申候、<sup>紅葉山江
上野江
増上寺江</sup>御参詣有之候得共予参二も不罷出候

付此段御届申上候、以上

月日

名

一紅葉山上野増上寺江御参詣之節両御丸助御番并西丸当番相勤候ハ、其趣御届可申達候

御用番江御届左之趣

口上覚

明日<sup>紅葉山江
上野江
増上寺江</sup>御参詣二付予参可罷出候処<sup>御本丸
西丸</sup>助御番款

二付予参不罷出候、右為御届以使者申上候、以上

月日

名

明和五子年二月六日、朽木土佐殿押合方廻状二而左之通申来

以廻状致啓上候、然者当正月七日土佐守御本丸当番之節御隠

居様方方年頭之為御祝儀御太刀馬代上り候付、板倉源丞殿名

順之儀是迄菊之間御縁頼詰之次二而御座候処、御同役様方御

参勤之御礼御病氣之節、以御使者御献上物一紙目錄并御在着

御礼之節共去年被仰合有之間以前之通相直シ被申候、将又井

上山城守様御順之儀も当時井上筑後守様菊之間御縁頼詰之

御上座江被成御出候付是又相直シ被申一紙目錄右之御順二

而相済申候得共、猶又大井伊勢守様江御聞合被申候処別紙之

通被仰越候、此段為御心得各様迄拙者共方可得御意旨被申
付候条如斯御座候、以上

別紙

土井伊勢守様方被仰越候書付

戸田伊賀守

板倉源承

安藤大和守

間部若狭守

大久保山城守

土井大隅守

松平彈正忠

井上山城守

京極主膳正

下ケ札を以左之通申来

井上山城守養子筑後守当時大坂御定番被仰付、候御

定番居順者菊之間縁頼詰之上二而御座候、先年遠藤

備前守大坂御定番被相勤候内養子下野守菊之間縁頼

詰嫡子之上座江罷出候間、右格ニ准シ山城守も菊之間
縁頼詰隠居之上座与拙者共相心得罷在候、其外之名順
も御書面之通ニ拙者共相心得罷在候

明和五子年二月十二日、於部屋土屋能登殿被相達候申合書付左之
通

西丸添入候節前旧当番廻状ニ誰殿被出候様申遣候砌其仁被
出候得者西丸当番二も承知之事ニ候得共、右添申遣候方不快
等二而次順江添之儀申遣候節者西丸当番承知無之儀ニ付、向
後二而添之儀次順江申遣候節者承知二而添二被出候方西
丸当番江下手紙二而案内申遣可然旨申談候

二月

朽木土佐守

土屋能登守

明和五子年三月廿八日、朽木土佐殿被相達候申合之書付左之通

都而御三家方家来於御黒書院御礼有之節も是迄者御白書院

二而稽古在之候得共、向後者御黒書院二而稽古有之可然旨何

茂申談池田筑州桑原善兵江申達已後共二右之通相極候

三月

朽木土佐守

同年四月二日、申合之書牧野越中殿方来左之通

大納言様御城外御成之節居残之儀此間伺相濟候二付、御成被仰出御詰所御支度等御沙汰有之候ハ、居残順二申遣代り

合可申候、御詰所御支度等も無之候ハ、代り合二及申間敷

候、何レ二も前日御成被仰出候節之当番之者承合否之儀御

成当日之西丸当番之者江可申遣与何茂申談候

四月

朽木土佐守

牧野越中守

同年五月廿五日、於部屋土屋能登殿被相達候申合書付左之通

去ル廿二日越中守就御番替拙者儀御本丸当番相勤候節、松

平阿波守松平出雲守使者江於檢之間右近將監殿御逢之節、

拙者儀例席江罷出目錄差出出雲守目錄御請取候上同所御縁

類大目付衆上江引致着座相濟申候、然処御同人以三阿弥右

於檢之間使者引候迄者当番出席之所二罷在候様御覚候、致

如何引候哉と御尋二付唯今迄目錄差出御請取相濟候得者引

候心得二罷在候段申達候、猶又右之趣土佐守江茂御尋之処

前々ハ引不申其俣罷在候先格之段申達候処左様可有之事候、

年寄衆二も右之通御覚候間、向後者於檢之間使者江御逢之節

使者口上申上退候迄者其俣罷在候様一統可申合候旨御同人

以三阿弥被仰聞候

五月

土屋能登守

寛延二巳年八月十五日、申合之書付左之通

一惣出仕之節只今迄之通席々江可罷出候

一公家衆御対顔御返答之節退出之砌只今迄之通大広間四之間

江可罷出候

一公家衆御暇之節地下拝領物之時只今迄之通柳之間江両三人

可罷出候

一御礼日御白書院御縁類二而被仰渡并拝領物之節只今迄之通

溜二可罷在候

但四月六月御暇之節拝領物之節も可罷出候

一都而芙蓉之間拝領物之節只今迄之通御障子際二可罷在候

一御普請御手伝相濟家来大勢拝領物之節者非番罷出有之候

ハ、一兩人如先格可罷出候、右之外非番者芙蓉之間二可罷在

候

一此間申談候通新役之内ハ勿論三四年過候而も一度茂御当り無之儀有之節ハ、非番二而も御出被成様子御覽被成候様可仕旨去ル十二日相模守殿江御咄申候処御承知之由被仰聞候

巳八月十五日

朽木土佐守

明和五年七月

昨十四日紅葉山御参詣付豊後守初御番前候間予参二者不罷出当番之通御目見二罷出候心得二御座候、当時御届も有之儀付如何可仕哉と一昨十三日拙者儀豊前守為添罷出候節被出候同役衆申談無急度御用番右京大夫殿江以順阿弥申達候処、見習ハ同様之儀候間初御番前二而も予参之方江罷出可然旨被仰聞候旨同人申聞候付、其段豊後守江申達昨日予参之方江罷出相濟申候、此段為御心得得御意置候

七月十五日

土屋能登守

明和六丑年三月十五日、於部屋土屋能登殿被相達候申合書付左之通

三季献上御内書渡之節西丸助御番入候者朝助とハ違御番之儀候間、西丸助御番を一二而相勤中之間助を二二而勤西丸

朝助を三二而相勤可申候、尤西丸助御番無之節者是迄之通中間助を一二而相勤西丸朝助を二二而勤可然候、右者先達而之申合二無之候間猶又此度申合候

三月

内藤大和守

土屋能登守

明和六丑年四月十二日、手紙二而被差越候申合書付

去ル二日兵庫頭助御番之節遠御成有之、御居残之老衆登城之節当番中之間江不罷出候処右近将監殿以三阿弥御沙汰有之候付、同役衆申談之上今日御同人江以同人は迄不罷出候趣無急度申達候処、以来者御居残之老衆登城之節当番中之間江罷出候様御同人被仰聞候旨三阿弥申聞候付、向後中之間江可罷出旨何茂申談候

四月十日

内藤大和守

大岡兵庫頭

明和六丑年六月五日、土能登殿内藤大和殿於部屋被達候申合之書付左之通

惣而助御番申遣候節兼而不快二而御番替之儀相頼候ハ、可

成たけ八前々日二茂相頼、若不相調候者前日遅くも暮頃迄
二茂助御番申遣可然候、尤差懸り不快又ハ差合等之節も成
たけ早く助御番申遣可然候

一月次并不時御礼衆等有之候節当番不快二而差懸助相立候節
者用意之品々不殘取揃助相勤候方江可相送儀勿論之事二候、
尤遅成可申節者下手紙二而案内申遣置可然候、助順若段々
相障り流候節及深更候ハ、手紙二而申遣候已前二先下手紙
二而案内申遣置可然候

右之趣唯今迄茂面々承知之事二者候得共御礼日等之節差支
も有之候而者如何二も御座候而、御互之儀二付猶又此度何
茂申談候

六月

土屋能登守

内藤大和守

明和六丑年八月十日、西尾主水正牧野越中守方以廻状被相廻候
書付左之通

当八朔進上之帳西丸当番越中守兩人申合去五日差出申候、
然処去月廿八日松平土佐守帰国之御礼献上物之儀二付土佐

守於国元承知上差扣之格二相心得候様二被仰渡候趣前晚致
承知候、乍去土佐守八朔献上者有之儀候得者御帳二者名前有
之候、右例致吟味候得共相当之例も無之二付御帳者致持参周
防守江以順阿弥無急度相同候処、土佐守八朔献上有之事二候
得者其俣差出候様申聞候付右御帳同人江差出申候、只今迄茂
上帳之節右体之儀も可有之候得共此儀者廻状二面二も不出
事故面々控も無之二付、以来者年始八朔三季其外御祝儀事等
二而献上物有之御帳差出候節相替儀も有之候ハ、追而其節
之当番方右之訳在府同役衆江者廻状二而相廻シ、在邑之同役
衆江者押合廻状二而相廻シ可然旨今度同役衆申談候、依之以
連名得御意候廻状御順達留り之從御方主水正方江御返却可
被下候、以上

八月十日

西尾主水正

牧野越中守

明和六丑年八月廿日、申合之書付左之通

御鷹野御成之節居殘順之通被出候得者其日之当番二も承知
之事候得共、右申遣候方不快等二而次順江居殘之儀申遣候節

者当番承知無之儀二付、向後者居残之儀次順江申遣候節者
承知二而居残御番被勤候方より当番江下手紙二而案内申遣
可然旨申談候

八月

牧野越中守

宝曆四甲戌年二月廿八日

急助申来候節指懸御用等有之節次之助順江申遣候而八間違
相成可申候、且助順之方病氣等二而急助心得之儀申来相心
得候節茂同様之儀候得者、拙者共四人急助并急助心得共二
御除候様致度候段申談、急助并急助心得候儀次之順二而被
心得候筈申合候

二月

青山因幡守

明和七庚寅年正月五日、申合書付美濃守方差出左之通

正月七日万石以上隠居之面々例年年頭之御祝儀御太刀馬代
以使者差上兩当番一紙目録半切是迄即日指出来候処、近来
人数多二而差懸り認違等有之候而者間二合不申候付、何茂
申談翌日差出候様仕度旨昨日右京大夫殿江以順阿弥相伺候
処其通可致旨以同人被仰聞候、依之右之趣豊後守殿江以同

人申達候処御承知之旨以同人被仰聞候付此段得御意候

正月五日

松平丹波守

明和五戊子年八月廿七日

土岐美濃守

西丸当番之節御用有之御本丸江罷出候付難相勤段助順之方
江是迄申遣候得共、已来者御本丸江罷出候与申儀不認御用有
之難勤与可認、若其日不快等二而登城不致候共断返之手紙茂
遣間敷段美濃殿内寄合二而申合候事

松平伊賀守

同年八月廿八日、從御城御持歸

唯今迄新同役御本丸初御番前為見習西丸江被出候儀廻状二
不差出候得共、為見合以使者廻状二差出可然旨何茂申談候

八月廿八日

内藤大和守

明和七寅年三月朔日、松平丹波殿西丸当番之節於部屋被相達候書
付

去月廿五日拙者儀西丸助御番之節公家衆謁書今日差出候様
豊後守以盛阿弥申聞候付則以同人差出申候、其節盛阿弥迄

前々右謁書即日翌日与相交近来者翌日差出候趣咄置候処、
其後同人以同人公家衆御対顔御返答之節共、以来手廻能認
出来候ハ、即日差出候様可致旨寄々同役申談置候様無急度
以同人申聞候付此段得御意候

三月朔日

松平丹波守

明和七寅年閏六月朔日

兩御丸御鷹野御成之節居残之儀加役衆月番ハ相除次之順江
直二可申遣旨何茂申談候

閏六月朔日

仙石越前守

内藤大和守

同年同月十日

不快二而当番難相勤候節者致御番替不相調候者助相立、且
差懸り不快二而御番替申遣候間無之節者其趣を以是迄之通
直助相立可申候、且又右不快方引続不被出其次当番茂難相
勤節見合候得共耽与無之差懸御番替茂難申遣趣二而直二助
申遣候儀是迄間々有之候得共、以来者最前之不快方引続不
罷出其次御番難相勤節者何連二も致御番替候之上不相調候

者助相立可然候、右之趣只今迄も面々承知之事二者候得共
区々二茂有之候間猶又此度何茂申談候

閏六月

内藤大和守

同年八月八日

去月廿六日越前守西丸当番之節御三家方懸御目外謁之儀者
御目付方申達候而謁候様豊後守殿以盛阿弥被仰聞候付、猶又
同役申談同廿九日兵庫頭西丸御番之節御三家方御登城以前
之儀是迄之通可仕哉と豊後守殿江以宗阿弥伺候処、何連二茂
謁之儀者先達而被仰聞候通謁置不申候様可致、御三家方懸御
目候而直二大広間謁候而ハ致混雜候付其所者御目付懸ケ合
謁候様溜詰茂少々見合謁候様可致旨被仰聞候、右二付猶又右
程間之儀御目付石野八大江兵庫頭懸合候処以来程能時分被
申聞候筈二申談候、且御礼衆被出候儀其外使者出候儀前々被
目付方被申聞候処近来坊主組頭方直二申来候付、同役申談当
朔日西丸御番伊勢守添番越中守兩人二而石野八大江以来
前々之通御目付方被申越候様申談候、右之趣為御心得申達候

八月八日

本多伊勢守

明和七庚寅年八月九日

大岡兵庫頭

当八朔進上之帳去五日差出申候、然処御老中方并京都所司
代大坂御城代嫡子座順之儀当五月五日被仰渡之趣二付、松
平左京亮名前桁明無之相認申候

一献上無之分用意書付之内藤堂大膳亮当閏六月六日日本家相統
被仰付、鍋嶋和泉守去月五日日本家相統被仰付候名順之儀家
督順二相認可申哉高順二相認可申哉難相決候付、同役衆申
談之上右名順前後両通二相認御尋茂有之候ハ、其節相伺可
申心得二而致持参候処御沙汰も無之付不差出相濟申候、且
右両家跡相統未被仰付茂無之候付右書付候名前書載不申候、
此段為御心得得御意候、廻状御順達留り之御方方備後守方
江御返却可被下候、以上

八月九日

太田備後守

本多伊勢守

明和七庚寅年八月八日

去月廿六日越前守西丸当番之節御三家方懸御目外謁之候儀

者御目付方申達候而謁候様豊後守殿以盛阿弥被仰聞候付、猶

又同役申談同廿九日兵庫頭西丸御番之節御三家方御登城以
前之儀是迄之通可仕哉与豊後守殿江以宗阿弥伺候処、何連二
而も謁之儀者先達而被仰聞候通溜置不申候様可致、御三家方
掛御目候而直二大広間謁候而ハ致混雜候付其所者御目付懸
ケ合謁候様溜詰も少々見合謁候様可致旨被仰聞候、右二付尚
又右程間之儀御目付石野八太江兵庫頭懸合候処以来程能時
分被申聞候筈二申談候、且御礼衆被出候儀其外使者出候儀
前々御目付方被申聞候処近来坊主組頭方直二申来候付同役
申談当朔日西丸御番伊勢守添番越中守両人二而石野八太江
以来前々之通御目付より被申越候様申談候、右之趣為御心得
申達候

八月

本多伊勢守

大岡兵庫頭

同年九月九日

去ル三日右近將監申聞候者柳之間御老中御逢候三季献上差
合等二而後レ出候分者致如何候哉相尋候付、前々方之趣相糺

候処区々二而當時者多分申達謁半切差出候、前々区々之趣御座候得者同候方二可有之哉与存候段申達候之処、何連二茂候而宜候段申聞候付五日拙者当番之節松平播磨守後レ献上出候付掛り右京大夫江伺候処、謁候様申聞候付於松之間謁半切同人江以順阿弥差出相濟候、右之趣二付柳之間御老中御逢候分計以後同候方二相極候、何茂申談為御心得書付進申候

九月

松平伊賀守

同年九月廿八日

当月九日西丸下馬殊之外込合申候間以来御礼衆不溜置謁候様可致旨去十日右近将監殿美濃守能登守江被仰聞候、依之翌十一日兩人西丸江罷出豊後守殿江右之趣申上、且月次御礼日等之節先頃方御三家方御登城御退散之節共御目付方案内有之謁候二付何二茂御礼衆溜可申候間、以来謁方等是迄与者取計違不申候而者同様之儀与奉存候段申上候処、謁方之儀同役申談書付候而差出候様被仰聞候付同役衆申談之上書付認去十五日豊後守殿江能登守盛阿弥を以差出候処御請

取被置、一昨廿六日右書付之通相心得尤前々之通御礼衆溜り不申候様可申合候、且向々江茂右之趣御同人方御達可被成者能登守江被仰聞候付此段得御意候、則別紙書付差進申候

九月廿八日

土岐美濃守

松平能登守

同年九月廿八日

卷上

御奏者番

月次其外出仕等有之節私共大目付御目付御礼衆罷出候、以前より芙蓉之間二相詰罷在忝人二而も出懸謁申候ハ、込合申間敷奉存候、右之段大目付御目付江被仰渡候様仕度奉存候一御三家方御登城以前二而も御礼衆出仕次第謁可申候哉一御三家方御登城之節当番懸御目候哉之儀相知候迄者是迄当番添番兩人共之間二扣罷在候得共、以来ハ当番添番之内忝人右之節中之間江罷出忝人者謁之方二罷在候様仕、御手前様御出被成候節者御同朋頭江懸合置、同朋頭方案内次第謁懸候而茂兩人共出席仕又ハ御差函二而私共掛御目候ハ、其節も兩人罷出懸御目候様可仕候哉、尤溜詰出仕之節も同様相心得

可申候哉

一被仰渡或者使者等御逢被成候節御手前様御登城被成候与御目付方席々寄有之中之間二扣罷在候、此儀も以来者当番添番之内耆人中之間江罷出耆人者謁之方二罷在是又御同朋頭江懸合置、御手前様表江御出以前御同朋頭方案内有之兩人出席仕候様可仕候哉

右之通仕候ハ、込合申間敷哉と奉存候

九月

明和七庚寅年十月十六日

別紙左之通

御三家方江豊後守殿江被懸御目候節前々之通御白書院後御廊下江御同朋頭出候を見掛候而桜之間江御案内二罷出候様可仕旨、昨五日拙者西丸当番之節御同人以盛阿弥無急度被仰聞候付為御心得得御意候

十月六日

内藤大和守

同年十月

別紙左之通

惣而習礼罷越候儀元服之節三人其外者二人限可罷越候尤間柄等二而相越候者も有之候者夫共二右人数二限り罷越可然旨何茂申談候

十月

内藤大和守

戸田長門守

同年十一月

一十一月七日從御城持参加役衆当番助番被勤候日若出火有之節御番者不被勤克二付、年寄衆登城候得者急助先之者其心得二者候得共助之儀不申来以前二而も助先之者押合召連罷出部屋明候様可致候、勿論加役衆未退出前候ハ、助先之者何連二も罷出代合押合も為代可申候、西丸者遅ク候而者御番明候様二可相成候間前日其心得可致候、勿論加役衆方助之儀者差急キ可被申越候筈二候得共、右承候而者品二寄遅成候二付尚又何連も申談候

十一月

内藤大和守

同年十一月廿日

豊後守殿直御本丸江登城之儀前日之西丸当番方翌日之当番

江為心得下手紙二而申遣來候得共、五節旬月次等之外平日
例刻登城之節者以來申遣間敷候、刻限早キ節者御本丸西丸
之無差別是迄之通可申遣旨申談候

十一月

内藤大和守

明和八卯年正月七日

去ル十三日能登守西丸当番之節高家衆布衣以上之御役人御
拳之鶴御料理頂戴之為御礼西丸江登城有之候処、高家衆退
出之節迄不被出候付例之通御目付衆江申達置候而致退出候、
依之翌十四日美濃守西丸当番之節右謁書能登守方美濃守方
江差越則豊後守殿江以盛阿弥差出候処、高家衆御役名謁書
二無之候間認加差出候様以同人被仰聞候付、明日退出之節
迄不罷出候付謁不申候段以同人申達候処、先達而右御礼登
城之儀御書付茂出其上謁之伺茂有之候儀二付高家衆御役名
謁書二認差出候様被仰聞候、左候ハ、在府遠国奉行茂認加
差出可申哉与猶又相伺候処、遠国奉行之儀者布衣以上御役
人之内江籠り候付高家衆御役名計認加差出候様以同人被仰
聞候間其通相認差出申候、其節以来之儀如何相心得可申哉

と相伺候処御書付出謁之伺等有之節者御役名二而差出候、謁
書者右御役名不洩様相認差出可申候、且御書付も出不伺御
機嫌等之節者是迄之通相心得候様被仰聞候付此段得御意候

十二月

松平能登守

土岐美濃守

明和八卯年正月十一日

御番間二者見合同御機嫌罷出候儀前々方申合二候、弥此已後
申談御番間見合同御機嫌可罷出候、登城前等相勤御番間登城
不致儀者如何二候間左様之節者部屋迄罷出候様可致候、且加
役衆御番之節者差懸り候御用等茂有之候間一兩人罷出居候
様致し可然候、新役衆別而繁々被出被申談候儀勿論二候、古
役之面々茂右之通罷出候得者新役衆江伝達も宜候間是迄茂
見合罷出候事二候得共尚更此後右之通申合候付得御意候

正月

内藤大和守

同年二月十五日

惣而表向方御礼申上候目録御納戸廻り之儀無之筈候得共、無
拠訛二而御納戸方相廻り候者無遲滞西丸当番江差越候様

前々も申達候節御納戸頭挨拶之趣茂有之候処近来遲滞有之、

其上後献上有之節不分明之書付差越豊後守殿江差出候書付

等差支茂度々有之候、別而後献上有之節者其誤委細承糺書

付差越候様猶又支配之面々江得与被申付候様去月十五日拙

者西丸当番之節馬場善五兵衛江申談候処、委細致承知候段

被申聞候、然処去十二日拙者御本丸江罷出候節善五兵衛詰

合二而被申聞候者、去月十五日拙者申聞候趣御本丸方同役

共江も申談組頭并支配之者共江も得与申聞、向後無遲滞相

廻別而後献上有之節者委細之書付相添御奏者番之家来衆江

可申談旨申渡置候間、此段承置候様被申聞候付致承知候、

其段同役中江も可申達置旨及返答候、此段為御心得得御意

候

二月

戸田長門守

同年五月廿八日

惣而坊主衆頼申達候儀是迄者面々了簡次第二頼候処、以来

者同役衆及相談多分之存寄次第致出精候者を相頼候積り、

尤呼出頼候節も申談相極且坊主衆之内平日無精之面々者以

来頼及断出精之者江相頼候様可致与此度何茂申談候

五月廿八日

牧野越中守

内藤大和守

本多伊勢守

同年八月

当八朔進上之帳加藤近江守去月六日於在所致病死候、然処献

上物就相濟候明和六丑年五月加藤出羽守例茂有之候間名前

相除半切認右京大夫殿豊後守江差出申候、此段為御心得得御

意候、廻状御順達御留り之御方を伊勢守方江御返却可被下候、

以上

八月九日

井伊兵部少輔

小出伊勢守

同年八月廿五日

去ル四日豊前守当番之節日光御社参二付為御宿割罷越候、帰

府之御目付并御番衆於御黒書院溜右近將監殿御逢候、同八日

越中守助番之節同断帰府之御目付并御番衆於同席右京大夫

殿御逢候、右両日共御廻り以後付羽目之間江被罷出可然存候

付大目付衆承合候処、何茂不罷出候段被申聞候付兩日共当
番羽目之間江不致出席候得共、以來者右体之節御廻り以後
二候者当番致出席可然二付越中守池田筑州江懸合候処大目
付衆二茂以來者可被出旨被申聞候付、此以後御黒書院溜江
年寄衆御一人二而茂御出席之節御回り以後二候者当番羽目
之間江致出席可然旨何茂申談候

八月

牧野越中守

牧野豊前守

明和八卯年九月廿六日

年始八朔後レ献上之一紙目錄以來者正月八月之御月番江差
出候様去ル廿三日佐渡守殿以順阿弥被仰聞候、然処猶又翌
廿四日右一紙目錄やはり是迄之通其月々之御月番江可差出
候、其節何方江可指出旨被仰聞候儀茂可有之段御同人同人
を以被仰聞候、此段為御心得得御意候

九月廿六日

牧野越中守

同年十月十五日

西丸出懸り謁有之節前日西丸当番方其趣大目付衆江為心得

申達置可然旨何茂申談候二付其段池田筑州江咄置申候、依之
為御心得得御意候

十月

土屋能登守

同十九日

大納言様表方御成之節五半時前二候ハ、御本丸之通当番為
御目見罷出間敷候

一豊後守殿登城之儀前日方不相知候ハ、四時前ハ御本丸之通

中之間江罷出申間敷候旨何茂申合候

十月

牧野越中守

戸田長門守

御鷹之雁拜領之節病氣等二而名代之儀可成丈手明之同役衆
相頼可然候、若手明無之差支二者被為召被出候衆之内名代可
相頼旨何茂申合候

十月

牧野越中守

戸田長門守

同年十一月十一日

去月十八日禁裏附高部式部御目見之節披露之儀、寛保元酉年

八月十五日之通御黒書院御敷居外少下り罷在候様相心得可
申哉と周防守江以順阿弥前日之当番越中守相伺候処其通相
心得候様申聞候、然処於披露席差懸り右京大夫殿御差図有
之別紙懸ケ繪図之通相濟申候、依之右繪図一枚為御扣相廻
申候、御写留被成留之御方兵部少輔方江御返却可被下候、
以上

十一月十一日

井伊兵部少輔

繪図面之通周防守江差出置候処、披露之節右京大夫殿御指図
二而懸繪之通相濟申候

「 図 ⑦ 」

明和八卯年十一月十五日

西丸二御居残謁之儀吹上江御成之節者御側衆申込不被出候
得者御目付衆江申達致退出、山里御庭江御成之節者御側衆
被出候儀二付御側衆江申達候而致退出候事二御座候処、相
絶候儀二も御座候付猶是迄之通二相心得罷在哉之段去朔
日伊勢守当番之節豊後守江以宗阿弥相伺候処、同七日豊前
守当番之節吹上江御成之節者御本丸之通二相心得、山里御

庭江御成之節者是迄之通二相心得候様二と豊後守以宗阿弥
申聞候、依之得御意候

十一月

牧野豊前守

小出伊勢守

明和九辰年二月十六日

別紙

来ル十九日聖堂積菜之節寄附物覚

金貳百疋

五万石以上

同百疋

貳万石以上

銀貳兩

壹万石以上

右之通当積菜之節可致寄附旨申合候

二月

同年三月十二日

当番
土岐美濃守

廻状追而

一此度同役衆之内類焼等二而遠方住居も有之候間在邑之衆江
者廻状以来共翌日差遣、尤即日心得相成候儀有之節者是迄之
通一同廻状差遣可申与今日被出候同役衆申合候

同十五日

別紙

當時拙者儀内桜田御番所相勤候付明和二酉年土屋能登守内

桜田御番所相勤候節之例を以、両御丸当番日出火之節者先

登城仕罷出候同役共与代り合御番所江相詰候心得罷在候段

佐渡守殿江以三阿弥無急度申達候処、致書付二差出候様同

人を以被仰聞候付去十一日書付差出候処、橋本喜八郎を以

承附候様被仰聞翌十二日承附同人を以差出候、依之別紙承

附書付忝通并申合書付忝通差遣申候、以上

三月

牧野豊前守

別紙

卷上

当番日出火之節者当番之方江助差出御番所江相詰可申旨被

仰聞承仕候

辰三月十一日

牧野豊前守

私儀内桜田御門番相勤候付両御丸当番日出火之節者先登城

仕罷出候同役共与代り合御番所江相詰可申候、依之申上置

候、以上

三月十一日

別紙

拙者儀内桜田御門番相勤候付両御丸当番日出火之節者不致

登城直二御番所江相詰可申候、其節者助先之御方江助之儀可

申遣候得共、助立之手紙御待合無之助先之御方八直二御登城

被成候様何茂申合候付此段得御意候

三月

牧野豊前守

評定所焼失二付當時式日無之候間来月御番割式日者拙者共

御用日相除不申相調申候、此段為御心得得御意候

三月廿八日

土屋能登守

拙者儀當時半蔵口御門番相勤候付両御丸当番日出火之節者

不致登城直二御番所江相談可申候、其節者助先之御方江助之

儀可申遣候得共、助立之手紙御待合無之助先之御方者直二御

登城被成候様何茂申合候付此段得御意候

六月

牧野遠江守

去月十七日拙者西丸当番之節従日光御門跡例月御祈祷之御

礼以普門院被差上之九時迄見合謁申候処、右使僧江周防守殿可被成御逢旨以順阿弥被仰聞候段御本丸当番豊前殿方被申越候得共、其以前謁申候付其段周防守殿江以順阿弥申達候処猶又先格之儀御尋二付寛延四未年九月十七日宝曆九卯年十一月十七日之例書認翌十八日御同人江以順阿弥差出候処、以來於西丸從日光御門跡例月御祈禱之御礼上り候節豊後守殿御登城無之御見廻り之老衆御越之節者謁之儀其度之相同可申候、且御三家方使者其外使者等御逢候分八只今迄之通九時迄見合謁候様可致旨右近殿以順阿弥被申聞候、此段為御心得得御意候

七月

本多伊勢守

七月七日

当番 本多伊勢守

廻状追而

一 當時豊前殿遠江守御門番兵部少輔拙者火之番二付先例之通御使先順相除詰合候時分、外二被出候衆も無之節者急御使先八相心得候様今日何茂申合候

昨十四日紅葉山御参詣被仰出候付當時拙者儀半蔵口御門番

相勤候付予参相勤候格合不相知候間、一昨十三日詰合同役衆申談之上当番越中守無急度佐渡守殿江以順阿弥相伺候処、行列之格合二而御門番非番八予参可相勤候当番八予参相勤候二不及之旨御同人以同人被仰聞候、此段為御心得得御意候

七月十五日

牧野遠江守

去月廿二日拙者御本丸当番之節松平和泉守初而在着之使者出候付先格之通謁可申哉与佐渡守殿江以三阿弥相窺候、然処和泉守松平遠江守在着使者初而二而茂以來不及伺謁候様御同人以同人被仰聞候、此段為御心得得御意候

八月

牧野遠江守

廻状

当八朔進上之帳加納河内守去二日致病死候、然処献上物就相濟候旨卯年八朔加藤近江守例茂有之候間名前相除半切認右京大夫豊後守江差出申候、此段為御心得得御意候廻状御順達御留り之御方方因幡守方江御返却可被下候、以上

八月九日

太田備後守

戸田因幡守

明和九辰年九月朔日

去ル十八日拙者西丸当番之節御法事中為御機嫌從御三家方
以使者御菓子被差上候、豊後守直御本丸江登城二付例之通
為待置候処九時同人登城二付直中之間江罷出候、同人登城
右使者江逢候而相濟申候、其以後盛阿弥申聞候ハ今日之御
三家方使者之趣二以後共二相心得可申候、以前之なま物之
外者兎角見合候事二候処諸事明御殿之節之振合故区々二相
成候与存候、勿論差定御使者ハ是迄之通九時迄見合謁可申
候、格段之使者ハ今日之通二而宜候、見合候程合之儀者何
連二茂同人登城迄為待置候方宜候旨同人申候段盛阿弥申聞
候、此段為御心得得御意候

八月

松平能登守

明和九辰年九月九日

御本丸当番方差急キ西丸江申遣候儀有之節以来御使之者を
以上書殿文字相用内通申遣可然何茂申談、其段桑原善兵江
申達候処承知二而向方同役江も可申談置旨被申聞候、西丸
方も同様之儀二付是又岩本内膳江申談候処承知二而向方同

役江茂可申談置旨被申聞候、尤右者ハ至而差懸候節之儀二而
先少可成丈者是迄之通外通り申遣可然旨何茂申合候、右之段
為御心得得御意候

八月

牧野越中守

本多伊勢守

安永二巳年二月五日

去ル朔日主殿頭以三阿弥同役共之内逢可申段申聞候付則拙
者新番所前溜江罷出候処、年始方今日迄之長披露聊無滯段御
沙汰之旨申聞候、依之被出候同役衆江右之趣申達右御礼之儀
差懸難相知最早同人退出二付、何茂申談之上同人宅江拙者罷
越御礼之儀得内意候処昨日否可申達旨申聞候、然処宝曆三酉
年正月朔日之類例茂有之二付翌二日同人江右類例申置候処、
昨日申聞候者御沙汰之儀を申達候様二与之儀二者無之御沙
汰之儀を同人申聞候事二候、御礼之儀同人二者直二承置候段
申聞候間一同難有段拙者御礼申上候、非番御老中方江茂登城
前伊賀守拙者追々罷越御礼申上同役一同不及罷越段是又同
人申聞候、且被出候同役衆申談之上右之趣廻状二者差出不申

候付此段為御心得得御意候

二月

土岐美濃守

同年二月十五日

昨十四日主殿頭以三阿弥当番江逢可申旨申聞候付拙者新番所前溜江罷出候処、当月朔日進物番進物杯出候儀間有之遅ク候付以来者間合不切様いたし、桜之間御敷居際江御礼衆引候頃進物杯出御目通り江罷出候儀間合拔不申様肝煎致差引、尤其段進物番江も可申達旨申聞候付右之趣昨日被出候同役衆江も申達候、依之今日進物番稽古も見可申旨両番頭衆江も可申達与是又昨日同役衆申談之上、則北条房州井上志州江拙者逢候而右之段申達置候付此段為御心得得御意候

二月十五日

土岐美濃守

安永二巳年二月廿二日

明廿三日来ル廿五日出仕之御書付二無之万石以上之面々者以使者御機嫌相伺候様之御書付有之候付、右両日同役一統登城いたし候共伺御機嫌之儀ハ御用番并豊後守殿御宅江以使者御機嫌相伺候様今日被出候衆申合候

二月廿二日

内藤大和守

同年八月十五日

評定所御普請就出来前々之通式日有之候間式日御用日拙者共名前相除御番割相調申候、此段為御心得得御意候

八月十五日

土屋能登守

同年八月廿一日

参勤後初御番之節病氣二而助御番二相成翌日より助立之儀申遣候得共初御番不相濟以前西丸助御番相勤候様二も相成、先格無之宝曆十二年三月十八日之節者西丸明キ御殿之儀二有之、以来初御番不快二而助立候節翌日方助順之通申遣両御丸共無差別快氣二候ハ、助御番相勤若助立無之節者直二西丸御番相勤候様可致候、右二而以来初御番助二相成候節助順之通相勤候儀廻状追而二差出申間敷、且右之通助二相成候後者両御丸当番助番共廻状返事差遣申間敷候段何茂申段候

八月

内藤大和守

土岐美濃守

安永三年五月五日

周防守申聞候者新役諸事手重二相成万端致增長候得者御奉
公二茂相障候事二付、以來左様無之様猶又拙者共申談候様
申聞候付左之通申合候事

一新役出迎相止メ候事

一新役初番前後勝手次第同役江入来之事

一師範江之音物之儀者宝曆十四申年右近將監殿江朽木土佐守

書付差出候趣二弥相違無之致增長間敷事

但五万石以上二而茂差別無之与有之候間十万石二而も同

様之事

一新役江外押合之者差遣不申候儀二有之候得共、此以後猶又

差遣申間敷候事

一同役頼六人

但同三人者当番之節新役押合見習差遣候事

一同役頼之六人江初番等茂相濟候後反物之類二端鮮肴一折宛

差遣候事

一同役一同江鮮肴一折宛差遣候事

一新役押合見習差出候儀頼三人之押合之者江初番相除候而金

三百疋宛、手はなれ相濟候而金三百疋宛相贈候事

一廻状紙之儀新役当分八大奉書等相用候得共、以來者初番之節

方並廻状紙相用候事

一初而師範招之節及断候上菓子肴遣候事

一以來新役方之音物之儀師範江者先達而土佐守申合差出候通、

其外頼等之同役江茂贈物此度申合之外者增長無之様猶又申

合候

右之書付之趣周防守内見有之二付相違無之様御心得可被成候

五月

土屋能登守

牧野越中守

松平伊賀守

土岐美濃守

安永四未年

去ル七日拙者御本丸当番之節西丸御小性西尾出雲守年頭之

御祝儀就差合延引御太刀馬代御納戸江相頼候由、依之当日御

納戸より可相廻之处翌八日相廻候、右二付払方御納戸頭依田

十郎兵衛西丸御納戸頭馬場善五兵衛江懸合候者右後レ之儀

以使者可差出筭之処、御納戸廻りハ内々之儀ニ候得者当日

二相廻義勿論之義ニ候、此度者当日相廻り候積り取計可申

候得共、以来翌日被相廻候而ハ難受取候間以後者無間違当

日被相廻候様申達置候、此段為御心得得御意候、以上

正月廿八日

土岐美濃守

同年二月廿二日

西丸助番

井上河内守

廻状追而

一因幡守養女当時痘瘡相煩候付明和八年二月十五日之趣を以

豊後守殿江相候様申越候付、明和卯年二月十五日被仰聞候

趣ニ相心得罷在候旨御同人江以盛阿弥申達候之処、被成御承

知其通相心得候様御同人被仰聞其段因幡守江申達候間為御心

得申進候

同年二月廿六日

紀伊中納言殿より向後伺御機嫌等御城附被差出候由及承候、

右二付御三家方西丸江被差出候使者之内豊後守御本丸江登

城濟候段承り候得者定例ニ而当番謁候使者も有之候、其節中

納言殿御城附右二准被差出候ハ、如何心得可申哉内々盛阿弥

迄咄置候様中納言殿御城附被差出候儀表向江者被仰達有之間

敷候、何事ニ不寄御城附被差出候儀者当番構不申、何レニ茂唯

今迄御三家方御城附被差出候節之通心得候而宣旨豊後守内存

盛阿弥迄噂有之候由御座候、右之段為御心得申進候

二月

太田備後守

同年四月十六日

仙石越前殿方直書ニ而左之通廻状来ル

廻状

牧野越中守

尚以加賀守方江達之儀も表坊主組頭木村養哲儀同人方江

懇意の由二付御差函之趣申合、加賀守方江申通候様申達候

以廻状啓上仕候、然者松平肥前守江以上使御鳥等被下置候為名

代加賀守被出候節者、西丸江茂為御礼被出候由二付相当之例者

無之候得共、西丸当番居殘謁之儀右近將監江得内意候処右之趣

致書付二御用番江伺候様申聞候間、去ル九日主殿頭殿江伺書進

達仕候処即日御書取を以承附候様被仰聞候付、則承附致し翌十

日御用人江再達仕候、依之右伺書写壹通為御扣相廻申候、御順

達留り之御方御返却可被下候、右之段可得貴意如斯御座候、

以上

四月十二日

牧野越中守

卷上

未四月九日主殿頭殿江以順阿弥越中守進達、即日御書取を承

附候様被仰聞直御渡、翌十日承附御同人江越中守直再達

肥前守為名代加賀守西丸江者不罷出積相心得居殘候二及不

申、縦罷出候而茂居殘謁不申段加賀守方江も達置可申旨被

仰聞承知仕候

未四月九日

牧野越中守

御奏者番

松平肥前守江以上使御鳥等下置名代罷出候節名代計二而外二

御鳥被下置直參御礼之者無之候得者從前々居殘之儀窺不申候

得与、肥前守名代加賀守罷出候節者外直參御礼之者無之候而

茂御本丸二而者其節々居殘之儀相同罷出候得与当番謁候心得

二罷在候、右之節西丸当番茂居殘謁可申唯之哉相番之例茂無

之候間此段奉伺候

四月

越前殿方之廻状并來申年日光御社參之節勤方同書老通河内殿

方到來二付懸一覽則致廻達候、以上

五月

太田備後守

廻状

仙石越前守

此間松能登守当番之節池田筑州被相達候、來申年日光御社參御

留守中勤方同書去寅年相調差出候通近々佐渡守殿江差出可申

候、依之伺書老通猶又懸御目申候、早々御順達留り之御方より

御返却可被下候、已上

四月廿九日

仙石越前守

猶以右伺書來月三日頃差出候心得御座候間早々御廻達可被下

候、且備中殿二者御暇中候得共此節參府主水殿伊勢殿二茂滯府

之儀故懸御目候、以上

御奏者番

日光御社參御留守中当番平日之通罷出日々於中之間伺御機嫌

可申候哉

一御留守中同役申合候而西丸江一度為伺御機嫌罷出可申候哉

一御社參首尾克相濟候御左右有之候砌同役一同於中之間御祝儀

可申候哉

一御留守中当番調方等之儀平日之通相心得其外差懸候儀者享保

年中御社参之節之趣を以其節々相伺候様可仕候哉

右之通奉伺候

五月

宝曆二申年ヨリ相伴之留

申三月十八日

紀伊殿御暇二付

周防殿

同三月十八日

松平大膳大夫

土佐殿

森兵部殿

同三月廿五日

戸沢上総介

飛驒殿

金兵部殿

同三月廿七日

松平伊賀守

鳥伊賀殿

遠江殿

宝曆三酉年

酉二月廿三日

尾張殿年始御振廻

河内殿

内大和殿

同三月十九日

尾張殿御暇二付

撰津殿

同四月廿九日

井上河内守家督祝儀

飛驒殿

因幡殿

同五月十八日

松平大和守同断

紀伊守殿

土伊予殿

同十一月廿五日

尾張中將殿熊五郎殿

周防殿

御誕生御祝儀

土佐殿

宝曆四戌年

戊正月十八日

紀伊殿年始御振廻

土伊予殿

森兵部殿

同五月十三日

松平伊予守家督祝儀

飛驒殿

下野殿

同五月廿五日

松平加賀守同断

阿伊予殿
永伊賀殿

宝曆五亥年

亥正月十八日

紀伊殿年始御振廻

撰津守殿
黒大和殿

同正月廿一日

尾張殿同

順紀伊守殿候得共頼二而大和殿
順大和殿候得共紀伊守殿

紀伊守殿

永伊賀殿

同三月十五日

尾張殿御暇二付

内大和殿

同九月廿五日

水野織部正家督祝儀

周防殿

金兵部殿

同十月廿三日

松平佐兵衛督同断

飛驒殿

同閏十一月十三日

榊原式部大輔將軍宣下御祝儀

飛驒殿

同十月廿七日

土佐殿

内大和殿

井伊掃部頭同断

飛驒殿

同正月十九日

順伊予殿之処不快二付永伊賀殿

土佐殿

尾張殿年始御振廻

永伊賀殿

同十二月十一日

紀伊殿

常陸助殿元服
御一字被遣候付

伊予殿

同正月廿一日

撰津守殿

周防殿

水戸殿年始御振廻

兵部殿

順金兵部殿二候得共御本丸当番付伊予殿被相越候

右御相伴二付立帰之御礼も入不申候

同三月十五日

鳥伊賀殿

尾張殿御暇二付

宝曆六年
子正月十八日

紀伊殿年始御振舞

金兵部殿

松平安芸守家督祝儀

撰津守殿

永伊賀殿

永伊賀殿

同五月十三日

佐竹右京大夫家督祝儀

永伊賀殿

松平陸奥守家督祝儀

撰津守殿

下野殿

黒大和殿

同八月廿五日

松平肥後守家督祝儀

金兵部殿

森兵部殿

同三月廿三日

順伊予殿候得共臨時評定有之趣被
相越周防殿被申越候而、周防殿被相
越候

同九月十八日

紀伊殿家督祝儀

肥前殿

紀伊殿初而御暇二付

伊予殿

大和殿

森兵部殿

同五月十三日

順 候得共賴二付森兵部殿

小笠原伊予守家督祝儀

周防殿

順土佐殿候得共賴二付肥前殿

兵部殿

宝曆八寅年

同十一月十三日

寅正月十八日

順周防殿候得共金兵部江相賴候

水戸殿初而御暇

大和殿

紀伊殿年始御振舞

周防殿

酒飛驒殿

大和殿

宝曆九卯年

順大和殿候得共賴二付壹岐殿

卯正月廿二日

同月廿一日

飛驒殿其外病人多被參候衆無之壹

尾張殿年始御振廻

阿飛驒殿

岐殿被相越候

酒飛驒殿

水戸殿同断

飛驒殿

同三月十五日

金兵部殿

尾張殿御暇二付

采女殿

同四月廿七日

松平阿波守家督祝儀

撰津守殿

酒飛驒殿

辰正月十八日

紀伊殿江

大炊殿

土佐殿

同八月廿五日

紀伊殿御婚姻之御祝儀

越中殿

越中殿不快付酒飛驒殿被相越候

同月廿一日

大和殿病氣付大炊殿被相越候

兵庫殿

水戸殿江

大和殿

同九月十一日

松平薩摩守江

阿飛驒殿

同四月六日

兵部殿

越中殿

御転任御兼任之為御祝儀

同十月四日

松平右京大夫殿江

兵部殿

尾張殿江

能登殿

酒飛驒殿

大和殿御番替付飛驒殿被相越候

酒飛驒殿積氣付兵部殿老人被相越候

同月十三日

候

右同断為御祝儀

右相伴相越候同役病人多兵部老人相越候段、四日当番越中

紀伊殿江

和泉殿

守左衛門尉殿江以良阿弥申達候

越中殿

宝曆十辰年

同四月廿一日

御転任御兼任為御祝儀

水戸殿江

飛驒殿

能登殿

同月十八日

右同断為御祝儀

松平伊予守江

内膳殿

同月廿七日

右同断為御祝儀

松平薩摩守江

越中殿

土佐殿

同月廿三日

將軍宣下御祝儀

尾張殿江

摂津守殿

同五月二日

右同断為御祝儀

松平陸奥守江

和泉守

能登殿

同十一月二日

御転任御兼任為御祝儀

松平肥後守江

采女殿

大和殿

同十月十一日

右同断為御祝儀

藤堂和泉守江

采女殿

摂津守殿

能登殿差替二付越中殿被相越候

同月六日

將軍宣下為御祝儀

松平伊予守江

飛驒殿

外同役衆相障飛驒殿老人被相越候

段青阿弥を以相模守殿江申達候

同月七日

家督為祝儀

南部大膳大夫江

和泉殿

藤堂和泉守江

宝曆十巳年^(十一)

采女殿
大和殿

同月十一日

將軍宣下為御祝儀

松平肥後守江

大和殿

巳正月十九日

尾張殿年始御振舞

内大和殿

同月十三日

同断為御祝儀

水戸殿江

内膳殿
飛驒殿

同月廿七日

水戸殿年始御振廻

采女殿
出雲殿

同月十八日

御転任御兼任為御祝儀

松平相模守江

摂津守殿
大和殿

同二月四日

將軍宣下御祝儀

能登殿
兵庫殿

同月廿一日

將軍宣下為御祝儀

飛驒殿

同二月五日

御転任御兼任御祝儀

内大和殿
飛驒殿

松平隱岐守江

摂津守殿

松平安芸守江

采女殿

同月七日

右同断御祝儀

同三月十一日

出雲殿

有馬中務大輔江

内膳殿

右同断御祝儀

讚岐殿

伊達遠江守江

内膳殿

同月十八日

將軍宣下御祝儀

同月十八日

飛驒殿

松平薩摩守江

采女殿

御転任御兼任御祝儀

黒大和殿

酒井雅楽頭江

能登殿

同月廿三日

御転任御兼任之御祝儀

同月廿一日

兵庫殿

松平安芸守江

能登殿

將軍宣下御祝儀

兵庫殿

松平相模守江

内大和殿

同月廿五日

尾張殿御暇二付

内大和殿

兵庫殿

同月廿七日

將軍宣下御祝儀

右同断御祝儀

松平隱岐守江

兵庫殿

同月廿五日

右同断御祝儀

南部大膳大夫江

飛驒殿

御転任御兼任御祝儀

酒井左衛門尉江

飛驒殿

讚岐殿

同月七日

采女殿

將軍宣下御祝儀

同月廿七日

右同断御祝儀

有馬中務大輔江

能登殿

同月十一日

内膳殿

御転任御兼任御祝儀

同月廿九日

松平相模守家督祝儀

出雲殿

松平右近将監江

能登殿

兵庫殿

同月十三日

巳四月二日

將軍宣下御祝儀

酒井雅樂頭江

内大和殿

松平右近将監江

出雲殿

兵庫殿

同月廿五日

同月五日

御転任御兼任御祝儀

松平右京大夫江

采女殿

同二月二日

兵庫殿

將軍宣下御祝儀

同月廿六日

松平筑前守江

越中殿

將軍宣下御祝儀

出雲殿

松平右京大夫江

能登殿

同月六日

内大和殿

御兼任之御祝儀

宝曆十二壬午年

松平大膳大夫江

采女殿

午正月十九日

尾張殿年始御振廻

能登殿

同月十一日

出雲殿

將軍宣下之御祝儀

土佐殿

同月廿一日

土佐殿頼二付

松平大膳大夫江

能登殿

水戸殿年始御振廻

采女殿

兵庫殿

大和殿

同月廿一日

同月廿九日

御兼任之御祝儀

出雲殿病氣二付

御兼任御祝儀

松平加賀守江

采女殿

松平筑前守江

能登殿

大和殿

土佐殿

同役病人多大和耆人可參候哉と相伺候処、御使者并御内書御

渡候付添二出候得共、相濟候上二而采女可罷越旨御指図二

而罷越

同月廿五日

鶴千代殿初而御対顔

相濟候御祝儀

能登殿不快頼二付

水戸殿江

采女殿

兵庫殿

午二月廿七日

將軍宣下御祝儀

松平加賀守江

大和殿

兵庫殿

同三月四日

紀伊殿年始御振舞

采女殿

兵庫殿

同月十三日

將軍宣下御祝儀

松平陸奥守江

采女殿

同月十八日

御兼任御祝儀

松平讚岐守江

采女殿

同月廿一日

御兼任御祝儀

松平阿波守江

大和殿

同月廿三日

將軍宣下御祝儀

松平阿波守江

采女殿

同月廿七日

將軍宣下御祝儀

松平讚岐守江

采女殿

大和殿不快二付

土佐殿

同四月二日

御兼任御祝儀

井伊掃部頭江

采女殿

同九月二日

御兼任御祝儀

松平越前守江

越中殿

同月六日

井伊掃部頭江

大和殿頼二付

兵庫殿

出雲殿

同月十五日

將軍宣下御祝儀

松平越前守江

内膳殿

内大和殿

同月七日

將軍宣下御祝儀

秋元但馬守江

大和殿

兵庫殿

土佐殿

同月十六日

御兼任御祝儀

松平土佐守江

内大和殿

采女殿

同閏四月十八日

將軍宣下御祝儀

井上河内守江

越中殿

出雲殿

同月廿五日

水戸殿江

内膳殿

和泉殿

同月廿二日

井上河内守御役儀祝儀

大和殿

同月廿七日

左衛門督殿元服之御祝儀

内膳殿

采女殿

將軍宣下御祝儀

松平土佐守江

内大和殿

内膳殿

同月十八日

若君様御誕生御祝儀

松平加賀守江

撰津守殿

午十月二日

松平越前守江家督祝儀

采女殿

内膳殿

同月十九日

若君様御誕生御祝儀

紀伊殿江

黒大和殿

宝曆十三年

未正月十九日

尾張殿年始御振廻

土能登殿

松能登殿

同三月十三日

若君様御誕生御祝儀

松平越前守江

松能登殿

采女殿

同二月四日

若君様御誕生御祝儀

尾張殿江

兵庫殿

遠江殿

同月廿七日

將軍宣下御祝儀

上杉大炊飯頭江

内大和殿

出雲殿

同月十三日

紀伊殿年始御振廻

内膳殿

采女殿

同四月朔日

遠江殿

兵庫殿

尾張殿初而御暇二付

采女殿

若君様御誕生御祝儀

松能登殿

松平阿波守江

内大和殿

同月二日

將軍宣下御祝儀

黒大和殿頼二付

松能登殿頼二付

遠江殿

松平下総守江

出雲殿

同九月二日

遠江殿

若君様御誕生御祝儀

同月五日

若君様御誕生御祝儀并

松平陸奥守江

越中殿

墓目御用就被仰付候

同月十一日

酒井雅楽頭江

土能登殿

若君様御宮參相濟候付

大炊殿頼二付

井伊掃部頭江

兵庫殿

土佐殿

同月七日

若君様御誕生御祝儀

同月十三日

松平下総守江

出雲殿

井伊掃部頭江

黒大和殿

遠江殿

同月廿七日

未九月廿五日

采女殿

將軍宣下御祝儀

立花左近將監殿江

越中殿

遠江殿

若君様御誕生御祝儀

松平讚岐守江

土能登殿

板美濃殿

同十月二日

若君様御誕生御祝儀

酒井左衛門尉殿江

越中殿

遠江殿

若君様御誕生御祝儀

松平周防守江

越中殿

土美濃守頼二付

同十月七日

若君様御誕生御祝儀

松平右近將監江

大炊殿

土佐殿

同月廿一日

松平周防守御役儀祝儀

板美濃殿

兵庫殿頼二付

同十月十一日

若君様御誕生御祝儀

秋元但馬守江

采女殿

越中殿

同五月十一日

若君様御誕生御祝儀

松平肥後守江

土美濃

出雲殿頼二付

宝曆十四申年

申三月十八日

越中殿

同九月十一日

將軍宣下之御祝儀

松平出羽守江

越前殿頼二付

大和殿

能登殿不快二付

加遠江殿

伊賀殿

同月廿七日

松平信濃守家督祝儀

土能登殿

戸大炊殿

同二月十八日

松平安芸守家督祝儀

兵庫殿

加遠江殿

同月廿三日

若君様御誕生御祝儀

松平土佐守江

松能登殿

酉三月四日

若君様御誕生御祝儀

出雲殿不快二付外被相頼候得共

段々相障候処、今日御用付相廻候付

申談之上土大炊殿被相越候

明和二酉年

酉正月十九日

尾張殿年始御振廻

土大炊殿

松平薩摩守江

出雲殿

牧遠江殿

同月廿三日

若君様御誕生御祝儀

松平信濃守江

越前殿

同月六日

尾張殿江

御鷹野就御成越前殿居殘御番被勤候処土能登殿被相越候

右兵衛督殿元服之御祝儀

越前殿

出雲殿

加遠江殿

同月廿五日

不快二付土能登殿

戌年正月十八日

阿部伊予守御役儀之祝儀

出雲殿

紀伊殿江年始且御任官御振廻

兵庫殿

松能登殿

対馬殿

同九月十八日

紀伊殿御家督之御祝儀

板美濃殿

若君様御誕生御祝儀

能登殿

戸大炊殿

松平筑前守江

主水殿

戸大炊殿御番替二而越中殿被相越

候

同二月十三日

同月廿一日

若君様御誕生御祝儀

候

越中殿御番替二而加遠江殿被相越

脇坂淡路守家督祝儀

土佐殿

松平大膳大夫江

越中殿

長門殿頼二付

対馬殿

土佐殿

同三月七日

同月廿五日

若君様御誕生御祝儀

頼二付越中殿被相越候

細川越中守江

大炊殿

松平相模守江

板美濃殿

土佐殿

戸大炊殿

同月十一日

越中殿不快二付

明和三戌年

松平出雲守家督祝儀

板美濃殿

同月十三日

將軍宣下御祝儀

兵庫殿

御理髮御用相勤候付

御番替二付

細川越中守江

能登殿

松平肥後守江

能登殿

遠江殿

御番替不相調

大炊殿

同月十九日

若君様御誕生御祝儀

御番替二而

九月十一日

藤堂和泉守江

采女殿

細川越中守江

土美濃

同月廿一日

御兼任御祝儀

越前殿

三月廿二日

紀伊殿初而御暇二付

兼而八板美濃殿之处差掛不快二付

佐竹右京大夫江

大和殿

対馬殿

同月廿五日

加遠江殿

四月廿二日

御加冠御用相濟候付

將軍宣下御祝儀

能登殿

井伊掃部頭江

越中殿

同人江

長門殿

伊賀殿

十月五日

五月七日

大納言様御誕生御祝儀

同人江

出雲殿

尾張殿年始御振廻

土能登殿

同月七日

牧遠江殿

御番替二付

出雲殿

同人江家督祝儀

大炊殿

同月廿一日

越前殿

水戸殿年始御振廻

兵庫殿

同月十一日

秋元但馬守再御役儀祝儀

采女殿

三月十八日

大和殿

大納言様御誕生御祝儀

采女殿頼二付

十二月四日

水戸殿江

能登殿

有馬中務大輔江

松能登殿

右御招請相延候

加遠江殿

十一月廿一日

同月十八日

水戸殿御家督御祝儀

松能登殿

田沼主殿頭御役儀祝儀

越中殿

加遠江殿頼二付

越前殿

兼而者丹波殿長門殿被相越候筈之
処御番替二付越中殿被相越候

明和四亥年

明和五子年

正月十九日

正月十八日

紀伊殿年始且御官位御振廻

丹波殿

十月十八日

豊前守不快頼二付豊後殿被相越候

長門殿

板倉佐渡守御役儀祝儀

豊後殿

兼而者能登殿丹波殿被相越候筈之

遠江殿

処能登殿当朝二至不快二付長門殿

明和六丑年

被相越候

正月十九日

兼而大炊頭候得共御用有之、美濃守

正月廿一日

水戸殿年始御振廻

兵庫殿

二者西丸当番之処御用有之助立候得共御用相济候付美濃守相越候

備前殿

尾張殿年始御振廻

美濃

四月九日

紀伊殿江就御暇

主水殿

同月廿一日

豊前殿

四月廿五日

尾張殿江

兵庫殿

水戸殿年始御振廻

大和殿

備前殿

四月九日

万寿姫君様御結納御祝儀

尾張殿江就御暇

備後殿

九月廿一日

松平内蔵頭家督祝儀

越前殿

水戸殿江御婚礼相济候付

豊前殿

備後殿

豊後殿

兵庫頭御番替豊後殿被相越候

四月四日

十一月廿二日 能登殿

紀伊殿江御暇二付

備前

田沼主殿頭御役儀之祝儀

伊豆殿

四月廿一日

備前

明和七庚寅年

右近殿江御加増之祝儀

伊豆

正月十八日

兼而者備前殿二も被相越候筈之処
不快之外病人多被参候衆無之長門
殿忝人被相越候

美濃

兼而八兵庫頭之処差懸就不快美濃
守罷越候

殿忝人被相越候

守罷越候

紀伊殿江年始御振廻

長門殿

十一月廿五日

大和

同廿一日

豊後守殿江

大和

水戸殿江年始御振廻

伊勢殿

遠江

長門殿

明和八辛卯年

兼而者兵庫殿候得共痔疾氣故頼二
三月廿五日

三月廿五日

越前

付長門殿被相越候

尾張殿江

越前

三月十八日

兵部少輔

將軍宣下御祝儀

豊前殿頼二付兵部少輔罷越候

松平美濃殿江

丹波

十一月六日

豊前

対馬

小笠原左京殿江

豊前

明和九辰年

正月廿一日

水戸殿江

伊勢

右者兵庫頭不快二付相伴順割替之儀割元江申遣右之通
割替出候事

豊前

三月廿一日

尾張中將殿江

越中

兵部

豊前

兼而者備後殿長門殿被相越候筈之

初而尾州江御暇二付

処備後殿頼二付豊前守相越、長門

但先達而相伴書付ハ相廻リ不申候

殿二者頼二付兵部少輔相越候

四月十三日

松平讚岐守殿江

備後

同廿五日

松平筑前殿江

対馬

対馬

兵庫

安永二巳年

正月廿五日

松平筑前殿江

対馬

尾張殿江

土能登

長門

伊勢

伊勢

兼而者長門守可相越筈之処頼二付

兼而者伊賀殿被相越候筈之処頼二付土能登守相越候

伊勢殿被相越候

同廿一日

水戸殿江

大和

尾張殿江

備中

長門

伊勢

大和殿不快二付正月十九日割替来

正月廿一日

追而

水戸殿江

松能登

一今日尾張殿江為相伴備中守遠江守相越申候、兼而者伊勢殿被相越候筈之処御番替二付遠江守相越候

長門

長門守御本丸助御番二付正月廿日割替来

十月廿一日

正月廿一日

丹波左京殿江

水戸殿江

兵部

越前

遠江

松能登

兼而八松能登守相越候筈之処頼二

追而

付兵部殿被相越候

一今日添御番順二而貴様候得共御用付次順越前殿二八丹波左京大夫江相伴、次之順越中殿二者貴様御同様其次備

安永三年年

正月十九日

後守罷出候

水戸殿江

豊前

一今日左京大夫殿江為相伴松能登守兵部殿被相越候、兼而

対馬

者越前殿可被相越筈之処頼二付兵部殿被相越候

四月廿一日

安永四年年

正月十九日

尾張殿江

河内

越前

三月十八日

松平隱岐殿江

對馬

兵部

追而

一今日隱岐殿江為相伴對馬守兵部少輔相越候、兼而八相

模殿可被相越答之處質二付兵部少輔相越候

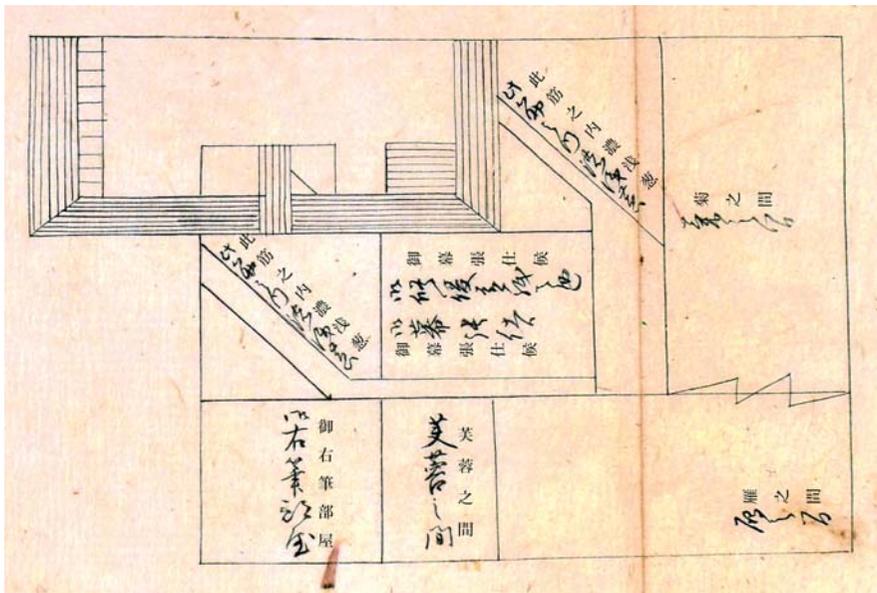
三月廿二日

紀伊殿江

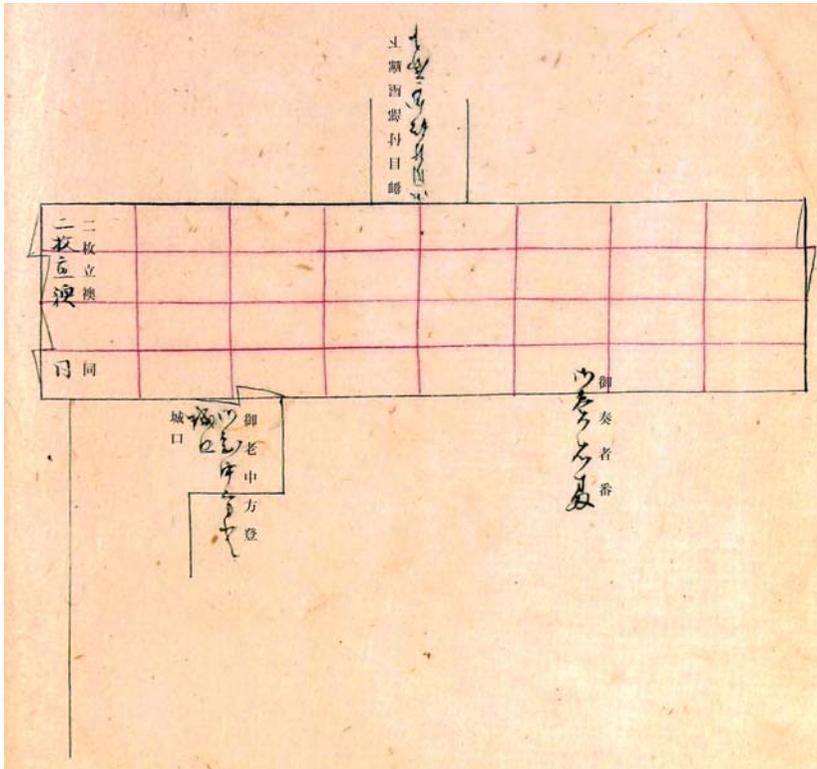
土能登

采女

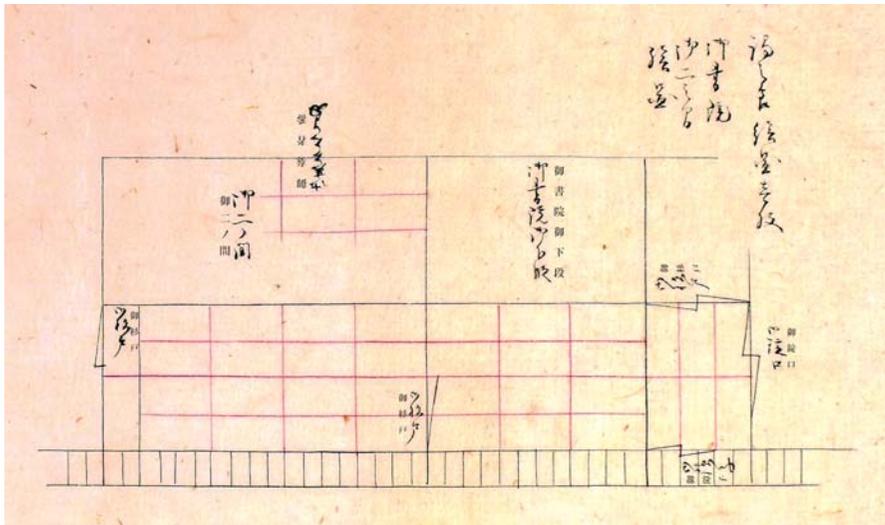
「 図 ① 」



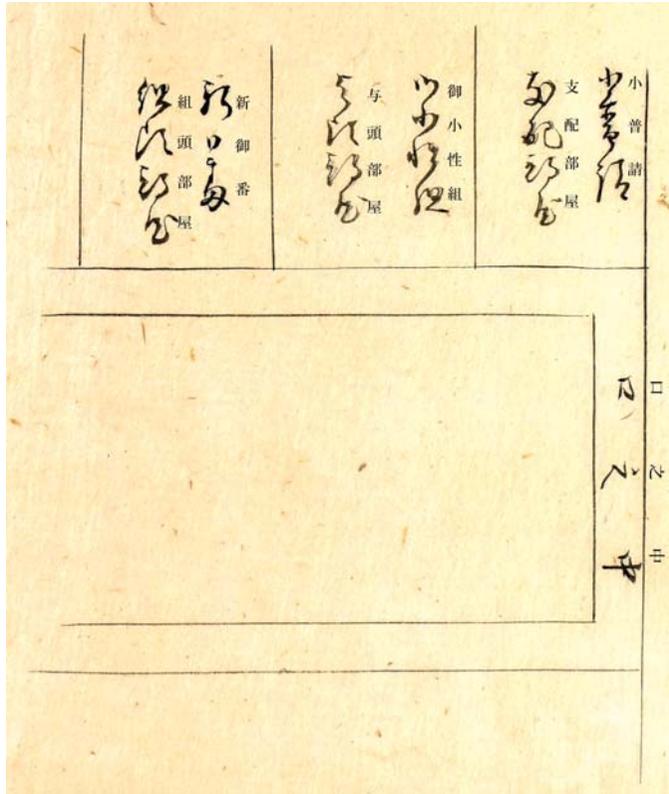
「 図 ④ 」



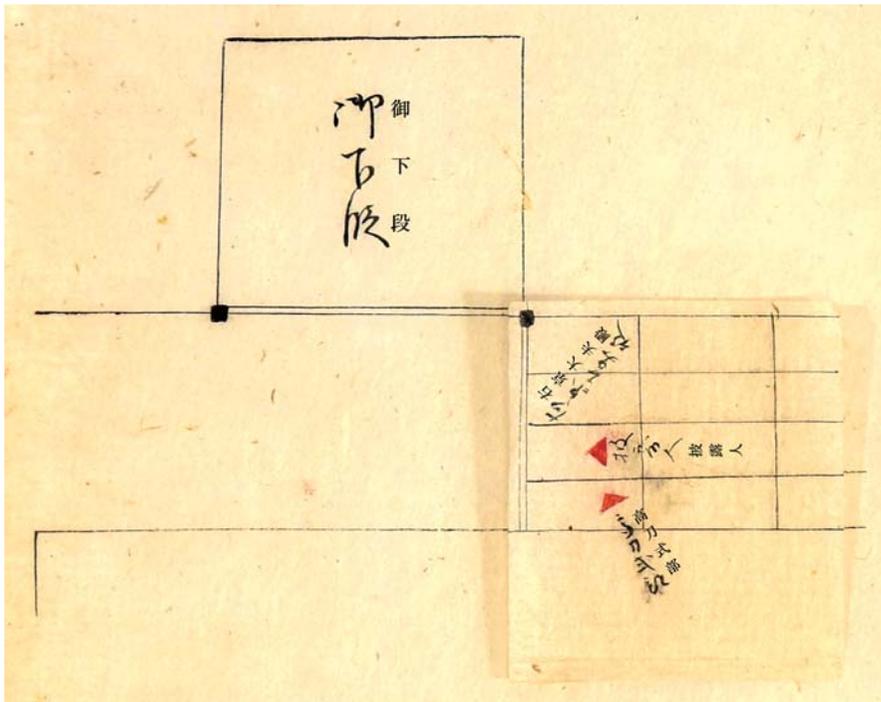
「 図 ⑤ 」



〔図⑥〕



〔図⑦〕



東京阿部家資料 文書編(12)

発行日 二〇二二年(令和四年)三月二十九日

編集 福山市経済環境局文化観光振興部文化振興課

歴史資料室

福山市霞町一丁目一〇番一号

〒七二〇・〇八一二

☎〇八四・九三二・七二六四

発行 福山市教育委員会

印刷・製本 株式会社かもめいと